
Devilangel

如月 琴李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Devilangel

【Nコード】

N5702Y

【作者名】

如月 琴李

【あらすじ】

青子は人間を墮落させられない悪魔。あまりにも実技の点が悪いので、特別課題をこなすために人間界へ向かうことに。しかしそこで出会った黒羽快斗とそのマジックが、他人の運命を変えるはずの彼女自身の運命も変えていく。

このお話は、まじっく快斗よりで、原作無視のかなりぶっ飛んだパラレルです。若干訂正を加えての再アップになります。（以前はここでいう9話まで掲載）キーワード含め、なにが来ても大丈夫という方は、どうぞ一風変わった世界をお楽しみください。

1・遠くて近い場所で（前書き）

はじめに、これがパラレルにしても、異様なのは分かっています。そのくらいなファンタジーな話ですが、全力投球していますので、よろしければお付き合いください。もしも何か一言でも残してくださいと大変励みになります。

1・遠くて近い場所で

それは、人気のない放課後のとある学校での出来事だった。

「はーどうしょ……」

一人の少女が人気のない長い廊下を歩きながら呻きつつ、頭を抱えていた。

手に握り締めているのは、細長い紙1枚。何度も覗き込んで溜息を付いている。しかし、既に記載されているものは、いくら睨みつけても結果は同じだ。おそらく古今東西変わらない光景である。

「やっぱりこうもはつきり言われちゃうとな……」

空笑いしてみるも、当然元気など沸いてこなかった。

「あ、やっと見つけた、青子ーっ!!」

「っ!?!」

悩む少女の背後から大声で飛んできた名前に、彼女は軽く肩を跳ね上げた。胸を押さえながら振り返る。

「け、恵子……驚かせないでよ」

「え、どうしたのそんな顔して……?」

謝罪より先に思わず聞いてしまうほど顔色が悪かったのか、近づいてくるなり心配そうに眼鏡の奥の瞳を曇らせる恵子に、青子と呼ばれた少女は無言で一枚の紙を差し出した。受け取った恵子は怪訝そうに見る。

「何、これって成績表じゃない……あーほんといいな青子の成績っていったらいつつもAばかりで……ああ、なるほど」

優等生らしい青子のその紙を、初めは羨望と尊敬と多少の皮肉も込めて見ていた恵子だが、やがて納得顔で顔を上げた。

その目の前にはがくーっ、という音が付きそうなくらい落ち込ん

でいるクラスメイトであり親友の青子がいる。

「実技赤点なんて……やっぱり青子才能ないんだよ」

「いや青子、才能あるない以前に、すでに私達はそういうモンなんだけど……？」

「それってつまり悪魔失格ってことじゃないっ!!」

そう、彼女の場合は、古今東西にもう一つ、世界を付けないといけないのだ。

二人がいるのは学校の廊下は廊下でも魔界の学校の廊下だった。

薄暗くて不気味だと人間なら思う雰囲気の場合だ。当然というべきか、青子の背中にも恵子にも烏の様に黒い歪な翼が生えている。ただ、彼女達に尻尾はないというのが一般的な想像と違ふところだろうか。当人達に言わせれば『猫でもあるまいしそんなもの不要』という結論が、ここ数百年の間に出来上がっており、今はわざわざ無駄なものを持った悪魔など生まれてこないのだった。

「失格ねえ、まあ次頑張ればなんとかなるって」

恵子が言いながら青子の頭を撫でようとするが、それを彼女は突っぱねて首を大きく振る。その勢いに驚いて恵子が目を瞬いていると、青子は今にも泣きそうな顔で訴えた。

「そうじゃないの！ 青子にはどうすれば人間を不幸に出来るのかわからないの！ いくら理論では納得しても、実際の人間は全然違うんだよ……それに、心は紙に書けないもん……」

我々が違和感を覚える部分を『数学』や『問題』に置き換えると納得できるだろう。つまり、悪魔として本気でそのレベルで悩んでいるのなら相当な問題である。

「だから……人間が嫌だなんて思うことが起こるように仕向けられればいいんだってば」

そのため恵子も慰めるのとからかうのを同時に諦めたのだ。

「……それは分かっているよ。でもそれってどんなこと？」

「それは自分で考えないと意味ないって……まあ一番手っ取り早いのは、騙すとか、誘惑とかね。授業で習ったでしょ？」

「習ったけど……それってやっぱり恋愛でってこと？」

青子は首をかしげる。恵子はその行動に一瞬目を見開いたが、次には深く納得した。全ての原因はそこだと。

「そうよ、あんた恋したことないから点数稼ぐポイントがつかめないんだって！ ちょっとは恋愛しなさいよ。その辺に男子、いくらでもいるじゃない」

しかし、言われて俯く青子の声は、本当に弱弱しかった。

「それはそうだけど。……青子が気になる人もいないし、大体青子みたいなオコサマじゃ、相手にされないよ。それに、習ったって言うなら、遊びの恋は傷付かないから、お互いが本気にならないと不幸にはならないって……」

青子は年頃の乙女にありがちな思考を持つ少女であるためか、理想がとても高かったりするので今まで恋に落ちたことがない。一方でその容姿と無邪気さのため言い寄る男は数知れずのだが、彼女がそれに気がつくほど敏感ではないというのが運の尽きだった。

「……へ、へえ」

それらのことを全て了承済みの恵子は、自分で振っておいたとはいえ一歩間違えれば米神が引くつく話題に、深呼吸をしてなんとか耐え堪えていた。この点についてこれ以上議論してもしようがない。当の青子が全くの無自覚なのだから。それに、実は彼女の根本的問題はそこではない。

「それに……青子が嘘苦手だつてよく知ってるでしょ、恵子？」

「そうね……あんた馬鹿正直だから」

「だからほんとにどうしたらいいの？ もう青子恵子しか頼れないのっ」

こんな風に青子に自分の悩みを告白されたのは、実は初めてだった恵子だが、青子に泣きつかれた今、彼女こそが誰かに泣きつきたいと、思い始めていた。

そんな時だった。

「チャンスを上げましょうか？」

凜とした空気がその場に充満し、二人が思わず動きを止めたのと、言葉が聞こえたのは同時だった。

「「あ」」

二人で同時に振り返ると、そこにはその尋常ではないオーラをかもし出している張本人がその雰囲気に違わぬ佇まいで立っていた。

「青子さん……あなたの実技以外の点数は素晴らしいわ。そんな逸材を放っておく手はなくてよ」

「「紅子先生!!」」

すらりとした長身と、つやめくストレートの長い髪、極め付けに常に浮かべられている穏やかな微笑。彼女こそ悪魔たちにすら魔性の女と言われ続ける青子たちの師であった。とても若く見えるが、年齢は不詳である。

「あの……チャンスってどういうことですか？」

彼女の空気に飲まれそうになっている二人だったが、意を決して恵子が尋ねた。紅子は少し笑みを深くした。

「青子さん……貴方には、邪魔してもらいたいの。今回は明確な課題を持って臨むんだから出来るでしょう？」

「邪魔……ですか？」

「そうよ。ある二人が出会うのをね」

微笑を浮かべたままの紅子に青子は首をひねる。

「……それって何か意味があるんですか？」

「勿論よ。彼らはね、あまりにも幸せなカップルなのよ」
「幸せなカップル」

青子がそんなフレーズを聞いたのは子供の頃に読んだ童話の世界だった。頭をよぎったのは王子様とお姫様。こうして成熟一步手前まで来ても、彼女のそういう考え方は変わらなかった。

しかしそんなことを思い巡らす間にも紅子の話はどんどん進む。

「これまでも前世で何度も何度もこちらの頭が痛くなるほど愛しあっているのよ。彼らがいるとその周辺での恋愛のいざこざが激減してしまうの。一番困るのは、その魂は天使の庇護下にあつてこちらからは手出しができないこと。それでも、なんとか今回はこちらが先手を打ったおかげで、今はまだ出逢っていないの。けれど細心の注意を払っていたにも拘わらず、あの二人は強い力で引き合つて、私達に逆らってきたのよ。用意されている運命のわずかなほころびを通して、このままではもうすぐ出会ってしまうわ。そうだったら一体どれだけの悪がこの世から消えるか、想像も出来ないのよ。青子さん、これは魔族の存続が掛かった大きな任務なの」

「で、でもっ！ 出会うべき人を出会わせずにいるなんてっ」
「あっ馬鹿っ」

淡々と続く話を思わず叫んで遮った青子と、それを止めようとす
る恵子だが、一度出た言葉はもう戻らない。

恵子は知っていた。青子が悩む本当の訳を。そしてそれを見せる
まいと必死になっている彼女を。

今までひた隠しにしていた彼女の本質が現れた瞬間、紅子から微
笑みが消え、冷たい視線が飛んだ。

「青子さん……貴方それでも悪魔なの？ 本当は分かっているの
でしょう。人間がどうすれば不幸になるのかも……でも、貴方は自分

で手を下すことができない。冷酷になりきれない。人もだませない。だからどうしていいか分からないのよ。……違うかしら？」

「つつ！」

青子を見たこともない紅子を見たまま、動けなくなった。その言葉はまさに青子の心そのままだった。けれど懸命に隠し続けてきたので、誰にも分からないと思っていたのに。

「ちょっと先生いくらなんでもっあ、青子っ気にしないで、ね？」

恵子に突っかかれても、紅子はその表情を崩さなかった。

「甘い顔をするのも、これで最後よ。今度の課題、出来なかつたら貴方は消滅。さっき、そうはつきり生徒指導室で言われたはずですわね？」

「う、嘘っ！　ねえ、青子！？」

恵子が青子と紅子を交互に見比べる。あまりにも予想外で、理解が追いついていないようだった。

一方の青子は顔面蒼白だった。その言葉が全てを肯定している。しかし、その最後通達と紅子の強い視線を受けて、震えている場合ではないと覚悟を決めた。大体悪魔は良心など、消滅と秤にかけるべきものではないのだ。

青子は、決意を込めて目を閉じ頭の中に想像していた運命の恋人達を思い描きそこに無理やり大きなバツテンをつけた。この瞬間、彼女の中の童話の世界は、びりびりと音を立てて破られた。

「二人が……出会わないようにしてきます」

「青子っ……！」

「そう……漸く分かったようね」

恵子の必死の叫びに掻き消された紅子の淡々とした声を聞きながら、青子は自分でも恐ろしいくらい冷静になっていることに気がつく。そしてそれが自然だと何処かが知っているのだ。頭でどんなに抗っても、やはり本質は変えられない。

「はい」

その目は揺るぎなく前を見つめ、しかし微かに濁っていて、先ほどまで泣きついていた彼女とは別人だった。恵子を見た途端に何も言えなくなる。

「じゃあこれからすぐに出発してもらおうわ、付いていらっしやい」

無言で後に続く青子を見て恵子は顔を歪ませた。

「青子……」

自分は、いざという時に冷徹になりきれ。人間を不幸にすることも悪魔の性が楽しいと感じたことも何度もある。けれど彼女は違う。無理矢理呼び起こした悪魔の本質を、一番後悔するのはきつと彼女自身だと恵子は確信を持って言えた。青子は、彼女の心はそんなこと絶対に出来ないのだ。そしてきつと、自分を責める。嘘が苦手な彼女は、いつまでも欺くこともできないはずだ。いつかばれて決定的な亀裂を作る。それぐらい分かるくらいには親友だった。いや、はつきり言えばして欲しくない。純粹なまままでいて欲しい。それは悪魔らしくもない彼女の勝手な願いなのだけれど。

「青子は……天使に生まれればよかったんだよね」

そうすれば本当に人を幸せにすることだけを考えて生きていければいい。

「つつつって何考えてるのっ」

不謹慎な発言に気がついて恵子は自分で頭を叩く。青子の為を思えば、これが一番いいことなのだ。けれど、周りを見回して誰もいないことを確かめると、表情を元に戻した。

「はーっ」

本音である暗い顔で、重たい重たい溜息を吐き出したのだった。

魔界から上とか下とかそういう概念を飛び越えた場所、いわゆる私達の住む人間界のある高校の寮の一室で、一人の少年が丸椅子に座り不機嫌そうに、ブラックの苦ーーいコーヒーを飲んでた。

「なー新一、そんな顔でずっといると眉間によった皺戻らなくなるぜ？」

その隣で丸椅子に横向きに腰かけて、同じようにコーヒー、ただしこちらはクリーム色に近いような砂糖たっぷりのカフェオレを飲みながら、心配半分呆れ半分で勉強机に頬杖を付いている少年が一人。どちらも顔の造形は整っていて、年も同じくらいに見える。いや、嗜好は正反対だが、二人の顔は恐ろしいほどに似通っていてそれが同年齢だと暗に告げていた。服以外に違うのは髪形くらいだ。ふわふわと無造作に跳ねている方が甘党のようで、口を開いたのはきつちり髪をセットした新一と呼ばれた少年だった。

「誰のせいだと思っただよ、バ怪盗」

途端に甘党の彼の顔から余裕が消え、顔面蒼白になった。

「おまつ寮ではやめろっ誰が聞いてるかわかんねえんだからっ」

「……だったら今すぐこっから消えるよ」

「そうしたいとこだけど、ここはオレの部屋、おまけに危険因子撒き散らすの見過ぎすわけにいかねーっ」

椅子から立ち上がり一人でヒートアップしていくその会話の内容は、少し世間一般から外れているにしても怒りは甚だしく、さらにいうならば新一のあしらう冷たさも尋常ではなかった。

「うつせえな、オレは眠いんだよ」

「オレだって眠いんだっ！ はつきり言ってすぐにでも寝たいっ」

「だったら寝ろよ、ベッドあるだろ」

面倒くさそうに新一は後ろの二段ベッドを指差す。しかし彼はそ

ちらを見もせず、つかつかと新一に歩み寄った。

「生憎オレは、不機嫌な親友ほっぽり出してグーグー寝れるほど人間捨ててないんでねっ」

どうやら彼は、目くじら立てて怒りながらも非常に遠回りに新一の心配をしているらしい。しかし、当の本人はそれを逆に迷惑そうに見ていた。

「だれが親友だよ……大体、大バ怪盗が逃げ回りさえしなきゃ、こんなに不機嫌じゃねーんだよ」

「そりゃ逃げるだろ、捕まるわけにはいかねーんだからっ」

「ったく……さっさとパンでもドラム缶でも見つけろよな……」

「新一っ頼むからもうこの話題やめてくれーっ」

少年は既に半分涙目であった。世間一般の常識として隠したくない奴などいないだろうが、日曜日のうらかな陽だまりが窓から差し込む中でのその涙声は、かなり不釣合いだった。

「とにかくお前はでてけバ快斗」

「やっと名前呼んでくれた……」

どこかほっとした様子の怪盗こと快斗は、安堵の溜息をこぼす。

「とつととでてけっ」

「はいはい……」

半ば追い出されるように、しかし何処か嬉しそうに快斗はその部屋を出たのだった。

「漸くかよ……長かったーっ」

扉が閉まって歩き出し、そういつた彼の声は俯いている割に若干弾んでいた。どうやら彼のことを名前で呼ぶ「新一のお許しが出る」という合図らしい。それがいかにまとわり付いてきて面倒だからと

いう理由であるとしても、快斗には嬉しいことだった。

彼の名前は黒羽快斗、この現代社会ではありえないほどのロマンスを背負い生きている高校生である。彼は先ほどの会話の通り、怪盗なるものをやっているのだ。しかも予告状まで送りつける本格的なものである。勿論愉快犯ではなくちゃんとした理由はあるのだが、それはそれでまた話す機会があればということにしよう。

「……相部屋なの恨んでるわけじゃねえけど……やっぱり探偵はなあ……」

新一とは長い間の親友で、それは過去形ではなく今も変わらないと少なくとも快斗は信じている。

けれど、快斗がとある有名な怪盗となった時から、そしてまた新一が、迷宮入りしそうな難事件（主に殺人）を次々と解決して国単位で有名な名探偵として名を馳せていることから、二人の関係はギクシャクとするようになってしまったのだ。

追うものと追われるもの、決して相容れないそれは小説の中だけの話だったはずなのに、いつのまにか、現実には確かにあるものになっていた。その事実が、知れた途端に10年以上にわたる二人の絆を揺るがすには十分なほどの信憑性を持っていると知る、といういらないおまけつきで。

ただ、お互いにその立場を降りるつもりは微塵もなく、むしろ普段はあり得ない関係のライバルとして対峙する時に、心地良い高潮感が二人の間を駆け抜けることにもなっていた。けれど、けれど

「日常生活ぐらい、させてくれよな……」

予告状を出すところから戦いの幕は上がり、そこから先の二人の会話は予告日当日まで腹の探りあいになるのでどちらからともなく自重するようになるのは序の口。当日現場で対峙してなんとか勝利

を納めほうほうの体で逃げ帰ったとしても、家に帰ればまた顔を付き合わせる事になり、不機嫌な彼の相手をしなければならぬのだ。そこには以前のように彼の陽気さに若干呆れながらも芯からは嫌わず、名前を呼んだ彼はいない。心底嫌そうな睨みと、得意のサツカーで鍛えた蹴りが飛んでくるだけだ。

その事実が快斗が怪盗になって唯一後悔していること。

それは二人が同じ高校に入って、たまたま相部屋になってからの変化だったからどうしようもないことだし、絶対に言いはしないうし、怪盗をやめる理由にも届かないけれど。

「なんか、楽しいこと落ちてねーかなあ」

そんなことをつい呟いてしまうほどには、彼はこの毎日に疲れていた。

結局、外に出ても寮を一回りするぐらいしかやることがない。疲れきった体をそれ以上使う気にもならず、快斗はぶらぶらと歩いていた。ただ、そうしながらも頭では次の獲物のことを考えてしまっているのだから、一種の職業病である。この東京のいたるところで、怪盗の獲物は姿を現す。

「……………はあ……………可愛い女の子とか落ちて……………うわっ？」

そんな中、冗談交じりに言った言葉にどれほどの威力があるのか、後に快斗に親友に向かい力説したのである。それはある意味とても、正しかったのだった。

2・それはすでに奇跡だったり

集団の場合は、先生達が一齐に魔法を用いて瞬間移動を行うが、個人で人間界に続く道は真つ暗なトンネルの中を通っていくというシンプルなもの。理由は悪魔の能力に関係ないようである。つまり、えいやつと何かを魔力で動かしたり壊したり叩いたりする必要は全くない。さらにどんな馬鹿でも試験の点も関係がない。勿論心情検査なんてものもない。

「どうせなら、関係あればいいのに……」

そうすれば、こんなに嫌な思いのまま行かなくても済む。この時期の人間の一般的な格好として柔かい白いセーターと、紺色のスカートを履いた青子は深々と溜息をついた。

つまりこれだけまだるっこしい言い方をして最終的には、行きたくなくても行かねばならないという一点に尽きる。

これが、どれほど割り切ってみても変わらない彼女の本心だった。出会うべき人間を出会わなくすることで不幸にする。悪魔の一般的な任務からすればとても簡単なことのようにも思えるが、青子にとっては荷が重いのと辛いので小さな肩がつぶれてしまいそうに感じることだった。

「はー」

しかし、いつまでもくよくよしては、点数に響く。紅子の部屋を出た瞬間から任務という名の課題試験は始まっているのだ。もしも今度合格点に届かなければ、青子は今度こそ悪魔失格で消滅までの道をまっしぐらに進まなければならない。悪魔にとってそれほど恐ろしいことはない。

青子は意を決して、その暗いトンネルの中に飛び込んだ。

暫くは何も起こらず、青子はびくつきながらも一步一步確実に進んでいった。しかしそんな彼女の態度が『トンネル』に伝わったのか、確かに今までであったはずの地面が急に消えた。勿論真つ暗の中それに気がつけるようにはなっていない。となるとあとは簡単なことだ。

「きゃーっ」

翼を使うという簡単なことすら思いつけないほどパニックに陥り、青子は下へ下へと落ちていった。

その迷路のような穴の中を、ひたすら滑るように落ちていく。目を白黒させながら気絶寸前の恐怖だったが、翼を開こうという思考に到ってもそれが出来ない。どうやら任せろということらしい。

誰にも教えられなかったその移動手段にも慣れてきた頃、漸く終着点が見えた。

そのときにそれは起こったのだ。

今、青子の目の前には二つ大きな穴が開いていた。どちらに落ちても、恨みっこなしというほど距離は同じ。しかし青子にはなぜか一方の穴に無性に呼ばれたような気がした。そしてそれを疑う暇もないくらい落下速度は速く、迷っている時間はなかった。結果、青子はままよとばかりにその呼ばれた方の穴へとわずかに体を傾けていた。

そして彼女はその穴に飛び込んでいったのだが、それが別の運命の始まりだったなんて誰が知りえようか。

ずしーっ

女の子が落ちるには少々派手な音を響かせて、青子はお尻をしたたか地面にぶつけていた。

「いったーっ なんなのよこれーっ」

びりびりと痺れる体をさすりながら、落ちてきた空を恨めしげに見上げるが、既に穴は影も形もなかった。

「ありえない……」

誰も教えてくれなかった穴の強行手段に青子はひとり悪態をついた。

痛む体を押さえながら周囲を見回す。更に悪いことに、どうも足もくじいてしまったらしく立ち上がれない。

地面は砂だった。コンクリートだったらもつと痛かっただろうと思つので、それはとても幸いだったが、砂だらけの自分のスカートを見る限りそうも言っていられない。青子はゆっくりと溜息を吐き出した。

目の前に見えるのは花壇のようだが、手入れがされている様子はなく、育てられた植物の代わりに雑草が伸び放題になっていた。建物と建物の間に落ちたらしく、青子がいるのはその忘れさられている空間のさらに奥まったどん詰まりだった。空が切り取られて小さく見える。雨は降っていないが、太陽も出ていない曇り空で、現在の青子の視界は大方灰色と茶色だった。

とりあえず、はっきりわかることは現在地確認及び把握は不可能ということ。

「……どうしよ」

途方に暮れる青子がまた溜息をついたときだった。なんと正面の壁をぐるりと回り何者かが走ってくるのが見えたのだ。

（だ、誰っ!?!）

青子は非常に慌てた。この場所が何処かも分からないのに、出会う人物に怪しまれない可能性のほうが少ないのだ。姿を消すことは出来るが、実際問題として無理だ。既に彼に視認されてしまっているのだから。

出来るなら、回れ右してくれるか時が止まればいいと真剣に思う。もちろん、青子の必死の願いは無駄に終わった。少年と分かるほどに近寄ってきた彼は、走るのをやめたかと思うと、青子の前まで止まることなく歩いてきたのだ。

「うわー！ほんとに落ちた……」

少々、意味不明な言葉と共に。

しかし、たとえ相手が精神異常者かもしれなくても、青子は正常な一般人を装わなければならない。どんな状況であつても人間に溶け込むことが、大切な第一歩なのだ。

「あつ初めまして……その……」

「参ったな……ここ、男子寮なんだけど」

なけなしの勇気を振り絞り、なおかつ声が裏返らないようにという多大な努力をしながらの言葉を完璧に無視し、ぱりぱりと頬をかきながら空まで見上げている少年に青子は自己紹介するタイミングを完全に失った。

「へっ？」

「で、君どっから来たの？」

ふわふわと髪を跳ねさせた少年は、青子に視線を合わせるなり、彼女の驚きを消し去るくらいの人懐っこい笑みを浮かべながら、穏やかに聞いてきた。その顔がとても整っていて、思わず緊張がゆるむ。とりあえず今ここにとつて食われるという危険と精神異常者という可能性は消え去った。だが、それだけが問題なのではない。

「……あ、青子は……えっと、その……」

今までに全くないパターンで、青子は言葉に詰まった。

何もいえないまま時が静かに流れていく。

「まさかその年で……迷子？」

やがて少年は時間の経過と共に変化した顔と同じくらいの呆れまじりの声で聞いてきた。しかし青子はもう天からの助けとばかりにそれに飛びついたのだ。

「うんっ青子迷子なの！」

「へー……」

「……」

自分で言っておきながら、明らかに信じていなさそうな少年の声に青子は腹がたってきた。ついさっきまで綺麗に見えた顔も、今は意地悪く笑っていて反感を覚える。もともと意地っ張りな青子はムキになって顔を上げ、思いつくままに叫んでいた。

「青子はねっここに友達に会いに来たんだよっ！ だけどこの町初めてだから分からなくて、やっとたどりつけそうだったのに、地図なくして道分からなくなっ……それで……」

言っているうちにだんだん目頭が熱くなってきた。なんだったもともと苦手な嘘をこんなについているんだろう。それもこれも無性にあの穴に呼ばれたせいだ。もしも反対の穴に飛び込めば、今頃ちやんとした場所に着地できていたかもしれないのに、あんなに強く惹かれた理由が分からなくて悔しい。

「だからっ青子は本当に」

「ああ、分かったって」

なだめるように言われた声に顔を上げれば、先ほど胡乱な目をしていた彼が、少し困った顔で青子を見ていた。そんな顔をされると余計に惨めに感じて、そして急にひざが痛くなって。

「ふえ……」

青子は溢れる涙をそのままに、泣き出した。

「おっおいっ何で泣くんだよっ！！」

突然のことに少年は慌てふためいて、青子を見る。しかし肝心の

青子にはもうどうして泣いているのかも分からなくなっていた。ただ泣きたかったのだ。いろんなことがありすぎて、辛くて悲しくて、それぐらい現状とそこにたどり着くまでの道に不満だらけだったのだと、涙を流して初めて気がつくくらい一杯一杯だった。

「なあ……泣いてちゃ分かんねえよ……何があつたんだよ」

「どうして……なんでよっ……なんで青子はこんなところにいるのよーっ」

随分と柔らかくなった彼の声も聞こえているのかいないのか支離滅裂に叫びながら、いつのまにか同じ目線になっていた彼の肩をどんと叩く。完全に錯乱状態に陥っていた。

(おいおいおい……)

快斗は少女にされるがままにされながら、内心で途方に暮れていた。目の前の真っ白なセーターを着た少女は軽い地震のような地面の揺れと共に目の前に現れ、しかも出会った途端、言葉を数個かけただけで泣き出してしまった。確かに、恰好も相まって一瞬天使とか現実から遠いことを考えていた快斗は、最初こそ自分でも変な問いかけ方だと思ってはいたが、その後はそこまで一般常識から外れたことを言つたつもりもない。なのに、彼女のいきなりの外見に似合わない行動に戸惑う。

まあ、思い返せば少し言い方が意地悪だったかもしれないが、その時は反論してきたからそれが直接の原因ではないはずだ。だからこそ、それ以上考えても分からなかった。

(だったら……)

快斗は暫し迷った拳句いまだ泣きじゃくりながら目をこする少女の目の前に、手のひらを差し出した。少女の意識がそこに向けられたのを確認すると、その手で小さな魔法をひとつ。

ぼんっ

何もなかった掌に、浮ぶように赤い薔薇が現れる。

「えっ……」

「オレ、黒羽快斗ってんだ。よろしくな」

目を丸くしている彼女の目の前にそれを差出し、飛び切りの笑顔
を向けた。

女性にはやさしく、それが基本だよ、快斗

それが幼いときから今は亡き父に言われ続けてきたことだった。
そこから始めようと思った。

「今の……なに？」

突然のことに思わず泣くのを忘れて、その薔薇を呆然と見つめて
いる彼女に快斗は微笑んだ。

「マジックだよ。オレの得意技なんだけど……見たことない？」

「うん……こんなのはじめて……でもすごいねっありがとう！」

青子は頷き、まるで何かが飛び出してくると思っ
ているかのよう
に恐る恐る薔薇を受けとったが、何も起こらないのを確認すると彼
を見て急にばあっ
と嬉しそうに笑った。

「っっ！？」

その大きな瞳に自分が映りこんだ時。どくつと大きく快斗の心臓
が跳ねた。今までになかった経験だった。動揺した快斗が思わずポ
ーカーフェイスが剥がれかけてしまうほどの。その後はなんとか持
ち直したものの、彼女から視線を逸らし、思っていることを口に出
すので精一杯になってしまった。

「もう泣くなよ……な」

「うん」

小さな声と共に頷いてこちらを見つめる青子の視線を感じて、首をもどした快斗は、思わずその頭に触れてぼんぼんと叩いた。やつてから気がついた完璧な子ども扱いだっただが、青子は嫌がるそぶりを見せなかった。まるでうさぎか猫のようだ。ふわふわの髪の毛が更にその考えを助長する。おとなしく頭を撫でられる彼女に、まるで妹のように感じた。

「ほんとに……ありがとう、快斗」

だが、先ほどとはまた別に、気持ちよさそうに目を細めて笑う青子に、さらに動悸が早くなる。聞き慣れているはずの名前が別物に聞こえた。そんな自分にはつきりと違和感を感じながら、快斗は遠慮がちに手を差し出した。彼女はまだ、地べたに座り込んだままだ。

「オメー……一人で立てるか？」

「あ、うんっ」

しかしほんの少し足を動かした途端顔を歪めた青子に、慌てて快斗は彼女の体を支えた。

「おいっ無理すんなよっ！ くじいたのか？」

「……うん……ちょっと落ちた時に……でも大丈夫」

気丈な言葉に快斗は彼女の足を見て眉をしかめた。くじいただけでは済まず、膝を派手にすりむいて真っ赤な血が砂と混じっただけ直視するのも辛い。経験から考えるまでもなく相当痛いだろう。

「大丈夫なわけねーだろその足でっ……とりあえず洗えるところ行くぞ」

快斗の真剣な有無を言わせない口調に、青子は諦めたように頷いた。

「うん……」

「よし、じゃ乗れ」

「なっ!？」

青子の目が瞬時に見開かれる。彼が青子に背を向ける格好で、し

やがみこんだのだから無理もない。そうしながらこちらを見てくる快斗に、青子はぶんぶんと首を左右に振った。

「いいから乗れって。なんもしねーから」

そういう問題ではない。彼の意思は聞かなくても明白だが、会って数分の彼にそんなことさせられるはずがない。どんなに彼が親切ですごい人だろうとそれはまた別問題である。

確かに足は痛い。既に刺すような痛みではなく、鈍痛になりつつあるがどちらにしろ手当てが必要であることは明白だった。本当にひねってしまったかもしれない。そう思えば思うほど不安は大きくなるばかりだ。だから彼の言葉に従ったほうがいいのだと思いはするのだが……。

「青子、ほら、さっさとしろってっ」

「なっなんで名前知って!？」

突然呼ばれて慌てふためく青子に、快斗は呆れた目を向ける。

「さっき自分で言ってたじゃん。大体他に呼ぼうにもオレそれしかお前の名前知らねーんだよ」

「あ……そっか。じゃあいいよ、青子って呼んで？」

納得したように頷き、警戒心なく笑う彼女に、快斗はやけに脱力して首を折った。

「あのなあ……オメーが乗らないならオレ帰るけど？」

そのまま気力を振り絞ったように本当に立ち上がりかける。青子は慌てた。今ここで置いて行かれたら、また面倒なことになりかねない。しかし、彼の背中という条件もそう簡単に飲めるものではないのだ。青子は顔を上げて随分遠くなった彼をじっと見つめた。

「ほ、ほんとに何もしない？」

「まったく信用ねーなあ……そんなにオレ悪い奴に見える？」

問いかけられ青子は即座に数度首を振った。あんな素敵なものを見せてくれた彼をそんな風にはとても見られない。快斗は青子の反応を見てにんまりと笑った。そしてしゃがみこむ。

「んじゃ決まり。ほら乗れって」

それが演技だと気がついてもう後の祭りだった。

「うん……」

こうしてすっかり快斗のペースに巻き込まれた青子は、その背中に負ぶわれて、この細い空間を去ったのだった。

その後青子は給水所で足を洗ったあとも、またうまく言いくるめられて快斗に負ぶわれてしまった。さらには、その背中があまりにも心地良かったのと疲れから、彼の背中でのいつのまにかぐっすりと眠ってしまったのだった。

こんな一風変わった二人の出会いのワンシーン。

何かが始まる、そんな予感、あまりないような気がするけれど

しかし、これは確実に出会いだった。たとえどんなに劇的でなくたって。

3 ・ 番狂わせが肝心要（前書き）

切れなかったので長めです。

3・番狂わせが肝心要

「……………で？」

たつぷりと間をおいて、漸く放心状態から我に返った新一が、扉の前に立っている元凶を親の敵とばかりに睨みつける。言葉の上では尋ねていたが、実質それは『問いかけ』ではなかった。

「いやその……………ちよつと拾って」

空笑いをしながら、快斗はなんとか彼の目線からのがれようと視線をさまよわせる。しかしその傍ら滑り落ちないように背中の手を添えることは忘れない。反省するより始末が悪い。苛立ちを込めますます強く睨みつけると、ようやく「悪かったって……………」という細かい声が出た。

けれど新一にとって実は苛立ちの原因はそこではない。むしろ誰でもない彼ならこの状況に十分に理解をしめすはずである。だが、今回ばかりはそうも言えない理由があった。

快斗が出て行ってから、新一は扉に嚴重に鍵をかけた。彼が鍵を閉めても閉める前と変わらないということは中学生の頃から一般に良く知られていることだったが、それでもこれならば時間がかかるだろうと言えそうなほど頑丈な奴を、である。

それから、やっと訪れた平和な午後を読書に没頭して満喫しようとして、本を取り出した。と思つたら、一人になっていくらしにうちにノックが数回。心当たりもないので訝しく思いながら溜息や諦めと共に机に出したばかりの本を置いた。そして重たい気分が出てみればそこにいたのは予想外にも快斗だったというわけなのだ。しかもただでさえ苛立ち度数が一気に跳ね上がった新一に対して、彼はそれだけでは飽き足らず妙な格好。もはやその理由と正体を見た新一が飽和状態に陥つたのも当然だった。

思い出しただけでもどつと疲れてこめかみがひくつくのを抑えられない。要するに、彼の平和な午後のひと時は彼が扉を開けた瞬間に消え去っていたのだ。そして新一にとっての問題はそれだけではない。

「人間を拾うなっ！」

言葉のまま批難しているのではなく、なぜか『快斗が』というのが単なる人助けではすまないような嫌な予感をひしひしと彼に与えてくるのだ。

「うわっしーしーっ」

大慌てで人差し指を唇に当てた快斗はしきりに後ろを見やる。彼が言葉ではなく大きさに待ったを掛けたのは、快斗の背中でもぞもぞと動く気配を感じた新一にも理解できた。仕方なく睨みつけたまま、口だけはつくむ。

快斗は少女の動きが止まったのを見るとほっと息を吐き、その痛いほどの視線にも全く動じず部屋を横切っていく。

天幕を張ったベッドでもあれば様になるが、高校生のしかも寮の部屋にそんなことを期待するのが筋違いだ。当然快斗が青子を降ろしたのは、何の変哲もない二段ベッドの下の段だった。

「おいてめっ……」

混乱と焦りと怒りが混じった低い声が背後で聞こえても、振り返った快斗は余裕の表情だった。

「だってよ、この部屋ソファねーじゃん。それにさっきから起きそうなんだぜ？誰かさんのせいでー」

にやりと実に楽しそうに笑うと、快斗はぐうの音も出せない新一の隣を余裕で歩き去る。

「おいっ何処行くんだ」

新一が小声で問いかけた時、彼は戸を開けようとしていたが、振

り返って同じく小声で答える。ご丁寧に唇に手を当てるジェスチャーつきだった。

「救急箱とりにいくんだよ。そいつ足怪我してんだ」

「怪我あつ!?!」

「だからしーって」

ポリウームを下げることを咄嗟に忘れてしまうほどの驚きだったが、出てしまった以上同じことである。とっさに快斗はまた先ほどのポーズをしたが既に遅かったようだ。

「……う」

微動だにしなかった腕が大きく動いたのを見て、快斗は天井を仰ぎ溜息をこぼした。

「あーあ、起こした」

「……悪かったな」

快斗の視線が新一を避難すると、彼はそっぽを向いてしまう。快斗はもう一度溜息をつくと、出ようとしていた扉を静かに閉めた。それから自分の机の方へと歩いていくと、椅子を引っ張ってきてそれに逆に座りながらベッドの前を陣取る。新一も暫く彼の行動を見ていたが、やがてそれに習った。

二人の視線がベッドに集中するのは興味深い光景であったが、目の前の少女は起きない。正確には目を開けようとしないのであった。尤もそれは快斗にも新一にもはつきりと覚えがありすぎるくらいある現象だった。せめてもの抵抗とばかりに浮上しつつある夢のふちを無理やりに掴んで離さない。要するに寝汚いのだ。スタンバイまでしてお姫様の目覚めを待っていた王子様二人には微笑ましい光景であったとしても、面白い物ではない。

痺れを切らした快斗は器用に足で、椅子をさらにベッドへと引き寄せると、少女に手を伸ばした。

「あーおこ、いつまで寝てんだ、起きろ」

いると、目の前の少女が起き上がって二人を指差してきた。ふさいでいても全く効果なく、手を通り抜けてくるかのような高い声が驚いた顔に続く。

「ふ、双子!?!」

「……違っっ」

全く同じタイミングで答えた二人には信憑性がなかったが、実際に血のつながりはない。なぜこんなに似ているのかといえば恐らく父と母の顔つきが若干似ているからだろうという結論にならざるを得ない。

だが、肝心の青子はその否定を追求はしようとはせず、そうなんだーと一人頷いていた。その様子に思わず二人は顔を見合わせる。恐ろしいぐらいのマイペースな少女に起きた瞬間から振り回され、不安になるのも無理はない。しかも彼等自身が第三者からマイペースだといわれているのであるからおさらである。

「おい、青子……」

新一の疲労と恨みが混ざった一方的な目線に負けた快斗が恐る恐る声をかけた時にも、青子は「それにしてもほんとに似てるー」等と繰り返して呟いていた。苦笑も溜息もどつと押し寄せてきた疲れに押し流され、その勢いのままに快斗は言葉を出してしまっていた。

「おまえさあ……ずれてるって言われねえ?」

「え、どうして?」

「どうしてって……」

頭を抱えている快斗の横の様子を見ていた新一は密かに目を丸くしていた。新一でなくともそうだろう。彼がこんなに誰かのペースに巻き込まれているところなんてめったにお目にかかれない。

「とりあえず……目の前にいる男のうち、一人は全く見ず知らずのはずなのに、警戒心のかけらもねえってのはどうかと思う」

独り言として最低限度の現状を言ってみると、そのありえないほどの異常さに改めて気がついてまた一気に疲れる。

一方の青子は聞こえていたのか急に顔をこわばらせた。しかし、はつきり言つて今更過ぎて滑稽以外の何者でもない。青子はそれが分かつていないのだろう。快斗によく似てはいるものの、快斗ではない新一をじっくりと見ていた。

この瞬間目は口ほどに物を言つと痛いほど新一は感じたという。

「……工藤新一、よろしく」

あまりに初対面とは思えない対面の後の自己紹介だったので、全く緊張感がない。新一の苦笑交じりののんびりとした声に青子も小さく笑つた。

「青子は……青子だよ、よろしくね」

苗字を言おうとしないのは訳があるのだろうと、彼は軽く流した。探偵として、踏み込むべき時とそうでないときの線引きを彼は人一倍分かつているのだ。

「それ結構珍しい名前だよな。なんか由来でも？」

そして彼は基本フェミニストなので、女性を困らせるようなことはしない。青子は笑顔のままだ。いやより一層楽しそうに笑っている。

「うん、青はサファイアの青なの。由来がとっても綺麗だから、青子気に入ってるんだよ」

連呼しているだけあって本当に相当気に入っているのだろう。そう結論付けた新一は苦笑気味の表情を崩さないまま、すつと背後に意識をやつた。先ほどから不機嫌なオーラがじわじわと漂ってくるのだ。

しかし新一は目の前の少女には顔色一つ変えずに問いかけた。

「えーっとじゃあ青子ちゃん、どうしてここに来たのか教えてくれる？」

「うん、いいよ。でもその前に工藤君、青子のこと呼び捨てでもいいよっ」

「いやそれはちょっと……初対面だしね。青子ちゃんもオレの事君付けだし。そんなことするのは……この馬鹿ぐらいだよ」

そこで彼は快斗のほうを振り向くと同時に、瞬間的に表情とかもし出すオーラまでも変えた。その速さたるや、ハリウッドスターも仰天ものだ。当然快斗もたじろぐ。

「なっなんだよ」

「なんだよじゃねーだろ、さっきから嫌なオーラ出しやがって気分悪いんだよ」

「なっ」

「大体なあ……なんで初対面から呼び捨てなんだよ。お前、普段のフェミニストっぷりは何処行きやがった？」

「な、何でそこなんだよ！ オレは別になんかガキっぽいからそう呼んでただけだし……」

「だったらせめてちゃん付けにしろ、それと妙な不機嫌オーラ撒き散らすんじゃないよ」

「撒き散らしてねえっ！」

「ねえ二人ともどうしたの？」

二人でひそひそそそそやっていれば、気にしないという方が無理である。新一はそれを自覚していたのか最後にもう一度快斗を睨みつけると、青子に顔を向けた。既に快斗と話す前と同じ苦笑を顔に貼り付けている。

「なんでもないよ、ただ、青子ちゃんも女の子なんだから、警戒心は持ってたほうがいい。こいつは女性になら誰にでも優しいけど、用心に越したことはないしね」

「おいてめっ新一何言っつてっ！」

血相を変えた快斗が新一に詰め寄るが彼はいたって涼しげな顔だ。

「本当のこといわれて怒るのか？ 問題ねえだろ」

「怒るのかじゃねえよ！ 変なこと吹き込むなよな！」

また始まった言いあい、ただし今度は音量調整なしである。青子は急に始まったそれにあたふたとするしかなかった。しかしぎぎぎとにらみ合う二人に、ついに実力行使に出る。

「二人とも喧嘩はやめて、青子これからちゃんと気をつけるから。えーっと工藤君黒羽君、青子のこと助けてくれてありがとう！」

ぴたっと動きを止めた二人。そして二人の瞳が青子をじっと見る顔だけ見れば整っている少年二人に見つめられ、青子は急激に赤くなった。

「あ、えとその……」

しかし彼等にとつて青子の変化が問題ではない。

「大バ快斗」

「認めるよ……たくっ」

快斗は立ち上がると足音を響かせ部屋を出て行った。不機嫌丸出しのその動きを青子は知らないうちに追いかけていたが、パタンと扉が閉まった途端にはっと我に帰る。

それを見計らい新一は声をかけた。

「青子ちゃん、大丈夫？」

「え……何が？」

「足、怪我してるんだよね」

「え、あ、ああそうだったっ!?」

自分でも驚いている辺り、この先彼女の将来が非常に不安になるが、新一はそんな思考を頭から追いやると、青子の足へと視線を向けた。今更だが、急遽水で流したことは分かってても、かなり痛々しい。幸い血は止まっていて毛布も汚れてはいなかったが、すり傷の痕はまだはっきりと彼女の足に残っていた。

「どうして、怪我なんてしたんだ？」

「ん……実は青子人を捜してて……って!？」

急に大声を上げた青子に彼女の足の怪我の状態を見ていた新一は不意打ちを喰らった。

「んっ」

しかし青子はそんな彼の様子にはお構いなしでむしろすがらように新一を見てくる。

「ねえ工藤君……あの、工藤君の本名、もっかい……」

「？ 工藤新一だけど？」

「嘘……」

信じられないと、現実を受け止められずにいるらしい青子と対照的に新一は何がなんだか分からずに眉をひそめる。思わずいまだに相当なショックを受けているらしい青子の顔と目を覗き込む。

「なあ……オレの名前がどうしたって」

その時パタンと扉が開いて救急箱を抱えた快斗が現れた。

当然、彼には事前説明などなく、二人がお互いを凝視して見詰め合っているような姿がダイレクトに飛び込んでくる。

「何してんだよ……」

それだけ言うのが精一杯だったようだ。

「快斗……誤解のないように言っておく」

胡乱げな目を向けられる新一は疲れた声だった。尤も青子の方は自分の世界からたった今もどってきたばかりで、当然何が問題なのか分っていない。快斗の眉の酔った顔を不思議そうに見ている。

「青子ちゃんがオレの名前に妙に引っかけたことがあるらしい。

それですつと呆けてたんだよ、な」

「あ、うん……ごめんなさい」

「謝ることじゃないよ、まあ吃驚はしたけどね」

新一は苦笑いだ。

「……新一の？」

「ああ、それだけだ」

「へー……別にいいけどさ。とりあえず青子、こいつには気をつけろよ」

「な、なにを!？」

「オコサマ……」

今度は快斗が疲れて、はあと溜息を吐く。しかしそれ以上は何も言う気がないようだった。

「ほれ、足出せ」

「なっ大丈夫だよっ青子自分で」

「ったく……」

快斗は微かに動いた青子の足にためらいもなく手を伸ばし、掴んだ。

「いついつたー！ーいつ何するの!! 思いつき握るなんて」

青子は悲鳴を上げ、涙目で快斗を睨んだ。忘れていた痛みが蘇る。それを聞いて少し苦笑している快斗。さらに黙って見ていた新一も苦笑いだ。

「オレ軽く握っただけだけど? な、新一」

「結構痛めてるみたいだし、あんまり動かさない方がいいな」

新一は同意こそしなかったが、その実快斗の言葉に付けたしたような忠告に、青子は黙り込んでしまった。

「……………」

「だからオレに任せろって、な?」

「……なによ、馬鹿快斗」

「青子ちゃん、こんなフェミニスト気取りはバ快斗でいいんだよ、舌かむぜ」

横から新一が知恵を付けると、青子は顔を上げて雲間から太陽が覗いたように顔を輝かせた。

「あ、そっかあ! ありがとう新一君」

ぼんと手を打って、しきりに頷いている。

「……………いえいえ」

「ケツ、どっちがフェミニストだよ」

快斗はそんな二人の様子にぶつぶつと呟きながらも、包帯を巻、
かなかった。

かぶせたのは水色のふわりとしたハンカチ一枚。

「……何する気？ 快斗」

「まあ見てるって」

「ったく……」

今までずっと快斗に軽口を叩いていた新一がそう呟くなり、彼の方を見る。青子は二人の視線が一瞬交わったのを確かに感じた。

「……ワン、トウ、スリーツ」

そして彼がハンカチをどけた時、そこには綺麗に包帯の巻かれた足があり、青子は目を丸くする。

「うっそーっ今青子何も感じなかったよっ」

絶対に自分の足に触れなければできない芸当なのに、瞬間的に感覚がなくなっていたとしか思えない本格的な巻き方。青子はただただ、快斗と足を見比べるばかり。

「そりゃオレは、世界一のマジシャンになる男だからな」

「ほ、ほんとなのっ？」

快斗ってすごいんだね、と大きな瞳を更に大きくして、期待に胸を膨らませる青子に、快斗は得意満面の笑顔で答える。それに新一はあつとため息だ。

「大風呂敷広げて泣く羽目になっても知らねーからな」

「あれ 新一？ オレがなれないとでも思ってるのかなー」

「……少なくともおじさんを超すのはだいぶん先になるだろ」

「それについては否定はしねーけど、絶対いつかは超えてやる！
拳を握りしめて熱く語る快斗を新一は冷めた目で見やる。」

「おーおー頑張れ」

「言われなくとも」

二人は青子そつちのけで不敵な笑みを浮かべながら会話を続ける。そこは青子の知らない世界で、そしてそんな二人を見ているうちに突然彼女は気がついた。これからどれだけの長さ一緒にいられるのかなんて問題外、彼等に出会ってしまい、こうして一緒に会話していること自体が計算外なのだ。あと何分なんて考える間もなく、自分は今ここから消えなければならぬ。

親しくなんて、とんでもない。決心が鈍ってしまつ。

「う、ごめん、快、黒羽君、青子もう行かなくちゃ……手当までしてもらつて、本当にありがとう」

出来るだけ何も変わらないように、それが無理ならせめて別れを惜しむあまりに、無理な笑顔になっていると映るように、ぎこちなく笑う気持ちが屈折して届くようにと青子は願った。

しかし、彼は青子の言葉が聞こえるや否や、ぱつと彼女の方を向いたのだ。

「……それすつげー気持ちわりい」

しかめっ面で、青子に言う声まで、本当に気持ち悪そうで、しかしそれは具合が悪いという類ではなく、苛立ちを含んだものだ。

「か、黒羽く……」

「だからっ何で今更言い直すわけ？ 青子、こいつのことは別に工藤君でも呼び捨てでもいいからオレは絶対快斗って呼ぶこと、君付けも禁止っいいいな！」

いや、指を突き付けて宣言されても、困る。もう会う事はないはずなのだ。特に快斗に至つては姿を見せることすら、してはいけないはず。大体、ターゲットとの接触なんてかなり点数に響いているはずなのだ。これ以上点数を落としたり、消滅すら、してしまう可能性がある。

「いや、別にオレも名前でもいいけど……お前、青子ちゃんはどこに住んでるかすら知らない癖によくまあそこまで」

新一が、青子の気持ちをかなり分かりやすい例を用いて説明してくれることに特に違和感も覚えないうらい青子は考えに没頭していた。一方で新一の説明をまだ不機嫌そうに聞いていた快斗は、やがてその蒼みがかかった瞳をまっすぐ青子に向けた。

「青子」

その低い声と瞳の圧力に、青子の意識は急激に浮上させられる。

それだけの力が、その声と瞳に人知れずあることを、おそらく知っているのは新一だけだ。だからこそ、彼は目を見開いた。ここまでの事をして彼が固執する人間なんて、これまでにいなかった。いやもしかしたら自分だけがその対象だったせいで気がついたのかもしれない。たとえこの状況でも、見ていなければありえないと笑い飛ばすくらいには、彼はこんな空気を表に出してこない。

「な、に……？」

「青子は、もうオレらの友達だろ？」

「……え、いやそれは……」

彼女にとっては、突然の出会いで恩人であるが、ついだというかかなり大きなウェイトでターゲットの少年達。もっと言えば、自分人間ですらなくて。それでも、そんな恵子のような存在になれるのだろうか。

青子にはよく分からなかった。気持ちを屈折させる要素が多すぎた。

「……えっと、あ、青子は……か、快斗の事も新一君のことも、大切だよ」

ただ、ついつい、瞳の圧力に負けてそんなことを口走ってしまうほどには彼等に好感を持っていて、感謝もしている。できるなら、

彼らの日常にすこしでも溶け込みたいと願う位、気がつけば彼等が好きになってしまっていた。こんなに簡単に入り込まれるなんておよそ信じられないけれど、全然嫌ではなかった。むしろ自分のことももっと知ってほしいと思ったし人間だったらすら思っ

「つつあ、青子本当にもう行かなきゃっごめんね快斗、もう会う事もないと思うけどっ新一君もありがとうっ」

「え、あ、ああ」

まだ少し、場の空気の変化について行けていなかった新一がこう返したのを皮切りに、青子は痛む足で無理矢理立ち上がると、ドアに掛けより、反射的に伸ばされた快斗の手をすり抜けて、消えた。

勿論すかさず快斗がドアを開け直して、廊下に体ごと出した。しかしそこには既に誰もいなかった。あの怪我で、この速さで開けたドア、それなり続く長い廊下、階段までの距離。全てを考慮しても、まだ足を引きずって歩いているだろうと信じて疑っていなかっただけに、快斗は驚きを隠せなかった。

「……………ど、どうなってんだ？」

「え、いないのか？」

一方でその場から動いていなかった新一は、快斗の驚きによつやく首をドアへと向ける。

「ああ……………消えちまったのかも」

「アホかテメーは」

「……………分かってるよ」

言うなり、快斗は駆けだした。その目を見た新一は、彼よりも先に悟る。

「なんであんな突っ走れるんだよ……………」

初対面で名前しか知らない女の子。どこにでもいそうな、とは言いすぎかもしれないが、とにかく女性なんて所詮染色体上では一種

類だと思っっている彼にしてみれば、呆れしか出てこない。自分にはわからない恋というもの。面倒で疲れるだけで。きつとそんなに想える女性なんて、夢幻、まさに針小棒大で。けれどその点について意見を交わしたことはなくても、ほとんど同じ見解だと思っていた彼の、全く違う結論を見せられれば、少しだけ、寂しいのだ。

「さつさと切り上げるよ……」

そして新一は、読書に戻ったのだった。ただ、そのページは5分経ってもめくられることはなかった。

「はいとこ、こうすればよかった」

そう、あの路地を曲がってくる彼に、出会うまでに。そうしておけば、ターゲットに姿をさらすなんて言う失態も犯さずに済んだかもしれないのに。

「……………はあ」

姿を消してしまえば、青子は誰にも見えないし、気配を察知される事もない。彼からも逃げられることは間違いなかった。

つまり、青子には知る由もないが、快斗の言葉は真実だった。

ただ、いくら最大級の注意を払って風と同等の存在になっているとはいえ、彼のすぐそばを通らなければならなかったのは、どういう理屈だったのだろうか。たとえば、事実はには階段の位置を知らなかった彼女が、いったん戻らなければ階下に降りられないという、単純な位置問題が引き起こしたものであったとしても。

「青子……………」

絶対に察知できないはずの彼女の通った後で確かに振り向いて、その場をもう一度注意深く見た彼の声の、響きなんて。

知らずに済んだかもしれないのに。

青子はもう一度だけ振り返ると、自分を必死に探しているだろう
彼の出す音からも逃げるようにその場を後にした。

4・悪魔から見た人間世界

街に吹き抜ける風は、身を切るようで青子の心の芯まで冷やしていつてしまう。冷たいのではない。悪魔の体感温度は常に一定だ。たとえ夏風でもこの感覚は同じだったはず。

一体あれから、どれほどの人とすれ違って、歩いてきたのか。青子にはそれすら分からなかった。目の前の景色はどんどん流れて行って、だから時間も同じくらい流れているのだろうか。

青子は痛い足を引きずり時折人にぶつかりそうになりながら、謝る気力もなくとぼとぼと歩いていた。俯き加減の彼女を誰も気にとめないのはこの時刻の問題だ。加えて街を歩く人々は木枯らしに身をすくませて皆急ぎ足。闇夜の迫る夕方に、他人のことなど誰も考えない。だから姿を現しているのは誰かに見えるようにだった。透明なままでいたら、質量までは消せない青子は確実に誰かとぶつかって、大惨事になっていただろう。いつそのこと足の痛みも消せたらよかったが、悪魔は人間界に降りると人間の秩序を乱さない為に身体能力も人並みになり、異能もいくつかを残してなくなってしまうので、それは無理な話だった。かといって残った能力で飛ぶ気力もない。結局幾度となく舌打ちをされても彼女が無傷で済んでいるのは、単に彼等に見えるからだだった。

「はあ……」

空を見上げてため息をつくとき、その重さがそのまま自分にのしかかって来るかのようにだった。

どこに行くつもりも、行く場所も彼女にはないのだ。これからどうすればいいのかも一切分からない。

ここにきて出会った人間は、あろうことかターゲットの少年の親友と、そのターゲット本人。運がいいとは今回に限ってはとても言

えない。何しろ、お人よし青子が、しょっぱなから不幸にする張本人に出会ってしまったのだ。これから出会う二人を引き裂くと言う重大使命を帯びていると言うのに、やりにくいことこの上ない。

「はああ」

陸橋の上から、流れる車といきかう人々を見る。誰ひとりとして青子を見る者はいない。それは姿を見せていることとは無関係で、この場にいる者は誰も青子を知らないのだから当然なのだ。

青子は人間界に降りたことはあっても、人間の知り合いはいないので宿のあてはない。そして人間の世界にはお金という紙や金属が必要不可欠で、それがなければ何も満足に手に入らないと現代人間学で習っているが、方法は働くか誰かの庇護下にはいるという二通りのみ。勿論悪魔にはどちらも選べないし、正直必要ではない。

悪魔は食べる必要がない上、寒さも感じないので外でも眠れるからだ。暗くて狭い場所は正直あまり好まないが、それでもその場所に住めてしまう程度には青子は悪魔だ。だから極端に言えば、彼女には行くあてなんて必要ない。なのにこのとてつもない虚無感は何なのだろう。

帰る場所が必要ないと知っているのに、この夕闇の中で思い出すのはあの屈託のない笑み、なんだかんだと言いあいながら、とても仲がよさそうに見えた二人の横顔だった。

その中にほんのわずかでもいられた自分、あんなに純粹に自分の心配をして笑いかけてくれる人がいるなんて、普通はないのだとこの街を見て思い知らされた。

それなのに、その人たちを不幸にしなければならぬなんて。せめて、相手の人間には出会いたくない。リミットまで動き回って、探しているふりをしていれば、二人は出会えるのだから。

(……………それじゃ、ダメ)

何のために自分は人間界に来たのか。そして何のためのラストチャンスなのか。自分とは何者か？

たった一回恩を受けたぐらいで、仇で返せるぐらいの甲斐性がなくてどうするのだろう。本来そういうものなのだから。そうでなければ待つているのは、消滅のみ。

「青子は……悪魔だから」

自分のあんな穴だらけの嘘を信じてくれた、彼を裏切るとは確かに胸が痛むのだ。彼と新一はととても仲がよさそうに見えたから、彼の幸せを快斗はきつと望んでいる。けれど

「ごめんね……快斗」

包帯を見ながら青子は呟いた。もうこれで優しい気持ちは終わらせなければならぬ。それがこの世でない場所に生まれついたものの定めなのだ。この世界は善と悪のバランスが均衡になるように出来ていて、自分はそのための1ピースなのだから。

青子はすうつとその場の空気に溶け込むように姿を消すと、適当な廃ビルを探し出して、鉄柱の隙間から潜り込んで、硬くて冷たいその場所であつという間に眠りについた。人間よりも感覚が鈍いというのはひとつある。けれど普段は飛んでいるのに加え、怪我をしている足で歩くのはもう限界だったからすぐにまぶたが落ちてしまったのである。見つかる心配もないようなビルなので、青子は姿を現して思う存分睡眠に浸った。

青子は特殊な場合を除き基本的には目覚めが良い方だ。しかし今日は疲労困憊していたためか、ぼんやりと目を開けたのは、日が昇っても暗がりになるはずだった廃ビルの陰の寝床に、急に光が差し込んだからだだった。

「おい……おいお譲ちゃん？」

「んー青子まだ眠いのー」

「ここはね、お譲ちゃんが一人で寝てていい場所じゃないんだよ。起きてくれるかい？」

困りきつた声が聞こえて、肩を何度もゆすぶられた青子は少々乱暴なその起こし方に文句を言いたくなり、意識を浮上させた。

「お譲ちゃん！」

「煩いなー青子は眠いんだって……へ？」

意識がはつきりした途端、あまりにも周囲に沢山の人間の目があるって、青子は目をぱちくりとさせる。

「やっと起きたか……全く近頃の子供はどうしてこう非行に走るのか……」

その中でも一番年を取っているように見えるよれよれの灰色のスーツを着た中年の男が青子の肩に手を置いてため息をついていた。現状について行けず、面食らう青子を紺色のスーツをびしっと着こなしたまだ青年と呼べる男たちが無理矢理立たせた。足の痛みはもう大分なくなっていたが、逃げようと思って見回すと、いつの間にか青子の左右は彼等につちりと固められていた。

青子の背中に冷たい汗が伝い落ちる中、一人が中年の男に問いかける。

「警部、この子どうしますか？ 一応署まで連れ帰って、事情聴取をした方がいいとは思いますが、奴のことも含めて」

すると途中までは険しい顔で空中を睨んでいた彼は、急にその言葉を発した青年を見た。

「バカモンっ奴にこんな少女がからんでいるとはとても思えんだろうが。この子についてはワシが責任を持つ。お前たちはこの子を地上まで保護して車に乗せる、その後は誰か一人でいい、運転を頼む。残ったものはここで引き続き、奴の痕跡を探せっあの日、途中でこのビルに入ったのは間違いないんだっ」

「ハッハッ」

三人分の声が見事にかぶり、さすがに青子も彼等が何をしようとしているのかは分かった。しかし、それでもいまだに青子は、この状況が飲みこめていなかった。何せ、入るときに人っ子ひとりない既に廃墟と化してからずいぶん経つだろうこのビルに、人がいる理由が分からないのだ。

おじいさんや子供なら、まだそれぞれ理由をつけて納得できるかもしれないが、こんなまだ若いといえる、軍隊のような人たちに加えて、おそらく隊長と思われる男性など全くの想定外である。

青子は抗議をしようとしたが、青い服の男たちは青子の手をしつかりと掴んでいる。困ったことに彼等はいくつということには場馴れしているらしく、その掴む場所にも動きにも無駄がない。三人とも優しそうな顔をしているが、その力を見る限り一筋縄でいきそうになんてことは十分推測できた。

仕方なく青子は促されるままにビルの階段を下りて行き、その廃ビルの脇に止められた、二代の白い車のうちの一台に押し込まれるように乗せられてしまったのだった。

「う……そ……」

その車のシートに座った青子は顔面蒼白だった。この車は、現代人間の教科書、第六章『犯罪』2項にしっかりと写真が載っていた。人間が罪を犯すと、警察と呼ばれる組織がその人間を連行するのに使う乗り物で、車体の上にある赤いランプがくるくる回りながら点灯し、人々に異常を伝える豪快なサイレン音を鳴らしながら交通ルールを無視して進むことのできる三種類の車のうちのひとつパトカーである。

つまり、彼等は警察官ということ。しかし、なぜ自分が連行されるのか、青子にはそれが全く謎だった。まさか悪魔として罪状が取

られるはずがないので、何か知らないうちに僅か滞在一日半で、人間の法に引つかかるとんでもないことをやらかしてしまったようである。そう思うと途端に怖くなった。

勿論車を見た途端、この情報は優秀な青子のデータベースの中から引つ張り出され、体が震えて僅かに抵抗を試みたのだが、それすらも彼らには覚えのあることらしく、強い力に逆らう事が出来なかった。

これからこの車はどこに向かうのだろう。犯罪者が向かう場所と言えば刑務所だが、この車は様々な用途に用いられる。裁判所の可能性も、拘置所の確率も捨てきれない。六章の知識をありつたけ引つ張り出しているうちに、車は滑らかに走り出した。しかしその車内はとてつもなく静かなままである。青子の危惧していたウーウーと言う耳障りな音は一切なつてはいない。ずっと耳に手を当てて縮こまっていた青子は、恐る恐る顔を上げた。きよとんと数回目を瞬いた青子に隣に座っていた灰色スーツの男は目元を和ませている。それだけ見ればとても犯罪者に対する瞳には見えなかった。

「連行するわけじゃないから落ち付きなさい」
その言葉にほっと胸をなでおろした青子だが、安心もつかの間だった

「話を聞かせてもらっただけだよ」
彼の言葉に再び恐怖を覚えることになったのだった。

青子が連れてこられたのは確かに刑務所でも拘置所でもなく、警察署だった。先ほど、彼等のウチの一人が「署」と言っていたのはこのことだったのかと青子はぼんやりとする記憶を手繰り寄せて納得していた。

警部が先に降りて、付いてきなさいとの一言の後は自力で歩くことを許された。一応後ろから青年が一人、彼女を追うように張り付いているが、それ以外はごく普通に歩いている。しかし青子の心中は自由な体とは裏腹に余計に警戒心を強めていくのだった。

警察署と言う事で、安堵しているからだろうか？ 逃げられないからこそ、警備も緩くなっている可能性は否定できない。もしそうでないとしても何を聞くつもりなのか、そちらの方が問題がある。人間としての知識なら、現代人間学をまじめに勉強したおかげでかなり細かいところまで答える自信はあるが、人間界に来て2日の悪魔には経験不足から答えられない質問だつてある。そう例えば、警部の無線から時折聞こえてきた『キッド』という単語の詳細とか……。

ぐるぐると頭の中でひたすら自問自答を繰り返す青子を差し置いて、男は薄暗い建物の中をどんどん進んで行く。壁も天井も真っ白で、監獄と言うには綺麗すぎるものの、重々しい空気を彼女に与えるのは間違いなかった。

ふと彼が立ち止まったのは、一本道だった廊下に終わりが見えた角をまがったときだった。青子は一端考えを中断させ、警部が話す男性を注意深く観察した。そうしたところで、彼の本性まで見えることはないのだが、見える者聞くものが、全て教科書の比ではなく、そうせずにはいられないのだ。

「中森君、なんでこんなところにいるのかね？ 君は今日、キッドの事後調査に行ったんじゃないかなかったか？」

「は、確かにそうなんですが、署長。実はその現場に、女子が一人いたもので連れ帰ってきたんです」

警部は、さすがにしきりに頭を下げて話している。白髪の混じり始めた初老の男性である署長は、警部と同じ灰色のスーツを着こなしているが、よれておらず、しっかりとクリーニングされているのが良く分かる代物で、青子はその人物の人柄を見たのだった。かと

いって、彼女には警部が悪い人間には到底見えないのだけれど、きつちりとした印象は見た目にも心地よいのは事実だった。

「女の子？ ああ、その子かね」

ふいに、彼の優しそうな視線が青子に注がれ、彼女は一瞬身を固くする。しかし、彼は当然のことながら、青子に特別な物を見出すことはなかった。

「はい、これから事情を聞いた後で、親御さんに迎えに来てもらうと思つとるんです。中学生位にも見えますし、もしかしたら、捜索願が出ているかもしれませんか」

彼の目的は今はっきりとしたが、青子は同時にうるたえた。そのために連れてきて、聞いてくるとなれば、当然家族のことだろう。しかし、青子には両親もいない。悪魔にそんなものは最初から存在しないのだ。どうすべきか、青子は考えようとして、もうひとつ大事なことに気がついた。彼女の年である。

中学生と言うと、大体、13〜15歳。しかし、確かターゲットの工藤新一と毛利蘭は、17歳だった気がする。となると青子ももう一段階上の高校生と言うことにした方がいいだろうと結論付ける。いつ何時何が起こるか分からない。少しでもターゲットに近いほうがいい。

「そうだな。よろしく頼むよ中森君。我々警察が凶悪犯罪ばかりではなく、市民の身近な組織であることを、常に形でしめさねばならんからな……応接室は3番を使いなさい。ちょうど開いている」

品の良い笑顔を見せ、署長は歩き去ったのだった。
「ありがとうございます」

中森警部は深々と礼をして歩きだし、青子と彼女の後ろの青年もそれに倣ったのだった。

二人が、応接室03と書かれたプレートが下げられた部屋に入ると、青子の後ろから付いてくると思っていた青年は、彼女の後ろでパタンとドアを閉めた。どうやら入口で待機するらしい。

そのことにまず安心したが、もっと大きな問題が青子の前には立ちただかっていた。

結局考えてみたところで上手い作り話が浮かぶはずもなかったのだ。あまりにも悲劇的なものを作ってしまうと、後で修正が聞かなくなるし、適当に親役の人間を探すなんて青子にはもっと出来ない。何せ実技が赤点なのだ。知識だけ詰め込んだ透明になれる人間と言う方が青子を表すのには的確である。

そんな青子が自信を持って答えられるのは、せいぜい昨日あの廃ビルにもぐりこんで眠ってしまった経緯ぐらいだろう。

「君の名前は？」

「あ……青子です」

「苗字は？」

青子とはつさに顔を伏せた。本当にはないのだが、それを言うことに罪悪感がある。この国では、苗字と名前があるのが当たり前。事、快斗にも新一にもちゃんとしたのだ。あれだけ時間がありながら、考えていなかった自分には自業自得という言葉しかあてはまらない。「あ、青子は……実は両親がいないんです」

迷った末に、そう言うことにした。嘘ではないので、幾分か話が進めやすいと思ったのである。いや、実際そんな余裕はなかった。青子の頭の中では、六章4項『取り調べ』のページがぐるぐる渦を巻いていたのだから。

下を向いて沈んだ声を出す青子を気の毒に思ったのか、警部の声が幾分か優しくなった。

「そうか、施設には通っていたのか？」

「くりと頷く。

「戻りたくないのかね？」

再び頷く。

「はい……もう二度と……帰るつもりはありません」

その時青子の脳裏に浮かんでいたのは二人の少年たちのいるあの部屋。強く言いきった青子に、警部は少し戸惑っているようだった。彼にしてもこういうことは余り慣れていないのだろう。先ほどから見ている限りでは、彼は『キッド』とかいう犯罪者にかかりっきりの警部の様だから。

「お譲ちゃん……年は？」

「え、あ……17です」

「そうか……ワシの養女になる気はないかね？」

思わぬ申し出に青子はすぐには言われたことが分からなかった。

「……………え？」

「いや……ワシだって、誰かれ構わずこんな提案を持ちかけているのではないんだよ。お前さんぐらいの年だともう施設にも引き取ってはもらえないし、養女を欲しがらる家庭はたいていもう少し小さい子供を望む。ワシは警察官で妻にも先立たれて一人暮らしだ。キッドのせいで最近は生活がますます不規則だから、一緒に住むと言うよりは、ワシが下宿の管理人の様に時折帰るだけの家だ。勿論生活費も困ることはないし……いや、こんな言い方をしては悪いな」

「……………」

「実はな……妻と一緒に腹の中にいた子供も死んでしまった。それがちょうど16年前、生きていればちょうどお前さんぐらいの年なんだよ。そう思うと、どうも他人とは思えなくてな。父親としてあの子にできなかつたことをしてやりたいと思うんだよ……」

警部に探るようにまっすぐ見つめられて、どきまぎしてしまう。

急な申し出だが、青子には断る理由が何もなかった。むしろどこにもつてのない青子にとっては願ったりかなったりな話である。この

人間界で、不必要といつてもやはり憧れる衣食住すべてが保障されて、かつ居場所が出来るのだ。

「あ……あの……青子でよかったら」

「ただ、家のことはその分任せてしまうことになるが、いいかね。今も男の一人暮らしで少々荒れていて、片づけてもらえるとありがたいんだが。勿論、学校には行かせるし、ずっと娘として大切に思うと約束するよ……」

「任せて、青子家事は得意だからっ、じゃあお父さんっこれからよろしくお願いします」

違和感なく言いきって笑った青子に、警部もつられて破顔した。

「ああ、こちらこそよろしく……青子」

それは父親の暖かい笑みだった。

4・悪魔から見た人間世界（後書き）

以降こんなに分かりにくい長々描写はしないつもりです。

5・思い出にはまだ早過ぎる

朝のホームルームが始まる前の教室では男子だろうが女子だろうがざわめくものだ。特に寮のこの男子校において、遅刻してくるなんて物理的にありえないので、本鈴まで大分時間があるこの時間にもクラスメートのほぼ全員が、登校していた。

バカ話に夢中になるもの、登校するだけして、昨夜のゲームの夜更かしからまた寝入ってしまったもの、真面目に勉強するもの、今日の宿題にいそしむもの……。

そんななかで特大の溜息をつく少年がいた。

ぼさぼさ頭は寝癖なのか、もともとのくせつ毛なのか、四方八方にびんぴんとはねている。それは、だるさを隠そうともしない快斗だった。

「はー」

「あんなあ……朝っぱらからなんでそんなながい溜め息聞かなアカンねん！」

不機嫌丸出しでそういうのは、前の席に座る服部平次だった。快斗は机にだらーと両手を伸ばし、頬をくつつけて、やる気のなさ200%の格好なのだ。見ているも苛立つのか、浅黒い顔の眉間には皺が寄っている。だれだつてこんな態度朝っぱらから見せられたくはないだろうが、それだけではなく、いつも元気な彼がこうでは調子が狂うのである。

「平ちゃん……オレもう駄目、体に力が入んないー」

「だから、なんで快がそんなことになってんねん、理由を言え理由を」

「今日の朝ごはんがアジの開きだったからでしょう？」

溜息をつくことすらなく、読んだ本から目も上げず、さらりと言

い切る離れた席の白馬探に、なるほどなあと言きながらも驚く平次。余談だが、読書中の探に言葉を投げさせるとは相当な出来事である。「そーそー好き嫌いで自分の朝飯減らした癖に文句言う筋合いねーだろ」

立つてはいるものの壁にもたれて窓の外を見ているのは新一。彼の場合、やる気のなさは日常茶飯事だ。

「んだよ、皆して……その分飯をかつくらって来たんで、腹は減ってないんです だ！」

集中砲火に対して子供の様にすねる快斗に新一以外の面々は更にあきれ顔だった。代表して平次が言う。

「やったら自分、なんでそんなに元気がないねん。いつものごとく、ぱーっとマジックでもやって気まぎらわせたらどうや？ こっちが滅入ってまうわ」

「んな気分じゃねーっていうか……」

「だから、断片ばかりごちゃごちゃ言うたらんと原因を言えっちゅーとるんじゃっ」

ついに吼えた平次に快斗は吐き捨てた。

「……見つからなかったんだよ」

「はあどういふ事やねん？」

「……別に」

ぶすくれる快斗に代わり新一が苦笑交じりに詳細を説明する。勿論女子だとはいえないので、とある人間を昨日助けたのだが、なぜか急に帰ると言い出して慌てて追いかけた快斗が見失った。ということにしたのだが。

「みつからなかったって、君がですか？」

彼が彼であるために必要なスキルである『気配を読む』と言うことに関して、こと超一流であると言う事を知っている探にとって、この告白は、青天の霹靂だった。分厚い本から彼を引き離し、さらに彼を凝視させるほどには。

「んだよ、なんか文句あんのか？」

素で危険地帯に行く探を半目で睨む快斗だが、そんな目線にも気がつかず、探は深く考え込んでしまった。仕方なく事情を知る新一がそれをなだめにかかる。

結果的にその場でたつた一人平次が残されることになった。本来お気楽主義の彼だが、さすがにこの居心地の悪さには、我慢が出来なかつたらしい。ただ、彼も新一と同じ探偵というものを名乗っている。新一から、その相手までは詳しく聞いていないものの、快斗と言う人物が単なるマジシャン志望の少年にしては頭の回転が探偵とはまた別のところで速く、人の気配にも敏感であることはよく知っているのです、これがただ事ではないと分かっていた。

だが、彼は生粋の大阪人で、沈黙には耐えられない。なによりそれが彼にとつて一番辛いことなのだ。

「あーもうやめやめ辛気臭いっ」

両手を体の前で大げさに振り、持ち前の腹の底からの声を張り上げれば、二人の探偵とマジシャン志望の少年は一瞬にして視線を彼へと向ける。平次はそれを自覚してから、もう一度大声を出した。

「えーか快斗、人間すぎたことをいつまでもぐちぐち言うとなると、それだけで人生終わってまうんや、お前のレーダーすり抜けたその超人はひとまずおいといて、とりあえず、今は授業受けるべきやろ、1時間目のチャイムそろそろ鳴るんや、さっさと切り替え」

一息で言い切ると、率先して教科書とノート、筆箱を鞆から出していく。それを見ていた三人は、取り残されたのか、正常なのかそれすら分からないままに互いに誰ともなく顔を見合わせた。

次の瞬間一斉に嘖き出す。

「な、なに笑ってんねん自分ら、気色悪う」

「いや、だつてお前普段はグーカー寝てやがる癖に」

「そうですね、この前の授業中だって……」

探が嫌みでなく笑いをこらえきれないと、平次は簡単に爆発した。

「誰のせいや思てんねん、こら快っ」

「え、オレ？」

「どっからどう考えてもお前じゃあほんだらっ」

詰め寄る平次がその頭を叩く一瞬間に、快斗は猫のように机から逃げ出して、新一の側にいる。

「やーん平次君が怖いー新ちゃん助けてー」

「気持ちわりいんだよ」

軽く一蹴するだけで、極力無関係を装う新一。しかしその努力が報われることはなかった。剣道の腕に自信がある彼の動きを読み取って攻撃を避けた快斗に対しての平次の驚きは怒りには勝てなかったようだ。

「大体工藤がちゃんと説明せんからこういうことになるんやろっ消えるなんて非現実的すぎるっちゅーねんっ」

「それは飛躍しすぎじゃねえか？」

「うっさいわー」

もはや完全に平次は言えば言うだけド壺にはまる状況にあった。

この時は、誰ひとりとして、今顔を真っ赤にして周囲を巻き込んでいる少年が、演説の際に口走った言葉が、実は真実だったなんて、想像もしていなかったのだ。

そして、黒い彼が虚しく怒鳴る中、1時間目のついでに彼等の日常への帰還を告げるチャイムが鳴る。

密かな事実は、出会いと共に、二人のルームメイトの中だけに永遠に内包される、ことになる。

しかし、快斗の奇怪な行動は、勿論朝だけにとどまらなかった。

というか、彼が普段なら出来る奇怪なことを、いかに無理やりセーブしているかということについての片鱗を見せまくる、という彼にはありえないドジを、連発していた。

1時間目、英語では、普段はつつかえつつかえ読む予習をしてきていない駄目高校生を演じている彼が、すらすらとまるで日本語を読むように読んでみせ、あまつさえ、教科書の読みにくさを指摘し、教師とクラスメートをあつげにとられさせ、2時間目、体育ではぼうつとした快斗をねらったドッジボールを見事な反射神経（まるで猫か豹のようにやわらかい体つきで）でよけゲームを一時中断させる求心力を發揮し、3時間目音楽では探も呆れるほどの難曲を、自由曲ということで無意識に弾きこなし、4時間目の古文では、疲れたのかねむってしまったものの、ぶち切れた教師に当てられると辞書も見ないで教科書のまるまる1ページを完璧に訳した。

そんなあまりの彼の超人ぶりに、昼休みにはこのクラスにもともといる努力天才型の新一から快斗へ、主席の座が移るのではないかという噂まで飛び交う始末だった。しかし、友人達が快斗の周りに群がっても、当の彼は上の空もいいところで、ぼうつと教室や窓の外を眺めているだけで、心ここにあらず。徐々に離れていく友人達遠巻きに見ているても今の彼は、少しどころかかなり不気味だった。

「マジでお前……どうした？」

結果的に周囲からの無言のヘルプコールを受けた新一が、快斗に溜息交じりに問いかければ、快斗は一瞬新一をちらりと見て、またぼんやりと教室を見る。

「……わかんねえ」

「は？」

「なんか……つまんねえんだ」

「？ 何が？」

「……昨日までそんなこと思いもしなかったのに」

はーと溜息を吐く快斗を見て、その言葉が、新一の質問に対する答えではないと知った新一は言葉を失い、天井を仰いだ。そして快斗がこうなった正確な時を、新一ははつきりと言い当てられる。そしてその原因も、きつと間違っではないだろうか。

しかし、それをこいつに言うのはとても癪なのだ。

第一自分が受け入れられていない。そんな状況で言うのは快斗にも己にもよくない気がした。そこで新一は、実力行使に出る。

「……なあ快斗……お前の超人っぷりがこれ以上発揮されると、困るのお前じゃねえのか？ さつき職員室の前通ったら、留学だ云々言ってたぞ。別に止めやしねーけどこれからやり辛くなってもオレのせいじゃねーからな？」

「なっつ」

快斗が本気になれば、実はアメリカの一流大学でも主席が取れるのだと言うことを知っている新一からの助言、これが届かなかつたらもはやなにも届くまい。そう思っていた彼の行動は功を奏し快斗は今初めて新一を新一と認識したようだった。

それはそうだろう、快斗が今までひた隠しにしていたのは、幼い頃からの苦い経験故なのだ。

ひとよりも少し頭がよい程度ならば尊敬もされるだろうが、小学生で既に微分積分の定理を理解してしまうほどでは輪にはとても入れない。逆に言えば、それだからこそ新一とのつながりも生まれたのだが、快斗にとって高すぎるIQは、怪盗をする時以外は無用の長物だった。

「……ま、頑張れよ。午後からもそんなんじゃ、明日にはおめー海外行きの飛行機の中だろうぜ」

「……」

そして危機感を覚えた快斗は、5時間目の化学では、計算式を済

んでのところの間違えるというぽかをやらかし、6時間目の美術では、奇妙なオブジェを作り上げた。ちなみにそれは彼曰くトーテムポールらしいのだが、とてもそうは見えず周囲の失笑を買うものだった。

当然クラスメートからは散々問い詰められたが、それでも快斗はあくまでもシラを切りとおし、いつものようにおどけてマジックショーを始めるのだった。

クラス中が興奮の渦に包まれる中、新一を鋭いまなざしで見つめる目が二対。当然それに気がついていた彼は、後でなと返事をして、あとはもう快斗のマジックに見入るのだった。日本警察の救世主と歌われた彼に、こんなおだやかな放課後はそう何日もあるものではなく、その中で彼のお気に入りシヨウが見れるとなれば、さらに確率が下がる。もう自分でもタネが分からない。そして皆の輪に入るどころか、中心となれる秘密兵器、快斗の最高のマジックを新一は純粹に楽しんでいた。

そして放課後の体育館倉庫。

部活で使う人間があらかた道具を取り出した頃を見計らい、さつさと帰ってしまった快斗にはばれないように、新一、探、平次の三人は、男三人むさくるしい場所で三角形の頂点にそれぞれ無言で立っていた。

「……………」

長い沈黙を破った平次の台詞に、新一はたまらずに苦笑する。平次はさらに苛立ち募らせたらしい。もともと、彼の超人振りを知らなかったうちの一人だ。多少頭が切れるといっても、あそこまでとはとても思っていなかったのだろう。いや、新一ほどではないとい

つても聡い彼のことだから、本当にあれが片鱗であることを、見抜いている確率の方が高い。

「工藤……知つとつたな……」

じろりと睨まれて、新一は漸く笑いを納めた。さすがにこれ以上笑い続けるのは不謹慎だ。

「ああ、知ってたよ……だけど別にあいづが言うつもりでないなら、良いかと思っただけだ」

「はっ快がどんな能力持つとるかなんて、そんなんはどーでもええわ。なんで隠す必要があんねん」

思ったとおりの切り返しに新一は肩をすくめる。高校生で、しかも大分人間が出来上がっている彼等が、今更そのことで快斗をのけ者にするなどは、新一だって思っっちゃいない。面倒なことになるという認識はあつたものの、それもまた別次元だ。

「あいづは結構繊細なんだよ。何かを守るためならいくらだって仮面を被るさ」

「ふーん、ならそれはそれでええわ。後は快に直接話すことにしようか」

ここで一応の決着を見た、と思いたい新一は彼らの方をじろりと見た。

「そのためだけに呼び出したのか？」

「工藤君、ごまかさないで下さい。普段は完璧に演技していた黒羽君があればなくなった理由を、貴方は知っているんでしょう？」

ずっと人差し指を自分に向かって伸ばされると、あまりいい気がない。犯人扱いされているみたいだ。新一はふっと視線を逸らした。自嘲的な笑みと共に

果たして言ってしまうって良いものだろうか。自分は確信しているが、その正体を知らず、もつと悪いことに本人は無自覚ときている。しかもその出会いは、ありえないといわれるこの男子校のできごと

とだ。

結局彼は慎重に言葉を選び、どうでもいいことのように切り出した。

「……なあオメーら、一目惚れって信じるか？」

「「……………は（あ）？」」

間抜けな大阪人の高い声と、呆けた常識人の声は、トーンこそ違うものの、見事にシンクロしていた。

「だ、誰にやねん」

「そうですね、今更この学校で一目惚れって、町でも歩いててですか？」

「ま……そんなとこだろ。とにかくオレが言えるのはこれだけ。あいつある女の子に会って、別れてからずっとあんな感じだからっていうあくまでも推測の域」

よどみなく言い切った新一が黙ると、しばらくその場には、重たい沈黙が流れた。バスケ部がボールを打ち付ける音がやけにはつきりと聞こえるほど。

「あの快が……信じられへんわ」

「同感です。女性には皆平等に接してるイメージがあったのですが……………」

二人とも、盆と正月がいつぺんにきたような顔をして、この場にはいない親友に思いを馳せるのだった。

「オレだって無理だよ。ただお前なら分かるんじゃないやねえの？ 遠山さんいるんだし……………」

「だ、誰がやつ和葉はなあっ全く関係ない幼馴染ツちゅーだけの」

「この前デートだったくせに」

「……………ちやうつあれは、和葉がどうしても言いよるからっ」

言い逃れようとする彼に、探は一気に畳み掛けた。

「普通それで、大して興味もない人物の個展なんか行きませんよね」
「だな」

「お前らえー加減にせえ!!!」
顔を赤くして怒鳴っても、全く説得力のない平次に、探と新一はにやりと笑った。

「ま……服部のことは置いて……どっちにしろきつともう二度と会えないだろうな」

「どうしてですか？」

問いかける探に、新一はあっさりと言で答えた。

「その子、迷子だったんだよ」

「はあ、なるほど」

もう出会えるかすらも分からない少女に対して出来ることは無い。それが男子校の寮生活という限られた世界で生きる彼等の日常なのだ。

6・それは特別か唯一か

快斗の天才疑惑が浮上してから数日後の良く晴れた朝。

「おとーさんっ朝食出来たよー早く起きないと遅刻しちゃうよー」

中森家でつい数日前から始まった習慣が、今日もまた繰り返されていた。ただし、その時刻はまだ早朝と呼べ、到底遅刻にはなりそうにない。しかし青子に言わせると、これでもぎりぎりなのだ。

中森銀三は一人暮らしが長かったので、放っておいても出勤時間までには起きてくる。しかし、男の一人暮らしでは家で朝食を食べるという習慣がなかったために、本当に彼は出勤数十分前にやっとベッドから出るのが普通だった。当然のこととして朝食と一緒に食べると思っていた青子は、彼が起きてからの新幹線のようなスピード出勤に初日度肝を抜かれたのだった。

そして、次の日から真面目な青子はそれをよしとせず、毎日彼に朝食と歯磨きを身だしなみとして強要した。起きる時間もその分だけ早くしなければ間に合わない。加えて青子のいう、『朝は余裕を持って行動しなくちゃ』という信条のもとに、銀三はここ数日、普段よりも45分も早く起こされているのであった。

「青子……あと5分……」

「だめっそんなこといって結局また朝食抜く気なんですよー！ほんとにもうっだらしないんだからっ」

この奇妙な親子の申し出を受けた青子は最初の数日こそ戸惑ってなかなか彼と父親として接してくれなかったが、役所に届出を一緒に出しに行ったことを境に、だんだんと打ち解けるようになり、現在はこのような当たり前の家族の会話？ をするまでに成長したのである。銀三としては嬉しいと思うべきことなのだろう。しかし、朝からこの声でわめかれると正直堪えるというのもまた、娘を持つ

た彼の新たな悩みだったりした。

総合して、彼は今とても幸せなので、贅沢な悩みではある。何せ内容がいい。

「おとーさんっほらっ今日のご飯はね、青子特製のお味噌汁と玉子焼きだよっ、大分巻くの上手くなっただから冷めないうちに食べてよー」

「ああ、わかつたわかつた」

年頃の娘の料理の腕がどれほどのものか彼には分からないが、少なくとも青子のように甲斐甲斐しく世話を焼くなんて、一般的な女子高校生像からは程遠いものだということを、彼は仕事柄良く知っている。しかも、亡き妻に良く似た面影を持つこの少女を、どうやったら邪険に出来るだろう。養女にしたのは本当に数日前のことなのに、まるでずっと親子だったかのようなこの青子のなつきぶりも銀三の気持ちを穏やかにさせる。大きな目を良く動かして、表情がくるくると変わる、そんな小動物のような可愛さを前に、文句が言えるものだろうか。しかも100%自分のことを考えた好意からのものだ。

勿論彼は眠い目を無理やり開けて、娘のふくれっつらを笑顔に変えることに尽力したのだった。

宣言していた通りに、青子は料理上手だった。和食が食べたいという銀三に、玉子焼きを作ったことがないと言って、最初は申し訳なさそうに目玉焼きを出したのだが、それも今日は見事な玉子焼きとお味噌汁、ほかほかのご飯という自分の昼食かと思えるくらいに豪華な朝ごはん。はつきりいつて、このクオリティがあってもなくても自分としては問題ないし、卵かけごはんでも喜んで食すのだが、洋食には目玉焼き、和食には玉子焼き、をなぜかセットだと考えている青子は、毎日卵を買ってきては、練習にいそしんだようだった。卵の摂取量が心配になるが、そこは青子も考えた様で、お隣

のおばあさまに差し入れしたり、銀三のお弁当につめたりと、頭を使っていた。

そして今日も青子は銀三のためにお弁当を用意して、テーブルに既に巾着に包んで並べていた。そしてその横にはかわいらしい赤いお弁当箱も並んでいる。まだ中身は詰まっていないが、それは、銀三が青子のためにと、商店街で買ってきたものだった。

そう、青子のためのお弁当箱なのだ。青子は今日から高校生として、学校に行くことになっていた。それもこの辺りでも有名な私立の女子高校の制服を現在青子は着ている。

そこに入れたのは、青子のというよりは父の希望、しかし彼に言わせればなぜか落ちる気がしなかったのだ。死に別れた妻が秀才だったこともあった。高校は一杯あるのだし、物は試しにと青子を言いくるめて編入試験を受けさせてみたところ、なんと過去ないとされる高得点を弾き出し、見事合格というか、熱烈に入学を勧められ、それは銀三の新たな密かな自慢となった。加えてこの家事の腕、出来の良い娘はいまや銀三の何よりの宝物だった。勿論優秀ではなくても青子を手放すつもりは微塵もないのだが、今はもう、手放すという選択肢がないというほどの溺愛ぶりなのだ。

「青子、うまいよ、この玉子焼き」

「ほんとおっ」

頬に手を当てて、嬉しそうに言う青子に、銀三も笑みを返す。塩加減と砂糖の量が絶妙で、いくつでもいけてしまう味だった。少々幼い見た目は、17歳にはとても見えないが、そんなことは娘を可愛がる基準にはなり得ない。銀三は手前の味噌汁の椀を引き寄せて、ずずつとすすった。旨い。

しかし、こうもとんとん拍子に話が進むと、自分の意思だけで押し通したことが気にもなってくる。遠慮というものを何処かに置き忘れてしまったかのように、青子は接してくれるが、それでも数日

前までは他人だったのだ。あの明るい笑顔の裏でなにか心を痛めているのであれば、それはいち早く気がついておきたい。

「なあ青子、本当にいいのか？」

「ん？ 何が？」

玉子焼きを口に入れ、ほんとだ、おいしいつ、と顔全体で喜んだ彼女は、お茶を飲み込むと首をかしげた。いちいち動作がかわいらしすぎるのは問題で、通わせるのがつくづく女子校でよかったと思う。しかもこれが計算ではないことは既に立証済みで、この点に関しては今更共学にといわれても銀三も頑張るつもりでいるのだ。

彼は知らなかった。その思考が既に、親ばかりの第一歩だということ。

「あの高校だ……ワシが、青子の希望も聞かずに試験を受けさせたこと、怒つたらんか？」

「なーに言ってるのお父さん、青子あの学校の制服すっごく気に入ったんだよ。家からも近いし。大丈夫。いじめられたりしないから」

「いや、そういうことではなくて……まあいい、何かあったら言いなさい」

「うんっでも青子ね、前は共学だったから、今度は女子校で凄く嬉しいの」

「そうか……」

「うん。あつでも結構昔のことなんだけどねっ」

慌てて取り繕うさまを見るのが、少し辛い。彼女の望む幸せを与えられているかどうか、親として最低限のことはさせてやりたいと願っていた。

「……無理に話さなくてもいいんだ。また今度話したいときに聞くさ」

「……うん、ありがとう、お父さん」

そう話す青子は少しだけ大人びて見えた。17歳高校二年生。こ

の年頃の少女は、型にはまらない。

銀三は青子の朝食を残さず平らげると、満足そうに出かけていったのだった。

そのすぐ後青子はがたと椅子から立ち上がる。

「さーて青子も準備しなくちゃ」

結局青子が片付けと戸締りと身の回りのことをして部屋を出たのは、8時だった。学校までの道のりが約15分。本鈴がなるのが8時30分。少し早めの方が何かと融通が利く。動きっぱなしで少しい体は辛かったが青子は学校へと向かった。

「蘭、おはよう」

「ああ、園子、おはよう」

バンドナを引き上げておでこを出したショート髪の少女に蘭と呼ばれた少女は、振り返ると綺麗に笑った。それだけで、登校していた女子生徒数人の動きが止まる。しかし、当の本人と声を掛けてきた少女、園子は気づいていないのか、互いに挨拶を済ませると歩き出した。

歩き出してしばらく、園子が周りを見て、隣の友を見る。

「ほーんと、不思議なんだけど」

「え？ なにが？」

「蘭ってさ、どうして彼氏いないわけ」

「えええっそ、園子？朝一番から何言ってるの？ 出来るわけない

じゃない」

急に顔を真っ赤にして全否定する少女に、園子は呆れ顔だ。

「……ほんとに天然なんだから」

女子まで虜にしてるつてのに……そう独り言のようにつぶやくと歩き出す園子。蘭だけが、その事実を知らない。

「ねー園子、どうしたの？ 怒ってるの？」

「いやー世の中の男が不憫だなあって思うだけ。ま、あたしとしては可愛い親友を何処の馬の骨とも分からない相手に取られるより良いけどね」

「もう園子ったら、そんな話ばかり……」

「はいはい、じゃ、この話はこれでおしまい。蘭知ってる？ 今日、転校生が来るんだって」

「えっそうなの？」

目を丸くする蘭に、やはり知らなかったかと、園子は説明を始める。

「そうなのよ、蘭と並ぶかそれ以上の秀才らしいんだけどね……」

「……どうしてそんなこと分かるの？」

「昨日の放課後、先生達が話しているのを聞いたから。編入テストほぼ満点だったって」

さらっと言つてのける園子に、蘭は呆れたような目を向ける。

「園子ってほんとそういうリーダー鋭いよね」

「勿論よ。この鈴木園子さまをなめてもらっちゃーこまるわ」

がはははと乙女にあるまじき高笑いをする園子を、蘭は恥かしいと言いなから止めようとするが、空手部の主将として文部両道で有名な蘭と、その親友の鈴木園子は、学園内の名物コンビだったりするのでいつものことだと誰も気に止めない。

ちなみに園子はこう見えて鈴木財閥のご令嬢である。学園では半分冗談のようにささやかれるが、立派な事実なのだ。

「あーもうっ園子恥ずかしいってば」

蘭がまだまだ頑張るその横では軽快な足音がして、園子はそっち

に意識を持っていかれている。

「おはよー蘭ちゃんっ」

そして元気な声が彼女に声をかけてくる。見た目からしてポニールがさわやかな印象を与える少女だ。

「あ、和葉ちゃん……」

「おはよー」

驚く蘭の横で、園子は平然と挨拶をしている。

「朝っぱらから仲ええねー」

楽しそうに園子と蘭を見比べる和葉は、始終笑顔で蘭と園子はなんとなく漂う気まずい空気に言い合いをやめた。尤も、園子は完全に遊びの一環だったのだが。

「あのね、和葉ちゃん……実はね」

「んー？」

「転校生が来るんだって」

「ええっそーなんっ！ うわーどんな子やる楽しみやあ」

顔をほころばせて、まだ見ぬ転校生へ想いをはせる和葉。その彼女を園子がつつつく。

「いやほんと、ここが女子高でよかったよねえ、転校生が来るたびにそんなんじゃ、きつと服部君も気が気じゃないでしょ？ うーん、和葉ちゃんのお母さんさすが」

「な、なんでそこせオカンがでてくるんやあっそれに平次は関係ないやろ。幼馴染やっ」

先ほどの蘭と同じくらい真赤になって反論する和葉。蘭はあははと曖昧に笑った。

蘭、園子、和葉。この三人はとも仲の良い同じクラスのクラスメイトで、ついでに言うのなら、和葉だけは（幼馴染と言い張っている）相手がいる。

「どんな子なんだろう？ 出来たら仲良くなりたいね」

「あー楽しみだわ」

「ま、どんな子でも、きつとアタシなら大丈夫やて」

「そうだね」

そして三人は笑いながら、校舎内へと消えていった。

何処の学校でもこんなことをするのだろうか、なんだかこれではまるで劇のようだと青子は苦笑する。実際過去も何も無い彼女にとつては全てがお芝居だ。

そもそも本来こんな予定はなかった。それがあれよあれよというまに、警部と一緒に住むようになって、学校まで行かせてもらうことになって。もちろんそれはとてつもない幸運だ。ただ、その分もう一人のターゲットを探し出す時間が減ってしまう。そのことを考えるとほんの少しだけ憂鬱だった。今の生活に十分すぎるほど満足しているだけに、本当の目的を思い出すと怖くもなる。

逆に、まだまだ悪魔になりきれしていない自分の存在が、恨めしいとも思っていた。

(悪魔だったこと、絶対ばれないようにしなくちゃ)

銀三のように、ある時間だけ気をつけていれば良いものではない。そう簡単に尻尾を掴ませたりはしないが、十分に注意は必要だった。そんな風に考えると急に心細くなる。これから青子は一瞬たりとも気が抜けないのだ。それは、本当に気の置けない友人を作れないことを意味する。

無論……悪魔に友人も何もないのだが。

じわ…………あ…………

泣き虫青子の目から、涙がぼろりと零れ落ちる。

「う…………う…………」

こんな時、何時も側にいてくれた恵子がいれば心強いのに……。

絶体絶命の思いで目を閉じた時。ふいに、記憶の中にまだ鮮明にいる彼が、ぽんつと赤い薔薇を差し出してきた。

『まったく信用ねえなあ……そんなにオレ悪い奴に見える？』

『オレは、世界一のマジシャンになる男だからな』

『青子は、もうオレらの友達だろ？』

自分の中から聞こえるいくつものテノールに耳を澄ませると嘘のように安心した。なんでこんなに覚えているのかも、よく分からないけれど。

「かい……と……」

さらに彼の笑みを思い浮かべると不思議と涙が止まった。その笑顔が青子の気持ちをぐつと押し上げてくれた。

大丈夫。頑張れる。絶対、大丈夫。

根拠のない自信が湧き上がる。

(同じ学校だったら、良かったのに。女子校じゃ、会える可能性もないよ)

「つつっ!!」

浮かんだ気持ちをぶんぶん首を振って打ち消す。それは、考えてもいけないことだ。

ターゲットの親友という事実がある限り、彼の前には姿を現せない。

あの二人と自分が関わったら、これから関わることになるはずの少女との間に自分という繋がりが出来てしまう。

出来れば、あの二人を傷つけない。

何より……全部知ったらきつと軽蔑される。彼らには嫌われたいなかった。

それ以前にもう二度と、会えないだろう。夢中で飛び出してきて学校の名前も、覚えていないのだ。

(……バイバイ、快斗)

「中森さん、入ってくださいーい」

タイミングよく教師の声が聞こえて、青子は現在の状況を思い出していた。そう、紹介されるため、廊下に控えていたのだ。

決意も大事だけれど、現実も忘れちゃいけない。そしてこれが今の青子の現実。この高校の転入生。

青子はゆっくりと目の前の扉を強い意思を込めた瞳と共に押し開けたのだった。

7・行動だけが素直で

教室に入ってきた青子を見て、まず固まったのは園子だった。そしてクラス中がある一点へと視線を向ける。普通の転校生がやってくるのは明らかに違うその反応に、青子は大きな目をぱちくりさせた。しかし、次の瞬間にはクラスの視線はどういうわけか、一斉に自分に釘付けである。教師を見るが、熟練らしい女教師小林は、面白そうににやりとするだけ。青子はますますうろたえた。

「蘭は……ここにいる、と」

漸く園子が首をひねってある方向を見、吐き出すようにつぶやいた声に、クラス中が我に帰った。

そしてその視線を動かさないものの中で自然と追っていた青子も漸くその意味が理解できたのだった。なにせ目があったあの本人達、蘭と青子もお互いを見つめたまま動けなくなってしまったのだから。その少女の方はずっと青子の方を見ていたようで、視線がばつちりと合うが、逸らすことすらどちらも考えられない様だった。

二人の容姿は、髪と言いたくないが体型以外、ほとんど同じだったのだ。それこそ生き別れの姉妹といっても通用しそうなほど。恐らく立ち上がれば身長もそう大差ないように思える。若干蘭の方が高いかもしれないが。まるで鏡を見ている様だった。

そこで漸く小林先生が立ち上がる。パンパンと手を叩いて、まだ現実を受け入れられていない生徒を何人か、青子と蘭も含めて引き戻す。

「はい皆さん。驚かれたとは思いますが、毛利さんと中森さんの間には何の関係もありませんからね！。先生も始めて見た時は驚いたのよ。にしても中森さんとはとっても頭が良いし、本当にこうして2人一緒にいると毛利さんの妹みたいね」

茶化すような先生に、蘭は表情を出したが、まさに混乱状態。青子も何がなんだか分からずに、口をパクパクさせた。

「はいはい、それじゃ自己紹介御願いな、中森さん」

そんな青子にお構いなく、テンポ良くそういわれて、漸く自分が何をすべきか、分かつたくらいなのだ。

「あ、え、えーっと中森青子です。数日前にこの町に引っ越してきました。よろしく御願います!!」

ぴよこんと頭を下げて、実に簡潔な挨拶だが、今の青子にはこれが出るだけで十分だと皆が思った。

「それじゃ中森さんの席は、そうねえー鈴木さんの隣で御願いな、鈴木さんよろしくね」

「はいっ！ 蘭似の女の子ならますます大歓迎！ さ、こっちこっち」

「あ、はい……」

指名された青子はゆっくりとクラスメートの机の間を縫うように進み、廊下に一番近い手を上げる園子の席の隣に座った。

まだ戸惑いながらも笑って声を掛ける。

「よ、よろしくね……」

「うん、よろしく。あたし、鈴木園子、園子って呼んでね？」

ウインクをしてくるこの少女はとても親しみやすそうで、青子もこわばっていた顔の筋肉がほぐれていくのを感じていた。

「あ、青子も青子で良いよ」

「了解、じゃ、これから楽しくやりましょ」

2人で笑いあったところで、一時間目のチャイムが鳴る。

この頃になって漸くほっと胸を撫でおろす青子だった。

「あーおーこちゃん！」

一時間目終了のチャイムがなって、一番最初に青子の側にやってきたのは、和葉だった。この蘭によく似た少女に興味津々の様子である。

「うわーほんま近くで見てもよー似てるわ。でもちよつとだけ青子ちゃんの方が可愛らしい感じやな」

「えっそ、そんなことないよ。でも青子子供っぽいってよく言われるから、あたってるかも」

「そうねえ……蘭よりは幼い感じよね。行動も声も。ま、これはこれで好きって奴かなりいそうだけど」

言いながら園子は、はーと溜息をつく。その意味を知らないのは幸か不幸か青子だけだったようで、落ち着かなさそうに辺りを見ると、いつのまにか集まっていた女子達が、うんうんと頷いていた。

「そ、園子ちゃん？」

「ねー蘭？アンタ当事者でしょ、どう思う？」

「どうって……」

困ったような声に皆が今度はその少女を見る。注目された蘭は本当に青子に良く似ている。確かに彼女の方が大人っぽい顔立ちで、物静かで知的そうだが、青子も努力すればこうなる可能性があるといえるほどには。

「……そんなに、似てる……かな？」

あんなに固まっていたのに、改めて言う蘭は、あきらかに天然でもとてもとても綺麗で、青子は一瞬で彼女に惹かれた。

「だ、ただとだけど蘭ちゃんのほうがもつと素敵だよ！」

熱を込めていったところで、園子から茶々が入る。

「おおっと、毛利蘭、またもや少女を一人、腰抜けにしましたー」

……え？

彼女のノリはいつものことなのだろう。楽しそうに笑っている皆

の中で、青子は一人顔をこわばらせた。園子は確かに、彼女のことを蘭、蘭と呼んでいて、しかも先生は、毛利さんと呼んでいて。気がつかないって相当鈍いけれど。あの状況じゃ無理ない。

魔界で紅子に言われたターゲット名は

工藤新一と毛利蘭

まさか見つけれられるとは思わなかった。こんなに近くに、いるなんて。こんなに早々……両者に出会えるなんて。だけど問題はそこじゃない、この少女が、とても魅力的で、青子を一瞬にして惹き付けてしまったように、工藤新一も、もしかしたら彼も……彼女に惹かれてしまわないなんてこと、きつとありえないということだ。いやこの二人、もともと魂が引き合うというのだからその可能性が100%である。

だったらもう、出会わせないことだ。出会わせたらおわりだ。そう確信した。

幸いここは女子校で、普通に暮らしている分には、会うこともないはずだから。しばらくは何の心配も要らない。新一は寮生活で恐らくは隣町に住んでいる。自分さえ、変な気を起こさなければ、蘭をマークしているだけで十分。マークするだけなら、誰も傷つけない。なくていい。

しかし少女は知らなかったのだ。

彼女が、彼女自信が既に彼等の出会いを導いてしまっていること。ある一人の少年によって。

真つ暗闇を落ちていく中で、そちらを選んだ、青子自身の選択によって。

けれど、義務を負いながらも青子の身分は今も学生だ。人間の勉強も悪魔の勉強も本質は一緒。もともと勉強が好きな青子には最高の環境で、蘭も園子も和葉も自分にとてもよくしてくれる。いつのまにか当たり前前に仲間に組み込まれていた。

そんな工藤新一に会うはずのない穏やかな日々の中で、青子の危機感は徐々に徐々に薄れていくのだった。

そして、時折、本当に時折、あの元気いっぱい悪戯な笑みを思い出して辛くなる時があるけれど、それは一種のはしかのようなものだと、言い聞かせて。礼をいいたくなる気持ちを、無理やり押し殺して、青子は蘭の監視、別名友達を続けていたのであった。

そのため、手を打たなければ運命は動き出し、何もなくても時間はひたすら進む。そのことを、青子が痛感したのは、もう全てが動き出した後だった。

「よつと……この辺で良いな」

オシロイバナが咲き乱れる花壇を背後にして、夕闇迫る駅の前、時計台の下のいうなれば待ち合わせスポットで、背後からの光の度合いを確認しながら、立ち位置を変えている少年が一人。その明らかに帰り道を急ぐでもない、しかし手ぶらな様子に、道行く人々は困惑を隠せていなかった。そしてとうとう部活帰りなのか、中学生数人が足を止め、笑いの耐えない会話の後、話し合いの結果か、その中の一人が彼に向かって歩いてきた。

「おい、何を始めようってんだ？ここ、普段はプラスバンドしてるんだけど」

するとその中学生に、意味ありげに笑って答える少年。

「その人たち今日は来ない日だつてことはリサーチ済み。まあ見てつてくれよ、損はさせねえから」

人好きな笑みに釣られて、仲間たちのところに戻っていく少年と暇な彼等は近寄ってきた。一度も見たことのない少年のその力に、彼等は気がつくことのないまま、その段階で既に引き込まれていた。これが彼の生来のエンターテイナー性。そして、それに見合うだけの腕を併せ持つ。

それからしばらく彼は何もせずそこに立っているだけだった。ただ、楽しそうに笑っているだけ。

そしてそんな彼の周りに、女子高生の二人連れや、主婦がばらばらと足を止めだした。この何かを始める空気を含んだ少年の周りに集まり、人だかりと見ても差し支えないほどの規模になったとき、時計の鐘が4時を告げる。すると彼はおもむろに叫んだ。

「レディース&ジェントルメン、長らくお待ちいたしました！」
今までその瞬間を待っていた彼等はその言葉と同時に、彼の手や胸の辺りから急に飛び出してきた鳩に驚いて目を見開く。

「お忙しい時間にお集まりくださいますありがとうございます。どうぞ心行くまでお楽しみください」

お辞儀までつける丁寧な態度とは裏腹に、その自信満々な台詞と共に少年は、その手からぽんと花を取り出した。どよめき、沸く観衆。特に子供たちの高い声がすごい。しかしこのくらいならまだ一般人には見慣れていないとはいえ、普通のサークルか、個人趣味でも出来ると、専門スクールに入った段階の人間なら誰もがトリックを見破ろうと思うところ。

「では取り出しましたるこの花は、どなたの手にゆだねましょうか？」

そこで興味津々で彼を見ていた女子校生と目があつ。彼は苦笑して、少女の方へと歩き始める。

「どうやらこの薔薇は、貴方に引き込まれてしまったようです」「えっと驚く観衆の前に少年は手を翻して見せるが、そこにはもう薔薇は陰も形もなかった。

「お嬢さん、鞆を見ていただけますか？」

彼女が言われたとおりに鞆を開けると、その中には入れたはずのない黄色い薔薇がひとつそつと置かれていた。

「どうぞ今日の記念に」

お辞儀をする少年の前で、女子高生は鞆とを交互に見比べる。彼は彼女の鞆に触れてもいないのだ。

「な、なんでー？」

彼女が当然の驚きを上げるこの瞬間、彼女を含めた全員が、この高校生の実力を認めた。そしてトリックを見破ることが不可能なことも悟った。純粋にマジックを楽しもうという気になる。

そうなるとう然場は一気に盛り上がる。

「ではここで、カードマジックを行ないますが……どなたかご協力願えますか？」

手を上げたのは、始まるまで一番興味なさそうにしていた大学生の人たち。今はきらきらと子供のような目をして、少年の前に進み出る。

少年は人好きのする笑顔の裏側で大きくガッツポーズをした。小さな子供たちが無条件に喜んでくれるのも楽しいけれど、彼が一番興奮するのは、実力を見て引き込まれてくれる人たちを見たとき。

この手で惹きこんだ時なのだ。

「では……」

テノールの良く通る声が響いて説明を始める。その声は不思議な力を持っているらしくより彼等を興奮させ、その手から繰り出され

る魔法とも呼べるマジックに、虜になっていく。

まもなくシヨールは大盛況のうちに終了した。それはほんのわずかな時だったが、辺りは大分暗くなって、いつのまにか少年のいる花壇の脇にあるライトがついていた。彼のお辞儀に大きな拍手をしながら、人々がそれに気がついたとき、頭上で鐘が5回なった。

「ありがとうございます。最後にこれはこの中で一番小さなレディーに」

最前列で、数人の子供達の前にかがみこんで、少女の頭をなでながら握っていたもう片方の手を開くと、そこには小さな飴が3個乗っていた。

「みんなで分けて食べて、早く家に帰るんだぞ」

時刻は5時、子供には少々遅い時間だった。子供たちは、頷いて手を取り合って駆け出していく。

人々は皆、この少年の行き届いている気配りに、ますます好感を抱く。ただの少年ではない。その思いが人々の中で強くなっていた。しかし、少年に抜かりはないのだ。

「ではまたいつか、同じ時同じ場所で」

ぽんっ

言うと同時に、湧き出した煙。降って来る大量の紙ふぶきと風船。人々が歓声をあげる中、マジシャンの少年が消えたことに気がついたのは、随分立ってからだった。

立つ鳥跡を濁さずという言葉どおりに、名前も年齢すらも言わなかった少年のマジックは、見た全ての人々の心に、強い印象となって残ることになる。

しかし誰も、この少年がなぜこんなことを始めたのか。いや、始めたのかどうかすら、知る者はいなかった。

誰もいなくなった後、やってきた紺に黒という地味な服装の彼が、その紙吹雪を片付けていたことも。

8・当然生まれる副作用

放課後の教室は、授業中とも昼休みとも違う開放感に満ちている。生徒は皆けだるさを引きずった顔をしてはいるが、どこことなく一日の義務を終らせた清清しさもかもし出して、思い思いの時間をすごしていた。

中でも教室の一角では、机を二つ三つ寄せ集め、クラブの無い女子達が何処に隠し持っていたのか、数種類の菓子の袋を開けて、それを肴に情報提供という名の噂話に花が咲く。仲間の話に時折相槌を打ちながら菓子を口に放り込み、けらけらと色気無く、しかし楽しそうに笑っていた。

青子も帰宅部だったが、芸能人の話どころかこの高校のことすらも二週間前にこの世界に来た、しかも滞在は初めての悪魔にはまだまだ分からない事だらけで、一般常識という言葉の範囲でさえどこまでか分かっていないとなれば、下手に会話をしない方が賢明だと判断していた。

しかしそれでも、さりげなく会話をしている人たちの側で本を読むふりをしながら、話の中から、女子高生のアイデンティティーなるものを探っていくのを、彼女は日課としていた。

大体の情報は、テレビや雑誌を見れば手に入り、ネットという手段も大分出来るようになってきたのだが、それだけでは女子高生が今何を好きなのか、はつきりとは分からない。現代人間学の教科書には流行という項目も確かにあったが、それは刻一刻と変化するのだ。さすがに本ではカバーし切れていないと青子は痛感していた。何よりその教科書自体に、『最新の情報は、百聞は一見にしかずである』とまで書いてあったのだ。まさに教科書通りに行動する青子を、恵子が見たら、「うーん、青子らしいね」と笑ったことだろう。

聞き耳を立てている青子が、視界には入っているが意識には入っていない女の子達の会話は、芸能人から始まって、音楽、ファッション、最近出た再生プレーヤー、期末テスト、と途切れることなく続いていく。そして隣のクラスのある女子が、隣の男性と交際しているというあるようなないような根拠の無い話が終結した後、それはやってきた。

「ところで、噂で聞いたんだけど、知ってる？ 例の午後4時になると現れるっていう…」

「あー知ってる知ってる！ すごいマジシャンなんでしょ！」

「そうそう、いろんな場所に出現するまさに神出鬼没な！」

「名前も学校も言わないらしいけど、かなりイケメンなんだってね」

「それって誰情報？」

「隣のクラスの、えーっと安ちゃんだったかな……？」

「えーなんてよりによってあいつなのー！？ うらやましすぎるんだけどっ」

女子生徒の一人が思わず立ち上がると、その音に驚いた青子とばかり目があってしまった。しかし、上げた視線が絡み合ったのではなく、少女の方が青子に気がついたのである。いつのまにか彼女は読んでいると見せかけていた本から視線を離し、彼女達の会話を、全力で聞いていたのだった。

「あ……ごめん」

罰が悪そうな顔をする青子に、しかし少女が怒る様子は無かった。「ねえ！ 青子は、そのマジシャン見たことある？」

逆にすぎるような目で問いかけてきたのだ。青子としては全く予想外で、数度瞬きをする。

「……え……さ、あ？」

「なーんだ……」

途端に気が抜けたようにがっくりと肩を落とす少女に青子は軽く苦笑した。その隣から、やわらかいフォローが入ってくる。

「青子、ごめんね読書の邪魔して」

「あ、ううん……気にしないで、青子もそのマジシャン気になるから」

「だよー誰だって気になるよね！」

熱を入れて語りだした少女に力なく笑いながら、ゆっくりと本に視線を戻す。

しかしその目は、端が黄ばんでいる、全体的に古びた分厚い本ではなくて、新しい机の、作り物の木目に向かっていた。

その原因は、彼女の頭の中をぐるぐると回る、そのカタカナにある。

今だ噂だけしか聞いていないが、総合すると、数日に1回それもきまつて4時に、ものすごくマジックの上手い少年が、駅や公園に出没するらしいのだ。今まで誰一人そのトリックを見破れたものもなく、子供からサラリーマン、果ては駅員さんまで虜にしているらしい。

しかし彼が現れる場所は、一定ではなく、まさに出会えたらラッキーというレベル。その存在価値をさらに高める結果となっていた。そしてその、最も近いスポットが、丁度江古田女子校の通学路と重なるのだ。青子の家にはかぶらないものの、和葉は毎日その公園の前を通って学校に来る。当然彼女を含めた公園の前の道を通学路に含む数人に、うわさの真偽を確かめるものが、後を絶たない。そしてそれは、噂大好きな園子も当たり前のように実行した。しかも彼女は、やることなすこと、大抵派手なのである。

「そら、マジックは凄かったよ、でも容姿は、別に普通の人やったけどなあ」

翌日の昼休み、小さな弁当箱を膝の上に乗せている和葉を取り囲むように10名ほどが座る中、思い出すように顎に手を当てながら、彼女は眉を寄せて天井を見上げていた。

しかしそれに遠慮なく首を振ったものがいた。この当人は気づいていない尋問を開催した張本人である。

「あのねえ、あたしたちは客観的な意見が聞きたいの。和葉ちゃんにとって、服部君以外の男子はみーんな普通に見えるんだから」

それは彼女に対し、その場の数名どころかクラス全員が考えていたことだったのだらう。臆面も無く言つてのけた園子に、我慢できずに頷く者が数名いた。頷かない者も、ほほえましき半分、呆れ半分といった顔で、弁当箱に箸を入れたり、おかずを頬張ったりしている。

その唯一の例外は和葉だった。

「だ、なんでそこで平次がっ」

顔をトマトのように真っ赤にして言うのはもう何度も辿るお決まりのコース。

「はいはい、それはいいから、ほら早く」

友達歴が長いと、言いくるめるのも慣れたものである。園子の催促に和葉は憮然としながらも、説明を始めた。

「まず……とにかくすごいフェミニストやねん」

「それって噂どおりの？」

「うん、誰に対しても丁寧な言葉遣いで、男性にも楽しそうに笑うんやけど、女性と子供には特にそうやった。けど、どうも皆にそうみたいで、誰かに品定めしてる様には見えへんわ。ファンは増えてるみたいやけど、彼はそれが目的でもなさそうやし。大体追っかけようにも、神出鬼没やから、無理やしな……大体4時なんて、あたし普通は学校にいるもん」

「ふーん……本当にそのとき以外は会えないんだね」

なし崩し的に巻き込まれた蘭が独り言としてまとめると、皆が質問を始めた。

「じゃ、顔立ちは？」

「うーん……えつとなあ……髪の毛ぼさぼさや」

「え、整えてないの？」

そこで和葉はまた考え込む。

「うん……けど何ていうか、あんまり整えても変わらんねん。整えてなくても普通というか……」

「眼鏡は？」「ああ、くせつ毛つてこと？」

「うんそんな感じ……あ、えつとめがねは掛けてへんな」

「利き手はどっち？」

「さー？ どっちでもなんか出してはるし、両利きかも知れんなあ

……」

「身長は？」

「ええ、うーん、170はあるんと違う？ 結構背高いで？」

「そっかあ……」

質問ラッシュが終了した後、和葉は堪えきれずに笑った。みんなが怪訝そうな顔を見ると、彼女はだってマジック見たらそんなことどーでもようなるで、と言いながら、一人一人の顔を見る。

「だって、ほんまに凄いねん。始まったとたんに紙ふぶきとか、バラとかどんどん出してな、みんなの注目集めた後に全部消して、今度はカードマジックするんやけど、手さばきなんか早すぎて見えへんし、鳩も飛び出すし、かと思えば舞台が終わったら一瞬で消えてしまうんや。ほんま、あの腕は高校生とは思えへん」

しきりに感心する和葉の横で、誰かが拍子抜けして声を上げた。

「え、高校生なの？ 年齢不詳って」

「……見たら分かるわ。あれは絶対高校生や」

大学生というには幼いし、なんというか中学生にしては世間を知

つてる感じやし。それに、あんまり年齢を隠したがってるようには見えへん。ふつーに高校生や。

「ふーん」

和葉の観察眼は、探偵と幼馴染ということ、結構侮れないものがある。しかも当人も合気道の選手に選ばれるほどなので、身のこなしについては持っている勘と言う物がある。その彼女がそういうのだから、そうなのだろうと、その場にいる全員が特に異を唱えることもなかった。

もつと言えば、いきなり口を押さえて俯いた少女に、皆の注目が移ったのだ。

「ちょ、ちょっと青子ちゃん？ どうしたの？」

「あ……………なんでも……………ない……………よ」

しかし、そう答える青子の顔は蒼白で、呼吸も荒い。彼女に何があったのか、誰も分からなかったが、行動派の園子はここでも一番動きが早かった。青子の背中に手を当てると、支えるようにして立たせる。

「何言ってるの！ そんな顔して。ほら保健室行くわよ。私が付き添うから」

「だ、大丈夫。青子一人で行けるよ。皆はそのマジシャンについてもっと聞きたいことあるでしょ。和葉ちゃん、話聞かせてくれてありがとう」

「あ、それはええけど、なんかあたしの話がまずかったやるか？」
責任を感じるなという方が無理な状況で分かりやすく眉尻を下げる和葉に、青子はぶんぶんと首を激しく振った。

「そんなことは絶対にならないから、青子マジック大好きだもん」
弱弱しいながらも笑ってそういう青子に全員が嘘はないと思った。

そう嘘ではない。マジックは、一度しか見たことはないけれど、大好きで、見れるのなら何度だって見たい。きっと彼ならまた見せ

てくれるはず。そう、青子がこんな風に落ち込んでいるときならなおさらあの笑顔で。快斗のマジックを見たい。それはもう誰よりも願っている。

でも、もしもさっきの話題に上っていた彼が、その彼だったら、なんだか今まで信じていたものが、全部崩れてしまうようなそんな気すらして、そう思うと急に、体が冷たくなって、震えが止まらなくなつたのだ。特徴だつて全部当たっているから。

今も、時々警部が夜勤で遅くて、独りの寂しさを噛み締めてしまふ時、思ひ出すあの笑顔に救われていたのに。それが、青子一人だけのためじゃなくて、一般用だったらと、そう考えると怖くて怖くてどうしようもない。ただ、おかしなことにそうだとしたら何がそんなに怖いのか、それが分からず、ただ漠然と怖いと震えるだけ。まるで子犬か羊のように。ただそれだけが彼女の寄る辺だと言わんばかりに。

青子は、保健室には向かわずに、廊下から階段を上って屋上に出ると大きく息を吸い込んでゆっくりと吐き出した。

(変な青子)

まだ彼だと決まつたわけでもないのに。でも、決めるのは、怖い。知ってしまったらもうそこに、事実以外は挟む余地がない。

(快斗じゃ、ありませんように)

いつしか青子は願ひながら目を閉じていた。その気持ち、どんな名前なのか、震えが何から来るものなのか、青子を知るのもっとずっと先。

「ねー、行こうよ青子」

「ごめん、青子はいいいよ……皆で楽しんできて？」

青子が去った後も昼休みは盛り上がり盛りに盛り上がったらしく、放課後、3班に分かれて少年出現スポットへ繰り出そうということになったようだった。

時代は文明社会。そして、たった一時間のショーでも、出現スポットの距離は、直線で50kmほど。ということは連絡さえ上手く取り合えば、途中からでもショーを見ることが出来るのである。

勿論、もしもこのショーがもっと頻繁に行なわれるようになれば、きっと彼の素性もネット上にでも公開されるのだろうが、さすがに情報が少なすぎてまだその段階までは行っていないのだった。逆に2週間で、出現回数6回だというのに、ここまで口コミが広がるといふのは彼のその腕ゆえかもしれない。ますます青子にとっては気が滅入る話だった。

世間を沸かせてしまうほどマジックが上手い少年が、彼の他にいらしても、それが彼だとしても、どっちでも嫌なのだ。勿論非常に勝手だという自覚はある。

「青子ちゃん、やっぱりマジック嫌いななの？」

蘭が気を使って小声で問いかけてくれる。優しい心遣いに、罪悪感が募った。

「ち、違うの。ほんとに大好きなんだよっ！ でも、まだ少ししんどいから」

「……そっか、じゃあまた明日感想とか話すね」

「うん、蘭ちゃん、楽しんできてね！」

それでも名残惜しそうに離れていく蘭を見送って、青子は溜息をついてきびすを返した。図書館に行こうと思いついたのだ。何かをしていなければ、この胸の気持ち悪さは、消えない気がするし、見ないふりも出来ないから。

「青子、なんなんだろう……」
問いかけても誰も答えるものはない。

いや

「第一段階突破……かしら」
闇の中にぼんやりと浮かび上がる青白い水晶玉に向かってそう呟く低い声と、地の底から響くようなおぞましい笑いがあったことを、青子は知らない。

9・引き寄せるのは観客だけ？

こそこそと彼が出かけるのは、少し前から当たり前になりつつあった。しかし、実際は彼が動くところを見ているわけではない。大體事後報告されて初めて違和感を洗い出し気がつくのだった。つまり彼がそうしなければ、もはや探偵の自分でさえも、その動きを読むことが出来ないのだ。そしてそれがそのまま開戦の合図になってしまい、そこから数日間、苦しい関係が続く。だから今回それに気がつけたのは、快斗の神経がその分緊張していないからだ、新一是結論づけていた。

実際前を歩く彼も怪盗時独特の強い気を発しているわけではなく、新一がこうしてつけてきているのにも全く気がついていない様だ。

ただそれも含めて、想定範囲内だった。これから起こる事は既に彼は知っているのだから。

『一体快は何してんねんやろな。毎日おんなじ時刻にいろんな場所でマジックして。しかもつい最近やろ、こんな初めたん』

その話題が昇ってきたのは、数日前のこと。何気なく話を聞いていた新一は平次のそれこそ何気ない言葉に思わず抱えていた本を落とし、相当痛い思いをした。

そしてそれは日本全国の事件を網羅している彼が、代わりに新聞沙汰やネットニュースには載らない地元的事件に無頓着になっていると気づいた瞬間だった。こここのところ特に忙しく、さらに先日の3連休をこれ幸いにと世間が事件を起こしまくったせいで、文字通り全国を飛びまわっていた彼のロードワークの激しさは別にしても、あの『噂話』なんてものに、とことん無縁な平次までもが日常話として話題にするまで全く気づかなかったのだ。裏を返せば、知っていたら真っ先に止めただろうし、問いつめてここまでのことには絶

対にしなかつただらうと断言できる。

しかし時既に遅し。新一が改めて周りに耳をそばたててみれば、クラス中その話題で持ちきりで、張本人は自分ではないものたちに詰め寄られていた。勿論彼は真相など話さず、かといってごまかすでもなく単に『ちょっと自分の腕を試してみたくなっちまってさ』というようなことをしゃあしゃあと語っていた。

だが、そんな単純なものではないと、新一だから分かるのだ。快斗がマジックを披露するなんて、普通ではありえない。

以前ならまだしも、副業でマジックをあれだけ盛大に披露する彼は世間に知られては困るはずなのだ。この高校においては常識になっってしまったているが、彼のおちゃらけた性格とあの怪盗紳士を結び付けられるのは、その理由を知っている自分と、恐らく世間一般の価値観など気にしない白馬だけだろう。

だが、世間はこの閉鎖された空間とはわけが違うのだ。情報はあつという間に広がっていく。しかも並みの腕ならまだしも彼は新一が唯一認める時間を忘れさせるマジシャンなのだ。決して昔馴染みの欲目でもなんでもなく、彼ならあの噂ぐらい当然だとすぐに鵜呑みにしたことを今も間違いだとは思っていない。事実、金を取ったって、その辺のマジシャンには負けないはずだと、軽口を叩く裏で常々真剣に彼は思っているのだから。

勿論、情報が漏れたところで、捕まるに直結するわけではない。新一だつて一応は彼の現行犯逮捕を鉄則としているのだ。だが、その自分が捕まえないと言う以上つかまる可能性が万に一つもない、とはつきり言いきれぬなら、そもそもこんなによきもきしない。

快斗に限ってそんな選択肢は随分前から自分で削除しているはずだと、そう思い込んでいたものだから衝撃は倍だった。自分の読みが甘かったのか？ それとも彼が目立ちたがりでついに自分の腕を試したい欲求を本当に抑えられなくなつたのだろうか。

突き進む思考に待ったを掛けるのは、もう一人の冷静な自分。
可能性だけで物事を進めない探偵の本能だった。

まず見なければ何も始まらない。全てはそれからだ。

そう思い直して、今彼は、こうして快斗のあとをつけているのだ
った。

この辺りはあまり来たことがないが、快斗は何処に向かうつもり
なのか、大体分かってきた。

時刻はそろそろ、3時45分である。

「どう？ B班、そっち現れる気配は？ え、駄目？ そう……じ
ゃあ今度はC班に連絡してみるから、うんうん……そうそこで待機
してて、あ、それよりとりあえず東都線に乗って……そうそう、杯
戸町まで行ってそこで待機にしておいて、そしたら……うん、どっ
ちなのかはまた連絡するから。……うん分かってるって、絶対連絡
するから待っててよ。そこから杯戸町まで15分は掛かるんだし……
…うん、あーもうっ蘭に携帯渡しとくって、それなら安心でしょ……
…ってそれどういことよー」

一喜一憂しながら、携帯電話を握り締めている園子の、会話だけ
聞いていても内容が丸分かりな電話に蘭は苦笑する。

そしてその一分後、予想通りはいと渡された携帯を、説明もなし
に受け取って、

「番号は？」

と問いかけるとまた彼女の手元に戻っていく携帯電話。なんだか

不思議な気もするが、本人に任せられた方が時間短縮になると思ひ直す。

園子を全体のリーダーとして3班に分かれて、調査を開始して、現在時刻3時40分。しかし、現れたという場所に、彼の姿はない。まだ開演時間まで間があるとはいえ、自分たちのこのAスポットも空振りかもしれない。そもそも彼の出現ポイントは、全部で4箇所。この時点で現れる可能性はあわせても75%にしかない。

一概には高いとも低いとも言いがたい数字だ。また、出現回数から単純に考えて、同じ場所に現れたのが、最高でも3回。まだ固定されたとはとも言いがたく、新しい場所を開拓する可能性も十分にある。そうになると、確率はさらに下がってしまう。大体今日は現れない可能性だってある。

「はぁー」

突然目の前に数字が突きつけられ、蘭の気持ちを代弁するかのような大きな溜息が聞こえた。それに伴って、蘭の目の前にある携帯電話のディスプレイの文字もわずかに揺れる。

「はい、このまま掛ければつながるから。必要になったら押し……」
「そ、園子……」

しかし蘭はその文字を見てはいなかった。

彼の出没スポットである公園とはいえ、一般的には市民の遊び場である。そのど真ん中でこの世の終わりのような溜息をつく彼女を、周りにいる子供たちが不審な目で見ているのだ。蘭は気が気でなかった。

この公園で、マジックショーを明らかに待っていると思われるのは、自分たちのほかに10名ほど。噂として大きな規模になっているので存在は知っていても、実際この時間に暇をしている人たちは少ないのだ。

今日は江古田女子校が一斉にクラブがない火曜日だが、その代わ

りに各種の委員会があつて、実際蘭たちのクラスでも、泣く泣く断つた者が何人かいるのだ。ちなみに和葉も、その断つたものに入っている。そして、学校の最寄り駅ではなく、定期がないと実費になるこの公園となると、さらにその数は減っている。

今この場にいるのは、おじいさんが3人と、子供が5人、母親らしき人たち2人。その周りで沢山子供たちが遊んでいるが、彼等はこれから何が起こるかを知らない。そしてきつと始まった途端前を陣取ってきらきらとした目でマジックを楽しむのだ。今日は随分と沢山のお客さんが、彼を待っている。

「蘭？なに笑つてるの？」

同じグループの少女が不思議そうに問い掛けると、蘭はなんでもないと微笑んだ。

その笑みが驚きに変わったのは、その直後。

一人の少年が、こちらに歩いてくるのを見たからだだった。何処にでもいるような少年でこの辺りをついぶらつと通りかかったような格好。しかし、時刻が時刻だ。

蘭は慌てて、まだ絶賛落ち込み中の親友を振り返る。この場で彼の登場に気づいているのは今のところ蘭だけだった。

「そ、そそそそそそ」

「何よ蘭、人の名前はちゃんと、ってうっそーーー」

蘭が何も言う前にその伸ばした手の示す方向で全てを理解して、すばやく電話を掛け始める園子。ボタンを押す手が震えている。

自分が掛けるはずだったことを忘れるほど興奮している蘭の前で、少年は何故かジャングルジムに登り始めた。蘭だけでなく、一緒に来ていたクラスメート二人も、ついでに園子も、電話をしながらその動向を目で追っている。

「あれ、彼だよ……ね？」

「うん……そうだと思う……けど」

話す横目で、蘭は園子を見る。もはや決定事項として電話を掛ける彼女だが、実は何も確かな証拠というものは無い。すべて蘭の直感と時間からの推測である。

「間違つてたら……ごめんね皆」

マジックが好きで、園子と一緒に来ることを望んだ蘭だが、実はそこまで彼が誰なのかということには興味がなかった。しかしこの瞬間には本気で彼がマジックをしてくれることを願っている。

(これも……彼の力なのかな)

どうでも良いと思っている人までも自然とひきつけてしまうなんて、まさかそんなと思う。けどなぜ彼はジャングルジムなんかにわざわざ昇って無関係を装うのだろう。もう少し分かりやすくても良いのに。

そう決定打がない。

和葉の情報ではぼさぼさ髪だったそうだが、今は帽子を目深にかぶっていて、顔しか分からない。確かに結構整った顔立ちだが、大人っぽいというより、悪戯が好きそうな瞳でこちらを見下ろしている……

(え……?)

驚くまもなく見つめていると彼がこちらを向いて、目が合った。

途端彼の目が、急にとんでもないものを見たかのように見開かれる。体が、流れるように動いた。

だが、蘭を見つめながら彼が上に持ち上げた足は、いかにも鉄筋上に立つための前振りだったというように次の瞬間は彼全体を一段上へと持ち上げていた。そして危なげなく、ジャングルジムの天辺の鉄の棒の上に立つ彼は、まるで、さっきの出来事が幻想だと蘭に思わせたいかのようにだった。そして、そう蘭が思っても全く不思議に思えないほどの自然な動き。

(なに……?)

蘭が何かを、感じたそのとき。

「レディース&ジェントルメン、ようこそ我がマジックショーへ」
彼の声が浪々と辺りに響き渡り、次の瞬間その場に彼は舞い降りてきた。

そう、文字通りジャングルジムの、天辺から。
軽く見ても5メートルはある距離を危なげもなく

情報に、付け加えた方が良いかもしれない。

彼の運動神経が並みのレベルではないということ。

そう蘭が思ったのと、ぼんと辺りに紙ぶきが待ったのは同時で、派手な演出に子供たちも、道行く人たちも足を止めた。

そこからはもう完全に彼のペース。つかまつたら、逃げられない息付く暇もない見事なパフォーマンスとイリユージョン。

だから、蘭の心には確かにそのとき、何かが芽生えていたはずなのに、楽しすぎる時間は彼女に考える時間をくれなかったのだ。

「……」

園子も、友人達も、もう皆が彼に夢中で、食い入るように見つめている。そしていつの間にか蘭もまた違う意味で彼に魅入ってしまった。警戒心を霧散させる、不思議な少年。

それが、このマジシャンに対する、蘭の評価だったが、そこから先はマジックの感想一色に塗りつぶされていった。

「……のやる」

公園の片隅で、かの大怪盗にも気づかれないほどに気配を殺して見ていれば、彼はとんでもない方法で人々の注目を集めてマジック

を始めた。その後はその気になれば、それが野良犬だったりしても引つ張つてこれる快斗の力に、新一すらも見入りそうになる。けれど、その気持ち在必死に抑えて、彼はその行動の意味を考えていた。

快斗は迷い無くここにやってきた。ということは、この場所を知っているか、すでにこの場でショーをしたかだ。既に女子高生や主婦が待つていたことからして、きつと前者だろう。

次にこの場所は、新一たちの学校から駅3つ分という比較的近い距離にある。しかし、この公園自体は駅から離れていて、その規模も普通は捜せないほど小さいものなのだ。

では、快斗は何のためにこの場所を選んだのか。

一番手っ取り早いのは、この場所に何か思い入れがあると考える方法。しかし、ここは快斗の地元ではないので、幼稚園や小学生のころの行動範囲からは外れているはず。小学生の中学年の頃から行動を共にしてきた新一の記憶の中にも、ここまでさびれた公園は残っていない。

次に考えるべきは、人に見つからないようにしているという可能性。しかしそうなると、駅で公演する意味に矛盾が生じる。次の可能性として、だれかを捜している場合が考えられる。それもこの公演の近くに住んでいると考えるのが妥当だろう。しかし、快斗を見る限り、ただ純粹にマジックをしているだけのようだ。しかもものすごいオーラを振りまいている。それは怪盗の時とは全く違うが、何処か似た色の、澄んだ気だ。周りを巻き込み、取り込むそんなうねりすら感じるほどの。

第一もしもこれが特定の誰かのためなら、快斗はこんな大掛かりなことはしない。むしろ、手間が掛かりすぎることよりも、最短期間を望むのだ。怪盗であってもなくても。これは幼馴染と親友としての経験からである。

結局その舞台の間には、新一には結論がでなかった。

(あいつの思考回路……解体してみてえよ)

かくれてこそこそとする必要も無い。だったら親しんだ年月に掛けて、必ず暴いて止めさせる。

それが己の義務だと冷たい遊具を握りながら彼が誓ったことは、まだ明るい空に浮んだ、三日月のみが知っていることだった。

かくして、物語は漸く動き出す。

10・一人でも欠けていたら(前書き)

ここからはじめて投稿します。よろしければお楽しみください。

10・一人でも欠けていたら

夏から秋に変わり、秋分も超えてしまった空は、暗くなるのが早い。現在はほとんど青と紺のコントラストで表現できる黄昏時と言うのが丁度いい時間帯で、人がいるのは分かるが、誰なのかははっきりしない薄暗さだ。さすがに最後まで諦め悪く消えたマジシャンを探し回っていた子供たちもとうとう空腹に負けて帰っていった。

そんな頃合いを見計らって、服装を帽子までもがらりと変えた少年が、公園の一番奥の滑り台の陰からこっそりと抜け出てきた。その途端、辺りに殺気が満ちて体に緊張感が走る。彼がふと眼を上げれば、目の前にブルーのパーカーを着た自分と良く似た少年が立っていた。出来るだけ気にしなようにゆったりと歩きだしながら片手をあげた時、殺気をみなぎらせて彼は走り寄ってきた。

「カーイーイーとーおっ」

「うわっちよっ」

挨拶には敵しすぎるほど、豪速で飛んできた右ストレートキックを、快斗は危なげにしかし、驚くことなくよけて、近くにあったシーソーに飛び上がって着地した。もともと下がっていた方とはいえ、それなりに古びている木の板に、もんどりうってバク転し、その短く狭すぎる場所に右足だけで着地して、なおかつタイヤの為にそれなりに反動がある場所に現在危なげなく立っているバランス能力は驚異的だ。しかも今は昼間ではない。

しかしながら、新一は、その彼を見て舌打ちをするだけである。

「なんで避けたんだよっ」

「避けなきゃ痛てーっだろーがっ」

「いつそ入院しやがれっっ」

「ちよ、新ちゃん怖すぎっ」

「もっ一発喰らいたいっか？」

「こ、じょう、だんっ」

快斗は言いながら足をばねのようにして飛び上がり、今度着地したのは地面だった。しかし彼の一瞬前までいた場所を、新一の蹴ったらしい公園に忘れさられていたサッカーボールが吹っ飛んでいくのを見てさすがに青くなる。それが子供の些細なミスで、たいていの人には遊び道具でも、彼にかかれば凶器に変わる。

「おまつそれは反則だろうがっ」

「ここは公園だっ」

悪びれることなく怒鳴り返してそのまま近づいてきた新一に快斗が臨戦態勢をとった時。

「きゃーーーーーっ」

少し離れた所から、悲鳴が聞こえた。

「へっ？」

二人同時に顔を見合わせ次の瞬間には駆け出していた。ここからでは状況が分からない。

すぐに公園の入口あたりに人影が見えた。どうやら制服姿の少女の二人組のようだった。一人は尻もちをついていて、もう一人はその子の側に屈みこんでいる。そのためにそこから動けないらしい。街灯は付いていてその中心に彼女達はいたが、俯いているので顔までは分からない。一人はセミロングで、もう一人は長い髪が地面に垂れていた。しかし彼女は全く気がついていない様子はなく、眉をしかめて背中をさするセミロングの少女のことしか見えていないようだった。

「だ、大丈夫、園子？」

「んっ大丈夫たあーったくなんであたしがこんなところでボールに襲われなきゃなんないのよ」

「でも、尻もちぐらいでよかったよね……」

少女達の後ろで無邪気にいんどんと跳ねているサッカーボールを見ながらその子が呆然と呟く。今でこそ単なるボールだが、その勢いは、彼女のすぐ右横にある茂みに真ん丸な穴を開けて、その

後ろの道路を飛び超えて、白はずの壁を妙な形に焦げ付かせ、しかも茂みから白い煙が微かに上がっていることが、如実に証明していた。もう少し強ければ火事になっていただろう。

視力のいい快斗はそれをいち早く見つけると、眉をしかめてよりスピードを上げた。

なんでこの二人がここにいるのか。時刻は数十分前のショーが終わった直後まで遡る。

つかの間の夢の時は終わり、少年はいつものように煙と共に消失した。それを少年の挨拶と了承して、夕暮れのオレンジ色の光の差しこむ小さな公園にこの時間には不釣り合いなほどの音量の拍手はしばらくの間鳴り止まなかった。

「ほんとすごかった……ね、蘭？」

煙幕と共に紙吹雪を残して消えた少年に、園子も惜しみなく拍手を送っていた。しかし、その首はひっきりなしに動いて、彼の行方を追っている。

「うんほんとに……」

隣にいた蘭も同じように拍手をしていたが、その手は機械的で、目もどこか遠くを見ている。そんな気の抜けた声に、園子が搜索を打ち切ってひよいと振り返った。

「どーしたの蘭？　なんか元気ないんじゃない？」

「そ、そんなことないよ。ただ……なんとなく彼、どっかで見たことある気がするだけ」

「あ、それ蘭も思った？　確かに誰かに似てるっていう噂もあったよね。うーん、誰だったっけ？」

あつという間に同調して腕を組んで考え始める園子の言葉が聞こえているのかいないのか、蘭は今はジャングルジムの天辺あたりを

ぼうつと見ていた。

「……けど違う気もするんだよね……」

「そうね、なんかこう、引つかかっているんだけどヒットしないわ。」

「……あー悔しいっ！　ここまででかかっているのに」

こめかみをぐりぐりと指で押さえつけながら園子は七転八倒していた。蘭はそんな園子の様子に苦笑してしまう。昔からこうして一つのことには一生懸命になる彼女の姿とその結末を蘭はよく見ていたので、止めることもできない。というよりも蘭でさえも止められないのだ。だからこそ、蘭も一緒に考えることになるのである。自然と、彼の姿や態度をじっくりと思いだす結果になっていた。

そのころには既にぼつぼつと帰り始めた大人はもうおらず、あとはあきらめ悪く探し回っていた子供たちだけになっていた。そしてやがて一人二人と彼女たちに声をかけて帰り始めるクラスメートたちにつられ惰性のように動き始める。

だが、公園から歩いて暫くしたところで、園子はぴたりと足を止めた。

「って、こんなこと考えてる場合じゃないってばっ」

そしてその大声に振りかえった皆の注目的になっていることも構わず、急に踵を返して走り出す。

「え、どうしたのよ園子っ！」

「ごめん、あたしちよつと忘れ物しちゃった。みんな先に帰っててっ」

しかし、蘭の言葉も聞こえていない様子の園子は、その場にいる数人の背中に向かって振り返って声を投げるなり、今度こそ全速力で走り出してしまった。

「ちよつと待ってよ園子っ！　何を忘れたの？」

そして誰も何も言わずとも、蘭一人がその背中を追いかけていく。彼女を追うものはもういなかった。クラスメートたちは一端顔を見合わせた後、公園に背を向けて歩き出す。一人は携帯電話を広げながら。

(何考えてるの、園子?)

蘭は園子の背中を追い掛けながら疑問に思っていた。10月とはいえまだ防寒具は早いし、携帯電話は彼女のスカートの中、そして鞆ももちろん彼女は持っている。とくれば彼女が何かを考えているのは明白だった。

後ろについて来る足音が誰なのか、当の本人も知っていたのだろう。十分距離をとった後、振り返ってそれはそれは楽しそうに笑った。

「マジック少年の正体を暴くわよっ蘭」

「え、ええ!？」

あまりのことで蘭が度肝を抜かれるのをよそに、園子は走り続ける。蘭が追いついたのを見て足を止め、少し乱れた息を整えている。「いい、蘭? 今戻れば、彼はまだ公園にいるわよ。ほらあの紙吹雪とか……片づけとかしなくちゃ怒られるでしょ? だから入り口のそばで張るのっ、そしたらきつと見つかるわっ」

自信満々に言う園子だが、空手などやっているせいか、そういう気配に人一倍敏感な蘭は、全く乱れていない呼吸で公園と園子を見比べて動こうとしない。

「だけど、あれから時間だいぶ経っちゃったし、もう帰っちゃってるんじゃない? 誰もいなさそうだよ。それに、もし見つけたとしてもきつとごまかされるんじゃない……」

気乗りのしない声と目の前に差し出された腕時計に、園子は眉をしかめた。だがすぐに気を取り直して蘭の肩に手を置いた。

「そりゃそうだけどつでも、動かない限り、可能性は0のままじゃないっ」

ミーンハー魂の固まりとはいえ侮れない真剣さに、蘭は少々たじろいだ。

「……確かにそうだけど、あ、ちよつと園子っ」

油断していた蘭は、園子に腕をとられて問答無用で引つ張られていった。

それからいくらしもないうちに乗り気のしない蘭を連れ、園子は公園に足を踏み入れた。すっかり人がいなくなつてしまった寂しい公園に。

そして、公園を囲む植え込みに身をひそめて隠れること、数十分変化のない状況に刻一刻と暗くなつていく空に、灯り始めた街灯が増えるだけの蚊への献血に、やはりそろそろ何も起こらないかと双方があきらめ始めた頃のことだった。

急に大音量の怒声が響いて二人は身をすくませた。その後の妙に声が似たしかし確実に二人と思われるやり取りとばっこんと何かが跳ね上がる音に、なんなのだろうと立ち上がつて駆けだした時、それはものすごいスピードで襲つてきたのだった。

「ごめん、こいつが見境無く蹴つちまつたから」

叫びながら現れた帽子をかぶつた少年に、一瞬ぎよつとする二人しかし、彼女達は可憐な乙女ではなかった。座り込んだまま園子がきつと睨みつける。

「な、蹴つたのはアンタねっ！ 全く、危うく凶器かと思つちやつたじゃないっグラウンドはあつちでしょーがっ！」

びしつと二人の駆けてきた方向を指差す彼女に彼は苦笑いをするしかない。

「ほんとごめんなー。ほら、お前も謝れつて、張本人だろ」

「……ごめん、大丈夫だった？」

遅れてやってきた新たな少年が隣に並んで少女達を見る。丁度二人は光の中にいたので、見上げた少女たちは一瞬眩しそうにしたの

だが。

「……」

次の瞬間息を呑むのが聞こえた。

「え、ど、どうしたの？」

彼はその場に立ったまま問いかけるが二人は動く気配が無い。暫くそのまま待っていると言蘭が前に進みでた。

「あ、あのー」

「ん？」

「貴方達、双子ですか？」

恐る恐る聞く蘭の顔を間近で見た彼は、言葉を失ってそのままの顔で固まってしまった。

「……」

「いや、違うよ、よく間違えられるんだけど……血の繋がりは全くないから」

代わりにもう一人が苦笑いして答える。蘭はそうですかと素直に納得した。

「……ところで、二人はなんでこんなところに？ もうずいぶん遅いでしょ」

立ち直つたらしい彼に今度は蘭の方が言葉に詰まって、視線をさまよわせた。

「えっと……実は」

「あー思い出したっ」

園子が急に膝を打ちそうなほどの大声を上げた。

「「な、なに？」」

少年二人も蘭も一斉に園子を見た。

「ほらさつき、マジック少年が誰かに似てるって……高校生探偵の工藤新一に似てるのよっ！！ ほら彼ら、そっくりじゃない！ ね、蘭」

同意を求められて、彼女は少年を見ながら躊躇いがちに頷いた。

「あ、うん……そう、だね」

「……………」
そして少年たち二人が恐らくその勢いに圧倒されている間に、園子は立ち上がってストレートの髪の少年の方へと近寄った。

「でもあなたは髪型が違うわね……………彼はもつと頭ぼさぼさだったし……………」

「ぼさぼさって……………ちょっとひどくない？」

声を上げたのは、帽子をかぶった少年の方だ。

「事実だろ、諦めろ」

「ねえ……………園子」

蘭が園子の腕を引っ張るが、すでに彼女はもう一人の少年を見て、らんらんと目を輝かせていた。

「ってことは、やっぱりあなたがマジック少年ねっ。工藤新一にそっくりで、帽子もかぶってるんだからっ！ 違うって言うんだったらそれ取ってみなさいよっ」

どうだとはかりにびしっ指を帽子をかぶっている少年に突きつける。妙に自信満々だが、その場にいる三人はいささか疲れた顔で彼女をみていた。

やがて少年はふつと目を伏せると、頭に手をかける。

「……………ま、隠してるわけでもないしね」

「お、おい快」

少年が止めようとする前で、彼はおもむろに帽子を取った。

そしてそのまま時の流れがこの場だけ変わったと錯覚するほど優雅に一礼して微笑む。

「黒羽快斗と申します。以後どうぞお見知り置きを」

「テメー」

すっかりマジシャンモードに入った悪友を睨みつける。

「お嬢さんたちの御名前は？」

だが、快斗は聞こえたそぶりすら見せずに、微笑んで彼女達を促した。

「……………あ、はい私、鈴木園子、です……………」

「も、毛利蘭です」

急に変わった彼の雰囲気は圧倒された二人は頬を染めながらぎこちなく名乗る。

快斗はそんな二人の声を聞いてからふいに視線を逸らした。

「で、こつちのオレのそっくりさんは……ってオメーなあ」

そして少年に戻った彼が首だけ向けた先では、件の彼が誰とも目を合わせることを拒むかのように顔を背けていた。しかし、視線が3人分彼に集中し、とうとう観念したのか、向き直った。目は全く笑っていない。

「……工藤新一です」

我に返った蘭と快斗がそんな彼に向かって苦笑を浮かべる横で、園子だけは仰天して彼を指さしていた。

「え……あ、あなたもしかして、本物の……高校生探偵、の？」

「……一応ね」

「きゃー聞いた蘭？ 嘘嘘！！ こんなどころで生の有名人に会えるなんてーあ、さっきはごめんなさいっなんか制服のイメージが強くてまさか本物だなんて思わなかったものだからっ」

「生って……」

確かに今の新一は、テレビに映る時とは正反対のラフなハイネックにパーカーにジーンズ姿だから、分からなくもないけれど、そのあまりな言いようのため、彼には話の後半が聞こえていたのかどうか、あやしいところだ。

「ねえ園子、ちょっと落ち着いてよ……ごめんなさい、園子はすごいミスターで……」

「……別に」

興奮しきりの園子の代わりに向けられた蘭のすまなさそうな顔に、罪のない彼女に向かって向けられた新一の声には、出会って数分のうちに彼女の性格を把握した諦めが、多分に混ざっていた。快斗もあいまいに笑う。

「でも……そうだとするとあのサッカーボールも領けるか。どーり

でどっかで見たとあると思ったのよ。ほんとに超高校級ね」

空気を全く読めずにうんうん頷く園子は新一に任せて、快斗は蘭に向きなおった。

「さて、これで君たちの目的は達成されたわけだけど。どうするの？ オレ達のこと話す？ 今日大勢で来てたでしょ？」

蘭はしばしまだ騒いでいる園子を見た後で快斗に視線を戻して軽く首を振った。

「いいえ。話しません。園子にも言っておきます。だって、別に黒羽さんは名前売りたい訳じゃないんでしょう？」

確信を持って言われて、快斗は感心したように眉を上げる。

「へーよくわかったね。そうなんだよ。デビューするのはまだまだ先の話だからそうしてくれるとありがたいんだ。……ところで、別に敬語じゃなくてもいいよ。オレ高校生だし」

「そうよ蘭、新一君は高校2年生だから、同じ年よ。快斗君もよね？」

どこから聞いていたのか、唐突に横から挟まれた声に、新一ばかりではなく、快斗も驚いて、蘭を改めて見ることになった。

「ら、蘭ちゃんって高2なの！？」

「うん……園子と同じクラスだから」

恥ずかしげにうつむく蘭を快斗はじっと見つめる。

「ふーん……ずいぶん大人っぽいから年上かと思ってたんだけど……」

「そ、そんなことないですっ」

勢いよく顔を上げて真っ赤な顔で首を振る。そんな蘭に快斗が動けずにいると、後ろから腕を引つ張られた。

「おいっ」

シヨックからとつくに解放されていたらしく、新一がかなり鋭い眼光で快斗を見ている。

「っ……あーはいはいわかってますよ。……じゃあこれからどうしようか。もうずいぶん遅くなっちゃったし、帰るのはそうなんだけ

どろ」

ライト付きの腕時計を見れば、もう6時を回っていた。

「……駅まで送ってけばいいんじゃないの？ 夜道はあぶねーし」
まだ慥然としたまま新一が呟くように言った。確かにもう空は真
つ暗で、紺色一色だ。

暫く新一の方を凝視していた快斗も、我に返ったように頷いた。

「あ、ああ、そうだねっそれがいいよね、やっぱり」

「でも、そんなわざわざ悪い……」

「そんなことないよ。だってオレ達もどうせ、帰らなきゃいけない
し。それに二人ともこの近くに住んでるわけじゃないんでしょ？」

「……あ、はい」

頷く蘭に、快斗はにっこりと笑った。

「だったらそのくらいさせてよ。待ってて貰ったんだしさ」

「でもそれは黒羽君のせいじゃ」

「だったら一緒にご飯でも食べましょうよっ」

急に園子が言いかけた蘭を遮り、提案ではなくて、宣言した。

「……や、それは……」

「ちよっ、ちよっと園子っ」

どんどん大胆になる少女についていくのがやっとならしい蘭に、快
斗は苦笑を浮かべた。この勢いは嫌いではないのだが、彼女達の話
についていくことは諸事情からできない。現にちらりと見れば当人
は嫌そうな表情を隠しているのが丸分かりだった。

「……ごめんな。オレたち寮生だから、食事はちよっ」と

「寮？ ああそうか帝丹って寮生活だっけ……」

「そう。門限があつてさ、夕食も食堂で食べることになってるから
それが本意ではないのだと心底残念そうな顔をする快斗に、園子
もひとつ溜息をつく。

「ふーん、それじゃ仕方ないわね……駅まで一緒に行きましょう
か」

「よし決まり。じゃ、急いでいこうっ！ 今日の夕食確かビーフシ

「チューだったしっ」

「えっ!?!」

しかし快斗に手を引かれた蘭は、必然的につられて走り出していた。かなり戸惑いながら。

「ちよつと蘭」

「快斗っ!!」

二人の呆気にとられている声を後ろに聞きながら、かなり足の速い快斗に転ばない様についていくしかなかった。

11・彼は探偵、そして高校生

「あ、あの……工藤君？」

その後ろ姿をなぜか見ていた残された新一は園子に声を掛けられてはつと我に帰った。

そして彼女が声を掛けようとしているところに一言。

「ごめんオレ、女の子に興味ないんだ……そういうつもりなら……やっぱりね」

「え？」

「あたし、蘭に興味もたない男の人、初めて見たから」

「は？」

「正面から見て、笑顔にふれたら、身も心も蕩けちゃう男子が後を立たないのよねーあの子は。だから親が心配して女子校に入れたぐらいなんだから」

いきなり始まった、惚気のようなものに、新一は少しペースを崩され素直に驚いていた。

「へ、へー」

「何？ 期待はずれだった？ ファンが一人減ったってー」

「……いいや、むしろオレに言わせれば、君みたいな子珍しいと思うよ……オレ、君とだったら」

「そりゃーねー、だって同じ高校生なんだからー勿論世間一般にかっこいいとは思っし騒ぎはするけど、やっぱり私の一番は……」

彼の言葉を遮って始まった、その台詞の最後のあたりに、妙に艶が含まれており、いつの間にか空を見上げてきらきらと目を輝かせる彼女をみていると、嫌な予感がしてくる。しかし制止する間もなく彼女は叫んだ。

「怪盗キッド様だものー」

がつくー。ー。

新一の首は見事に折れ、その場には弾んだ声のエコーだけが響いているような、気がした。

園子がいう、キッドというこの怪盗。一体何者なのかといえば、適格に一言で表現する言葉がある。

月下の奇術師、だ。

この時点で、ここまでの話のくだりから、その正体はいわずもがな。ただし、その時の彼は、昼からは想像もつかない、凜とした気配を持つ、人をひきつける気障なフェミニスト紳士となる。それはもう、先ほどのマジシャンモードなんか目ではないくらいに。

そしてその存在となればもう、全てにおいて、規格外。まず、いまだき予告状を律儀に警察に送りつけて、警備を万全にした状態から盗むという大胆な犯行スタイル。声色無数の変装の名人で神出鬼没なのに、その衣装はなぜか闇夜に映える真っ白なシルクハットとマントつきのタキシード、ついでに片眼鏡モノクルという大変目立つもの。しかし決してつかまえることはなく、得意のマジックで警察を翻弄し、かつ見物人への礼儀を怠らず、決して人殺しをしない。むしろなぜか彼が発砲事件に巻き込まれることがあったりもするのだが、そのときは助ける・止める方向に動き出すという情に厚い男なのだ。ついでに彼は犯行後には目当てのものではないと盗んだ宝石をことごとく返すので、被害も実質的にはガラスや警察の備品のみ（まれに銃撃の痕跡もあるが）。

このような条件が重なって、実際のところ彼を泥棒と思っているのはもっぱら警察や新一のような探偵だけだった。逆にその鮮やかなマジックと徹底した紳士振りから、非常に世間で人気の高い怪盗で、まるで日常に彩を添えるエンターテイナーという見方が主だった。

けれど、新一にしてみれば、その存在は彼の永遠のライバルにして、親友との亀裂を作るもの。扮するのがたとえ親友でも、まるで別の存在のように憎い悪党だった。彼が現れてから、全てが狂い始めてしまったのだから。

幼いころからなんでも共有していたはずの快斗が、唯一持った新一への秘密。銃撃に巻き込まれたことも含めて何も教えてくれないのでは、探りようがない。彼が隠すとなればとことんそれは追及され、誰にも、それこそ新一でさえ暴くことなど不可能なのだ。

だからこそ、今の園子の言葉は痛い。

(友達になれそうだって、思ったオレの立場は……)

新一の心の嘆きが全く聞こえていない園子は、キッドの良いところ、魅力的なところ、むしろ欠点ナシの鮮やかな手腕について際限なく褒めちぎり始める。最後にこう言って彼女はまとめた。

「キッド様を捕まえる工藤新一には、びっくりはしても、やっぱり少し敵対心持つちゃうのよね。ごめんなさいねー」

全く悪びれずに言う園子の声に、疲れがどつと押し寄せてきて、新一は数日前の快斗と同じくらいの長い長い溜息を吐き出した。

勿論、彼女の言うことは正しい。

怪盗もそれを追う探偵も両方好きになる人間がいるというのは常識からして変な話で、必ずどちらかに傾いてしまうものだろう。かく言う自分だって、ホームズとルパンという対決なんて、未だに認めることすらイヤなのだから。

しかしそうすると自分達の立ち居地の異様さを改めて認識せざるを得ない。これが、その怪盗を心配しての一連の騒ぎだということ。を思い出せばなおさらのこと。

「……」

今度の予告日は見に行かなくっちゃ、と夢見心地で話す園子から

逃れるように、新一は無意識に空を見上げた。

「ね、ねえ、黒羽君つどこまで行くのっ!？」

「……あ、ご、ごめんっ」

公園を出てから、随分走ってきたと思う。蘭は空手部に所属しており、ちよつとやそつとで体力は切れないが、園子と新一が後ろから来る気配がないというのが気がかりだった。

幸いにも制止を求めると、彼は慌てたように止まってくれた。今更になつて風が大分冷たく、身を震えさせていくことに気がつく。まだ体を温めるには足りない距離を、しかし結構な距離を二人は走ってきた。

あたりを見渡しても誰もいない。住宅街の前の道で、大通りでも無いからか、まるで世界に取り残されたような気になってくる。蘭がいろんな意味で震えていると上から声が掛かった。

「……えつと、蘭、ちゃん……つて呼んでよかった？」

頭ひとつ分高い快斗の声は上から聞こえて来る。二人は止まった後もゆつくりと歩いているので、お互いに前を向いてしゃべっていた。

「え、うん……それは全然いいよ、黒羽君」

「いや、オレが蘭ちゃんなんだし……快斗、君の方がいいかな」

取って付けたような男子につける敬称が気になったが、あまり深くは考えず蘭は頷いた。

「うん、じゃ、快斗君ね。さっきはつやむやになっちゃったけど、これからよろしくね。あと……えつと、さっきなんだけど……」

「何？」

「目が合ったよね、ショーが始まる前……服装も全部変わってるけど、でもなんとなく、もしかして、とは思ってたの。まさかあんなに似てる人がいるなんて思わなかったから、すぐには確証持てなかったけど……」

「……………」

「あの、快斗君？」

無言のままの快斗に心配になった蘭は、快斗を見上げた。

「う、わっ」

目が合った途端、まさか、まるで電気が走ったかのように離れられるとも知らずに。そんなことをされれば、優しい気性の蘭が、原因が自分にあると思ってしまうのは、ごく自然な流れだった。

「あ、ごめん……なさい……」

「ち、違っただっ蘭ちゃんは何も悪くないっオレが、オレが勝手に……蘭ちゃんがちょっと知り合いに似てたから……」

慌てた快斗がなぜか最後のほうは拳を握り締めている。それを目の端で捕らえた蘭は蘭は俯いていた顔を上げた。

「……………快斗君……………」

けれどその悔しそうな目に、声を掛けられずにいた。勇気を振り絞って口を開いた時。

「らー……ん、ごめんねー……」

園子が走ってくるのが、聞こえ、見えた。まだ蘭の人差し指の長さぐらいしかない。公園のすぐ近くにいる。

「あ、園子」

その途端、明らかに隣にいる快斗の緊張が解けたのを蘭は感じた。ずきりと胸が僅かに痛くなる。

「……………」

彼は、女性に優しいという評判のマジシャン。何か理由があった

って、それが自分にある限り、きつと話してくれないから。

「……ごめん、蘭ちゃん」

ふいに上から、小さな謝罪が聞こえた。目を見開いてまた見上げると、彼は申し訳なさそうに微笑んでいた。それはどうみても、蘭に対して怒っている瞳ではない。蘭の体から力がすつつと抜けていった。

「……あ、うん」

止まってしまうていた二人が再び歩き出そうとした時

「あーもう、またー。黒羽君、いくらあなたでも蘭たぶらかしちゃ駄目よっ」

「なっ」「あっ」

振り返るとそこには標準サイズになった園子が、息を切らして仁王立ちになっていた。しかし、快斗はそれよりも、後ろに立っている彼の視線のほうに怖かった。

（何でオレが睨まれるわけっ!?!? ねえっ!?!?）

しかし、直後このシチュエーションを客観的に見た快斗は納得したように彼女から一歩離れた。確かに、今自分がやっていることは、彼女を困らせているという風に見えてしまっても不思議ではない。そして実際大して変わらない。ポーカーフェイスの大怪盗が聞いて呆れる。

「ほんとにごめんね、蘭ちゃん、園子ちゃんも誤解させてごめん」

「誤解って何よ、ねえ蘭? 変なことされなかった?」

「あ、快斗君、私のほうこそ!!! 大丈夫よ、ほんとに違うから園子っ」

必死に弁解している蘭の声を聞きながら、園子はまだ警戒を緩めない。友達思いの子な彼女を見る快斗の目が柔らかくなる。目的は自分を探しに来たはずなのに、その相手と親友なら天秤にかける意

味もないらしい。

「おい……」

「な、なんだよっ」

「なんだよじゃねー。オメー普通のポーカーフェイスと無駄なフェミニストぶりはどうしたんだよ」

かなりおかんむりの新一に、快斗は何も反論できない。

「……ごめん、そんなつもりなかったんだけど」

「ま、大方青子ちゃんに似てたから、対応に困ったんだろ」

「……お見通しかよ」

それでも不機嫌丸出しの新一に快斗は弱弱しく微笑んだ。

「じゃあ今度は新一がエスコートしてあげて。前科持ちらしいオレは後ろからついていくから」

快斗はさっさと歩き出してしまった。それは、話を速く切り上げたい云々よりも、どうも今は誰とも関わりたくないというような彼らしくない言葉だった。実際に彼は誰とも話すことなく、三人の後ろを機械的に付いてくるのだった。

その彼の頭の中で巡るものは、もしかしたら新一には正確に言い当てられたかもしれない。けれど彼は、あえて突っ込むことをせずに、歩き出した。

新一と蘭が何か話し込んでいる。女性に対して嫌そうな態度ばかり取る新一にしては珍しいと、快斗が思っていると、不意に肩を叩かれた。

「……疑って悪かったわね、快斗君。この子強いんだけど、ナンパにはめっぼう鈍くて、それでつい……」

園子が小さく耳打ちしてきて、内心ほっとした。しかし顔には出

さず復活したポーカーフェイスで聞いてみる。

「……へーどのくらい？ あんまりそんな風に見えないけど」
「すっごいんだから、なにしろ」

このあと聞かされた蘭の素性に、快斗がこの細い体のどっからと驚愕して仮面を外しかけ、疑いをもつのもまた当然のことだった。つらつらといわれる経歴が聞こえてくるのか蘭は顔を赤くしている。しかし、それに対する反論はない。そしてそんな蘭を、新一は隣で歩きながらじつと見ていた。驚いている快斗は勿論、周囲が暗いので誰にも気付かれることはなく、それは新一にとっての幸이었다。

誤解が解けるのも含めて、駅への距離が縮まるにつれ、彼らの距離も縮まっっていく。それが4人にとっては新鮮だった。お互いに性別で別れた空間に住んでいれば、こういう触れ合いは快斗ですらなかなかないもので、駅までの道はいつもよりも短く感じられるくらいだった。

12・NとS、共通点と相違点(前書き)

推理にも満たないものです。笑ってやってください。

12・NとS、共通点と相違点

数十分後、4人は無事最寄りの緑台駅にしていた。鮮やかなネオンに照らされて、駅全体が明るくなっている。一応住宅街の為に作られた駅なのだが、このあたりだけは飲み屋や、コンビニ、カフェも数件あって、少しにぎやかなのだ。駅を囲むように作られている居酒屋から立ちこめるいい匂いの中を歩いて行くと自然とお腹が減ってくる。時刻はもう6時半を回っていた。

「ね、ねえ蘭？」

その終点で、いままで快斗の隣にいた園子が、小走りに蘭に近寄って何かを耳打ちした。男子二人には聞こえない音量だが、蘭は怒っているらしく眉を吊り上げている。薄暗いせいで、快斗の持っている読唇術も使えないので何を言っているのかは分からない。

「ら、蘭ちゃん、どうしたの？」

「あ、なんでもないの……二人とも今日は本当にありがとう」

同時に園子に向き合って立ち止まっていた蘭が、明かりに向きあうようにして彼等に向かつてぺこりと頭を下げた。慌てて園子もそれに倣う。彼等は気にはなったものの、目の前で丁寧に礼儀を尽くす二人に問うどころではなかった。

「あ、いや……もとはと言えば俺が悪いんだし……」

「そうそうっ、楽しかったから気にしないで」

二人は同じように戸惑ってはいたが、快斗が逆光になっていても分かるはつきりした笑みを浮かべるのとは対照的に、新一は少し顔が固い。それでも二人が笑んでいるのは、嫌な道中ではなかった証だろう。ちなみに特に探偵においてそれがどのくらい珍しいことなのか、勿論少女達は知る由もなかった。

「それじゃあ」「ちよ、蘭っ……ごめん、また見に行くからねっ」

駅の前に出ている電光掲示板の近づく時間と、腕時計を見て、蘭はためらうことなく踵を返し、園子は急いで付いて行く。電車が来るまでにはまだ余裕はあったが、立ち話するつもりはないようだ。「あ、ちよつと待って！」

その、まだ急ぎ足とは言えない歩調で去っていく二人を急に呼び止めた快斗が、振り返った二人におもむろに手を差し出した。新一も見つめる中、またぼんとその手が鳴った。

その瞬間、何もなかったはずの手から現れたのは数枚の紙ぶぶきと、小さなメモ用紙だった。ちぎられた跡がありありと残っていて、即席だとわかるものの、書かれている文字は丁寧で、なにやらやけに長い。

「そんな確率に掛けるの、電車賃ももつたいないし。ってわけでこれ、オレのメールアドレスだから登録しといて。蘭ちゃんと園子ちゃんのためだったら出張マジックでもどーんとおまかせだからさ！」
呆気に取られる新一の前で、快斗はそれを二人に差し出して人懐っこく笑った。だが、この状況で笑っていられるのは快斗だけで、蘭と園子はそのメモ用紙に真っ直ぐに書かれた文字と快斗を見比べ、一体いつの間に書いたんだろうと書いた顔を、互いに見合わせていた。今更なのだが、彼は鞆も服ろらしきものも何も持っていないのだ。

だが、ホームのアナウンスが聞こえ、はつと我に帰った二人は挨拶もそこそこに走っていき、駅の中に消えた。

「乗れると思う……？」

そんな二人を見送りながら、快斗が呟いた。

「オメーのせいだろ」

「……否定はしないけど。まあこの時間だったら、次のすぐ来るって……うん、あと10分待てば来るみたい。内回りはあと4分。ってわけで行くよ」

駅に向かって歩いて行く快斗の後ろを追い掛けながら、新一は呆れ顔だ。

「……つたくなんで一緒に改札までいかねーんだよ。ホームで待ってりゃいいじゃねーか」

「そんなの、新一と違って微妙な乙女心が分かるからに決まってるでしょ」

「ちょっとは蘭ちゃんの気持ちも酌んであげなきゃ。と快斗は続ける。」

「ああそうかよ……って、待て、二人はどっち回りの電車に乗るんだ？」

新一はふてくされた、だるそうな顔を一変させた。そのとき巨大な音がして、外回り電車が、ホームに滑り込んできた。

「え……どっちって……あれでしょ。このあたりでセーラー服の女子校って言ったら江古田ぐらいしかねーもん」

それを見上げながら快斗が呆れまじりで指さす。ホームは一つで、左右に分かれて乗る仕組みになっているから、階段だけでは二人の乗る電車の向きは分からないのだ。

しかし新一は軽く首を振った。

「んなはずねーよ……二人とも券売機に行つてねーだろ。つてことは、あの二人にとって、ここは定期で行ける範囲つてことだ」

新一が探偵の顔になって、確信を持って言う。その言葉で全てを察した快斗は、瞬時に頭の中に東都線の地図を描きだした。途中に数駅挟まっているとはいえ、江古田、緑台、米花の順で駅は並んでいる。

つまり、東都線は環状線なので、どちら周りでも目的地には行けるが、普通定期を買うときは、最短距離の目的地間しか買えない。事情があつて、江古田から米花までの回数券を持っていてそれを利用している快斗の立ち寄れる緑台駅から定期で直接乗れるという事

は、この駅を含んだ範囲を、少女達は普段から移動している事になり、帰るとなれば、ここから江古田と反対方向、つまり、彼等と同じ方向でないとありえないのだ。

「じゃ、二人は内回り電車に乗るってこと……？」

「ああ……」

快斗が、確認するように新一に問いかけると、彼は推理が的中した時特有の笑みを顔に浮かべていた。ただし、快斗はそれを十分に見ることなく、踵を返した。

「こうしちゃいらねーっ」

「おい待てよ、今更行っちゃって、気まずいだけだろ……内回り、あと1分で来るし」

その場から動こうとせずに快斗を止めた新一に彼は一瞬あっけにとられたようだったが、すぐに新一の傍に歩み寄ってきて、その危機感のない顔を睨みつけた。

「何言ってるのっ！ この時間クラブ活動後ならともかく、女の子をそれも二人だけで電車に乗らせるなんて新一正気！？ 江古田の下校時間って5時だよ。大体そのために一本遅らせたんだからっ！」

「は！？ どういうことだよ……それに蘭は空手で……」

「あーもうっほんとに新一は分かかってないっ」

言うなり快斗は新一の手を掴んで走り出した。新一は憮然としながらも、それについて行くしかなかったが、その手を振りほどいていつの間にか大急ぎで走っていた。

馬鹿でかい音が反響する階段を全速力で上り切ったホームで、新一と快斗は二人の前にたどり着いた。新一の推理通り、今まさに入ってきた電車の開いたドアの前に二人は立って乗ろうとしていた。

快斗がすうつと息を吸い、声を張り上げる。

「蘭ちゃん、園子ちゃん!」

「え、快斗君!？」

電車に足を掛けていた蘭が、大声で呼ばれて肩を跳ねさせた横で、園子も目を丸くしている。

「ど、どうしたの……」

そして思わず足をどけた瞬間、電車の扉が閉まった。ぱうんという気の抜けた音が響いて、電車はゆっくりと走り出す。

「や、電車、一緒みたいだったから、どうせならと思って……でも、ごめん、一本遅らせちゃうことになって」

切れていない息で快斗は電車を見て、申し訳なさそうに二人に視線を戻した。

「う、うん……それは、いいんだけど」

「よく分かったわね……、あたしらがこっち方面だって。さっきも蘭に言うの止められたのに」

園子は、記憶をたどりながら言っているのが丸分かりの表情だった。

「それはまあ、コイツ、一応名探偵だからさ」

快斗は腕をくいと回転させて、親指だけで新一を示して笑う。

「ああそうね、愚問だったわね……」

園子は苦笑いを浮かべた。

「けど、何もわざわざ走ってこなくてもよかったのに……」

蘭は少し快斗に近づき、新一を見ながら言う。快斗はそんな蘭に向き直った。

「ねえ、蘭ちゃん、この時間の電車、いつも乗ってる？」

いきなりされた質問に、蘭は戸惑いいつも首を振る。

「う、ううん……女子校だし、いつもはこんなに遅くならないから」

ああやっぱりと顔に書いて、危機的状況を回避できたことを露ほ

ども知らない少女に快斗は真面目な顔になった。

「蘭ちゃん、園子ちゃんも、この電車、痴漢とか酔っ払いとか多いんだよ。それも、こんな時間に女性専用車両に乗らないなんて……襲ってくださいって言うてるようなもんだよ」

二人が立っていたのは、女性専用車両のひとつ前のつまり何の変哲もない普通の車両だった。

「……そんな大げさな」

園子が大きく両手を広げて振ろうとする。しかし快斗はそれを最後までさせなかった。

「おおげさじゃないんだって！ 二人とも年頃の女の子なんだから自覚持たないとっ！ あいつら女の子だったら誰だっていいんだから。それが可愛い子ならなおさらねっ」

「……快斗君って、なんか先生みたい」

力説する快斗に蘭が少し頬を染める。お世辞だと受け取っていると分かった快斗はどっと疲れて、蘭を見やった。

「……ねえ、ほんとに分かったの？」

「うん……心配ありがとう」「蘭は……そうでしょうね」

につこりと笑う蘭と、少し苦笑いする園子は対照的だが、気持ちには共通している気がする。

「あーもう、ほんと、そう言うところはそっくりなんだから……」

すっかり感じ取った快斗が今日一番疲れたようにベンチに座り込んで、盛大なため息を吐いた。

「ん？ そっくりって誰と？」

園子が素早く反応する。思わずもれてしまった言葉に気付き、一瞬ポーカーフェイスが剥がれていた快斗は瞬時に顔を上げて、すぐに苦笑いした。

「ん、ああ。オレの知り合いだよ……すっげー危機的観念が薄くてさ。初対面なのに、全然警戒心なくて、子供っぽくて……ま、蘭

ちゃんみたいに魅力的なプロポーションしてるわけじゃないから、大丈夫だとは思っけど」

快斗は蘭の見事な体をちらりと見て締めくくった。

「そういえば、さっきも私が似てる子が知り合いにいて言っただよね」

「おい快斗……オメー」

蘭が納得している横で、新一が胡乱な目を向けた。

「快斗くん、もしかして、その子と蘭を重ねて、心配して来たんじゃない？」

その中で、園子はいきなり切り込んできた。快斗の若干和んだ目を見て、何かを察したようである。

「へっ……な、何言っただよ、そういうわけじゃなくて。大体あいつ妹みたいでまだまだ中学生ぐらいだしっ出るところ出てねーしっ」

変化球すぎてポーカーフェイスどころではなく慌てる快斗にも、園子は状況に慣れていらしく、あまり動じなかった。

「でもさっき、女の子なら誰でもいいんだって言っただよ？」

蘭が無邪気に質問してくる。

「そ、それは！ でもあいつ一歩間違ったら男かもしれねーくらいほんとにべったんだしっ。たぶん狙われるのなんて一番最後だっつ」

必死になって抵抗する快斗に、園子は面白い獲物を見つけたと言いたげに笑った。

「ふーん？ まあいいけど、いつか紹介してね」

「……うん、まあ……」

「で、工藤君はその付き添いの？」

蘭がひよっこりと体乗り出して快斗の後ろにいる新一に問いかけた。

「……いや、まあ、そんなところ……けど、ほんとに色々狙われてそ

「だな」

新一は背後に殺気を放ちながら言いきった。蘭を見つめる目が、尋常じゃない数あることを、彼は敏感に察知していた。

「……ま、オレらが電車一緒に乗るから。大丈夫だって」

そして快斗はいきなりポンとハトを出して見せた。

「わあっすごいっ」

「ほんといつでもどこでもできるのねえ」

素直に感心する蘭と園子に笑いかけながら、快斗は今度はトランプを取りだす。

「ほどほどにしとけよ……もう来るぞ」

「りょーかいっ」

時間にして約2分のマジックショーはあっという間に終わりを告げた。

電車に乗る。それがこんなに緊張すると言うか、体が強張るなんて新一には初めての経験だった。目の前には蘭がいる。サラリーマンや学生が多く、座ることもできないほどの込み具合で、快斗の言う事は確かに正しかった。電車の中でも、彼女を見つめる視線の多いこと多いこと。確かに彼女は女性として容姿は魅力的だと思う。だが、今日少しの時間を一緒に過ごすうちに少し子供っぽいところや、可愛らしい面を沢山見た。それなのに、容姿だけで彼女に見惚れる輩は許せなかった。

なんとか守ってやりたかったが、具体的にどうすればいいのか、それが分からない。女性専用車両に移ればいいとも言えなかった。一緒に電車に乗っていることもあるが、快斗が電車に乗った途端に、周りを誘導して米花まで開かない扉まで二人の少女を引っ張り込んでそれぞれ庇うように立っているからである。結局近すぎる距離に

何を語ることもなく窓の外を見ていることしかできない。その結果、新一はかつてないほどに強く胸を打つ鼓動と戦っていた。

かつてこんなに女性と近くにいたことはない。勿論、知っている女性と言う事である。向こうが勝手に自分を工藤新一と認識してどさくさにまぎれて近寄って来ることはあったが、それは全て無視してきた。

だからこそ、一体どうしてこんなことになっているのかはまるで自分でも説明がつかない。一体今日の自分は何があったのだろう。思いかえせば今まで生きてきた17年間の人生で、一番女性と関わった時間が長いと思う。ただそれが、なぜか嫌ではなかった。快斗を追いかける必要は、はっきり言えばなかった。一人でも二人の女性を守るくらい、彼にはお手の物だから。貝かぶりではなく、能力的に。

「あの……工藤君」

少々快斗を見ながら過去に考えを巡らせてぼうつとしていた新一は、呼びとめられてはっとした。

「あ、ごめん、何？」

「ありがとう。一人で乗ってたら、やっぱり少し怖かったかもしれない」

いつもと違う電車に怯えているのが、その声から分かった。空手の都大会優勝者と言っても、やっぱり女の子なのだ。ただし、新一はこんな風に女性から感謝される、それもこんなに純粋なもの+間近でというのは今までになかったので、躊躇ってしまう。

「……ああ、いいよ、そんなの」

「じゃ、何か話してくれない？」

蘭が新一を期待をこめて見上げてくる。しかし、新一は勿論、女子にモテてもプレイボーイではないのだ。

「な、何かつて……オレ、ホームズの話しか出来ねーけど……」

「うん、それでいいよ。さっきも面白かったもん」

全く気にすることなく、蘭は笑う。

「んじゃ、緋色の研究の話でいいか？」

「うん、確かホームズが一番最初の作品でしょ」

「よく知ってんじゃん、この話はそもそも」

気まずさは、敬愛する探偵が徐々に徐々に拭い去っていった。

(新一……すっげ 楽しそうだな)

時折弾ける笑い声に、吊皮を握った快斗は新一を見る。座席と扉の間のスペースに上手く収まった二人は、最初こそ気まずさの極みにいたものの、今は何かの話で盛り上がっているのが少し離れていても横にいる快斗にはよく見えた。それも主に新一が大変楽しそうに笑っている。それで大体の話の予想はついた。

(あの血なまぐさい話、蘭ちゃん、嫌じゃねーのかな……青子だったら、どうなんだろう)

「ねー快斗君、何見てるの」

目の前にいる園子がふいに快斗の顔を覗き込んでくる。

「あ、ああごめんっ」

快斗は慌てて視界を元に戻した。女性のエスコート中に何をやっているのだろう。父親に笑われそうな失態だ。

しかし園子は息を吐いて、新一と蘭を見ていた。

「いいのよ、私、面食いで彼氏もないけど、好きな子がいる男にまで手出そうなんてさすがに思わないから」

「す、好きな子っ!?!」

「うん、あたしの勘だけど。快斗君、さっき言ってた子のこと好きなんじゃないの？ 蘭に似てるっていう」

「なっ！？ んな訳ないって……ないないっ大体誰があんなオコサマ、蘭ちゃんの方がずっといいって」

青子のことになると、どうもポーカーフェイスが外れていけない。快斗が必死に平静を保とうとする横で、園子は呆れたように快斗を見上げた。

「あのね……だから蘭は駄目だってば」

「いやだからそれは、選ぶとすればの話だって！ …………… それにオレ、まだ恋はいいんだ」

慌てた自分の無様さにふうつと深呼吸した快斗は、どこか寂しそうに呟いた。

「どうして？」

「そんなのしてる暇ないからね」

その時の快斗はほんの少しだけ、軽くて元気な少年と雰囲気を変にしていた。

「…………ふーん。随分もつたいないこと言うのね。そのルックスと容姿じゃ、女子がほつとかないでしょうに。よっぽど今が楽しいのね」
けれど園子にはそれは、単に女性関係には興味がないとしか取れなかったようだ。快斗は少し目を丸くして、その後すぐに苦笑を浮かべた。

「まあ、確かにモテたけどさ…………それにちょっとうんざりして帝丹入ったんだ。オレも新一も」

「おー、随分はつきり言うねー色男」

「けど、新一は、もしかしたら、もうそんなこと、どうでもいいのかもな」

新一を少し呆れたように見つめる快斗は、知らない。

この世には何種類もの恋があることを

電車は4人を乗せてひた走る。そして彼女達の街が彼等と同じ米花だと知ったのは、園子の能天気な声と、車内アナウンスが重なったからだった。

脱力する快斗に、園子がこっそり教えてくれたことによると、これ以上迷惑をかけたくないからと蘭に言われて、あえて最寄駅を言わなかったらしい。

つまり、フェミニストによる乙女心の推理は正しかったことになる。

12・NとS、共通点と相違点（後書き）

。タイトルは磁石から……なんとなくイメージで伝わればいいな（汗）
内容を改変しました。あんまり経緯が変だったので。上げてから気が付くのが悲しいです。でも話の筋には関係ありません。

13・タネは分かって、見えない

米花駅はかなり賑やかな駅だ。小学校から大学まであるのに加えて、オフィス街なのである。街にはもう学生の姿はなく、逆にサラリーマンが多くて様変わりしていたが、あの暗い緑台駅の道とは違って女子二人で歩いていてもなんの問題もないくらいには、かなり人通りがある。

「もうここでいいわ。帝丹とあたしたちの家って丁度反対方向だし。蘭の家はすぐ近くだし。大丈夫、蘭は責任もって私を守るから。何かあったら携帯もあるし、安心して」

だから駅の改札から出るなり園子がそう言った時、新一も快斗も、それ以上反論しなかった。というか、出来なかった。

「……じゃあ、気をつけて帰ってね、ほんとに」

「うん、じゃあまたね、工藤君、快斗君」

蘭が満面の笑みで新一と快斗に手を振る。

「あ、ああ」

「じゃ、二人ともまたねー」

二人ともまた会う事を信じて疑っていない様子で、駅の雑踏の中に消えていった。

「長い一日だったな」

「ああ、ほんとにな。けど、二人に会えてよかった」

楽しそうに月を見上げながらそう言う快斗に、新一は眉をしかめた。今は二人、帝丹高校に向かって歩いてる。走るほどに門限は近づいてはいない。食堂は9時までだから心配もしていない。

「なあ、快斗」

ふいに新一が人通りの少ない道で立ち止まり、その会話の延長線上の様に快斗に向かって足を繰り出した。勿論その前に快斗は飛び退るようにして距離を取ったが、新一はそれで諦めるつもりは毛頭なかった。

「……………どういうつもりだ」

むしろ彼の怒りはそのことでさらに助長されていた。まるで殺人犯を追い詰めるような声の低さとぎらついた目で快斗を見る。しかし、快斗といえば、よけることはよけたものの彼の怒りが予想外だったように目を見開いている。ついでに、新一のその誰もを黙らせような目も声も、彼には全く効果がないのである。

「え？ 何が？」

「とぼけんなつ あれだけ出来る人間が、この世界にどれだけいると思っただよっ」

快斗は一瞬止まった後、嬉しそうに新一を見た。

「へーえ。新一がそんなにオレのこと褒めてくれるなんて嬉しいねえ、しかも世界規模で」

「快斗っ」

ちやらける快斗に、新一は再び詰め寄って腕に手を伸ばした。しかし快斗は今度は逃げようとしなかった。掴まれた腕をそのままにすつと目を眇める。明らかに捉えている新一の方が有利なのに、そう感じさせない空気が場に流れる。

「あのさ、新一。誰に向かって物言ってるの？ ……オレがそんな簡単に尻尾掴ませると思う？」

声のトーンが少しだけ落ちる。街灯もなく月明かりのみが彼を照らします。そんなシチュエーションに加えて快斗は、不敵な笑みとほんの少しだけ件の姿の気配を滲ませて、どちらが捉えているのか錯覚するぐらいの、新一ですら恐怖とは別の意味で怖気づく、凜とした冷涼な瞳で、彼を真っ直ぐに見据えていた。

「……だつてさーそもそも親父は、マジシャンしながらやつてたんだぜ？　こんなの序の口じゃん」

かと思えば、その気配を一瞬で消し去り、おどけた調子に戻る。

「大体、現行犯逮捕じゃないと捕まえない第一号が何言つてんだよ、だろ？」

最後に新一の肩をぽんと肩を叩くと歩き出した。その背中に新一はたまらず問いかけた。

「だつたら何で、今なんだ？　探すんならもつと手っ取り早い方法があるだろ」

快斗は振り向かなかったが、ぴたりと足を止めた。

「……どうしてそう思うわけ？　大体誰を探すつての？」

「とぼけんよ。そもそも時期が被りすぎてるし。お前あんなにおかしかつたじゃねーか。オメーがマジシャンだつて言うなら、探偵のオレをごまかせると思つてんのか？」

快斗が、新一の口調に動揺することは当然なかったが、体を90度回転させると傍のガードレールの縁に腰掛けた。新一と視線はあつていない。

「……別に青子のことはきっかけにしかすぎないから」

「は？」

「オレさ、知つての通りガキの頃からずーっとマジックやってっけど、反応見てあんなに嬉しかったのは初めてだった」

そりゃいつも、マジックやってると楽しいし、皆笑ってくれるんだけどさ。

付け加える言葉を聞き流す新一の脳裏に、青子に包帯を巻くというマジックをして見せたときの反応が浮んだ。大きな目をまん丸にして、包帯と快斗を見比べて、そして次に言った快斗の大風呂敷に楽しそうに尊敬の眼差しをこめて笑った青子。まるで子供そのままの純粹な瞳だった。今日あつたばかりだといいいながら、まるでいつ

も側にいてじゃれあう猫の兄弟のようだった二人の姿は微笑ましかつた。

「……………」
「それで、思ったんだ……オレ今純粹にマジック楽しめてるのかな。みんなを楽しませることができてるのかなって……。キッドの時はそれどころじゃないから、試してみようと思って。オレのこと誰も知らない場所にいつてき。クラスメートだけじゃなく老若男女入り乱れてる場所に行つて……。黒羽快斗として、楽しんでみたかったんだ」

快斗の言葉は徐々に付け足しているように整然としたものではないが、その声は思い付きではない張りがあり、立ち尽くしたままの新一は黙つて聞いていた。

話し終えた快斗は立ち上がつて再び歩き出す。その後を新一は少し戸惑つたように足を軽く引きずるようにして追つ。

「……………とにかく、もう止めるよ。大体そろそろ準備に取り掛からねーとヤバイんじゃないのか？ 次の土曜だろ、予告」

思いもかけない言葉に振り返つた快斗は少し目を丸くして、目が合つた途端にやりと笑つた。

「ふーん、名探偵がそれを言うの？」

「……うっせーな、とりあえず止めるって言つてんだ。素直に聞けよ」
「悪いけど、まだ止められねーな」

その後今更のように時計を見てヤバイ、食堂閉まつちまうと呟きながら慌てて走り出そうとする快斗を、新一は間一髪で止めた。

「……………なんでだよ？ 今の話なら、見つけるつもりじゃねーんだろ？」

「まあ確かにそうだったんだけどさ。気が変わった……今日蘭ちゃんに会つて」

「……………」
はつきり聞こえた名前に、新一はその動きをぴたりと止める。快

斗がふつと息を吐いた。

「もう新一も分かっていると思っけどさ、あの子……間近で見たらますます青子そっくりなんだ。なのに喜ばれても、なんでだか、青子の時ほど嬉しくねーんだよ……だからもう一度青子に会いたい。あの感覚の正体を、何が何でも突き止める。そしたら止めるよ」

(……やっぱ、そういうことかよ)

真摯な眼差しの快斗を見ながら新一は深く納得していた。いくら同じ顔だからといって、同じものを持っているとは限らない。それに快斗の感性にヒットしたものが実際のところなんなのか、探偵としてなら新一ははっきり言える。だから青子の反応は新一にとってはこの夕方に見た女子高生たちとそこまで変わらないようにみえるし、蘭との違いもはっきり分かるのだ。青子に比べてあの少女は大人しく、しかし強い意志を持ち、常に隣にいる園子を戒めていた。けれど笑うと本当に可憐で花のようだった。ただ、青子がひまわりだとすると、名前の通りの清楚さと華やかさを持っているというか

「だからオレは青子を探す。この空の下の、どっかには必ずいるんだからさ。それに……新一だってもう一回青子に会いたいだろ？」

まっ、少なくとも明日はまだ余裕があるからやるつもりでいるよ」

新一とて確かに青子には会いたいが、当然快斗ほどではない。むしろもう少し話をしたいと

(ん？ オレは何でこんなことを?)

「……新一？ どーした？」

ぼんやりと快斗どころか、目に映る何も見えない新一を見て快斗が心配そうな声を上げる。新一は目の前に自分の顔(笑)があるのに気が付いて、大きく目を見開いた。

「あ、ああなんでもねーっ」

「それ、ほんと？」

じいつと睨みに近いような目で見てくる快斗を、新一は笑ってしまかした。

「なんでもねえって……とつと行くぞっ」

そして自分で快斗の動きを止めたのも忘れて、駅のホームへ続く階段へと一目散に向かう。

「なーどーしたよ新一？ おーい新ちゃん？」

この時新一には、後ろから追いかけてくる快斗のからかう声も全く聞こえていなかった。

快斗の言葉の余計な飾りが取れて、核の部分だけが耳にこびりついて離れない。それだけではなくて胸にまで突き刺さってしまった。いるらしく、ことあることに連動して反応してしまうのだ。

快斗が青子に出会うことで、マジシャンとしての幸せを見つけたのなら。新一の場合は、まさに蘭と話している時が、それだった。感心するような顔、驚いたような顔、そして、敬愛するホームズの話をする時にくるくる変わったその表情の全てが新一の胸を猛スピードでフラッシュバックしていく。

けれど、新一は快斗が追いついてくる前に、首を振ってそれらを追い出した。自分にはありえないことだと、無意識のうちに警戒していた。

尤もそれも、いつまで持つのか分からなかった。

今まで女性に何の興味も持たなかった男が運命の女性に合うとうなるかというサンプルを、当然のことながら彼は持っていないのだから。

「にしても……ほんとにそっくりだったわねーあの二人」
米花駅周辺の繁華街を出て見慣れた道を歩き出すと同時におもむろに話し出した。

快斗たちが来るまでの間、紙を握り締めてぼうつとしていた姿を、そして突然一緒に乗ることになった電車でも、園子は快斗と話をしながら時折蘭を観察していたのである。

「あ、うん、びっくりした」

アスファルトの道を見つめていた蘭が、あいまいに笑いながら答える。その顔もどこか上の空で。

「で？ 蘭はどっちがタイプだった？」

その結果彼女の中では一つの結論が出ていた。

「どっちって？ だってあれだけ似てたら何も」

「そうじゃないでしょっ！ あのクールで真面目な工藤君と、明るくて元気な快斗君、どっちがタイプだったってこと」

「もう園子ってば、いつもそういう話ばかり……」

誰が誰を好きだとか、蘭にとってはあまり興味のない話だということはそれこそ百も承知の園子だ。それでも今日は勝算があるため話をしつこいくらいに引つ張っていく。

「でも、あんたもう一回会いたいと思ってるでしょ？ 工藤君と話してるのすつごく楽しそうだったわよ」

「そ、園子お……」

蘭はもはや前を見るのを止め、隣の親友をほんのりと染まった顔で見る。勿論受け取った方が「あーこれはもう、男にとっては悩殺モノよね」なんて思っていることは知らない。

「蘭……私に隠し事はしちや駄目よ？」

「……でも、工藤君は……その、大人にもファンとか沢山いるし、それに私ずつとお父さんのことで偏見持ってたんだよ？ だから……」

…」
実は蘭の父親は警察官で、名を毛利小五郎と言うが、かなりの探偵嫌いだ。その理由として、尊敬する上司の警部がその探偵にご執心であることが気に入らないからで、当然蘭もその少年に、いい感情を持っていなかったはずなのだ。それがどうして一回会っただけであんなに引き込まれてしまうのか、蘭にも全く分かっていないのだろう。

それに、大人っぽいと言われても、蘭はまだ高校生なのだ。そして相手は同じ高校生といっても別格なのだ。当然その名に恥じない位にはもつとすてきな女性を沢山知っているはずで、そう思う蘭の気持ちは良く分かる。

しかし園子はそのもろもろ分かった上でちつちと立っていた人差し指を振った。

「そんなの関係ないわよ。連絡先はあつちからもらってるんだし、もう一回今度の休みにでも集まりましょう？ そうねー服部君と和葉ちゃんを誘うのはどう？ 確か彼って工藤君のおっかけで同じ学校だったはずだから」

女子校だというのによくもまあそれだけ男子のデータがすらすら出てくるものだ。蘭が関心半分呆れ半分で見ていると、彼女はふふつと余裕の笑みで笑った。

「あーあ、蘭もついにバージン奪われるのかあ」

「ば、ばばばば、バージンってっ」

真つ赤になる蘭も園子は見慣れていて、全く動じない。そのままふふふと笑いながら夜道を歩き出した。

「ちよつと園子ー」

蘭は慌てて追いかけて隣に並んだ。

「……ところでさ、快斗君の行ってた蘭とよく似てる女の子って、もしかして青子ちゃんだったりして」

「それはないよ、だって、青子ちゃんと一緒にクラスだもん。中学生じゃないし」

首を振りながら、否定する蘭に、園子は鞆を持ったまま、器用に腕を組んだ。

「でも彼女一見すると中学生に見えないこともないじゃない」

「だって知り合いなんでしょう？ 年齢も知らないなんてあるの？ 首をひねる蘭に、園子は目を眇めた。

「ま、確かにね。帝丹って男子校だし……普通に会うこと自体少ないんだから、年齢ぐらい分かってるか」

「でも……いつか会えるかな……その子に。きっととってもかわいいと思うの」

願望を込めて言われた言葉に、園子は一瞬ぼかんとして、その後吹きだした。

「蘭、それってまさか自画自賛？」

「あ、ち、ちがつ、もう園子っ」

蘭は再び赤くなり、園子をぼかぼかと叩きだした。

「ちよつと蘭、痛いって」

たわいない二人の会話が近い未来に真実になるかは誰も知らないはずだ。

「……さて、止められなかったわね」

水晶玉にこの光景の全てを映しながら、紅子はくくつと唇を引き上げた。回りには沢山の悪魔らしい品が溢れ帰っている。銀の髑髏のオブジェ、蝙蝠の蠟燭立て、美しい金髪で作られたらしいカーテンは下がり、色はうつすらと蠟燭に照らされて分かるのみだが不気味である。

蛇の巻きついたデザインの水晶玉置きには、ベッドに丸まる少女

がふいに映し出された。

「どうするのかしら、青子さん？」

つい今しがた使いに見せられたカードを見て、きっと困惑しているのだろう。

どうして？

あの幼い瞳に浮ぶのはきつとそれだけなのだろう。いや、もうひとつあるかもしれない。それはどうでもいいことだけれど、全ては

「……………あなた次第ね」

…。
出会いは突然、搔っ攫うのは運命……………そう、勿論、これからも…

「……………ねえそうでなくて？」

いつのまにか紅子の背後には、フランケンシュタインとドラキュラを混ぜ合わせて割ったような醜悪な顔つきの男が立っていた。格好こそ、黒いタキシードでまとめており、ネクタイの赤が映えているが、首から上とその体型が、台無しにしてしまっている。ただ彼は勿論そんなことは気にせず、今も聞かれたことについてのみ、答えた。

「……………この少女にはいささか過酷なのは？」

「あら、そのくらい覚悟がなければ、何も始まらないじゃない」

紅子は傍らにいた背の低い執事に向かって言うと、そのままその部屋を退室した。

水晶玉にはまだ女子高生二人の光景が映り続けていたが、主がいなくなったことにより徐々にその姿は消えていく。

「えー」と和葉ちゃんの電話番号はあっと……………っ

嬉しそうに言いながら携帯を打つ少女の動きは、既に影のみとなっていたが、それがぴたりと止まって煙のように揺らいだ。

「……日曜日はキッド様の予告日じゃないっ！ 並ばなきゃいけないのに絶対予定なんて入れられないわっ！！！」

絶叫に近い声だけが水晶玉の中から聞こえていた。

「……そ、園子」

そして蘭の呆れた声を最後に、水晶は元の透明さを取り戻し、部屋の中の不気味な家具たちを鏡のように映し始めたのだった。

14・最初が最後で巡って還る

出逢ってしまった。出遭ってしまった。……何もしないうちに
いや、何もしなかったから。運命に従ってこうなってしまったの
だと思う……。

烏が啞えて来たカード一枚に書かれた事実、青子は体を貫かれ
たような衝撃を受けて眠れない夜をすごしていた。消したはずの不
要な心が顔を覗かせて落ち着かない。会いたい人に会えるのだから、
いいじゃないかという気持ちと、会わせてはいけなかったという任
務が反発して、どうしようもできない涙が後から後から枕を零れて
いく。既に目は真っ赤だった。

自分勝手な臆病風に吹かれて、青子は間違った判断をしてしまっ
た。

『最近街に出現するらしいマジシャンがもしも快斗なら、きっと彼
經由で新一君にも会うことになる。青子つながりで新一君と蘭ちゃ
んが出逢ってしまったら、それこそ何の意味もないから、だから…
…。』

そんな、今更のように気付いた言い訳も、むなしいだけだ。実際そ
うは考えていなかったことは自分が一番良く知っているのだ。……
ただ、怖かったただけなのだ。

今更なにを如何思おうと、結論も事実もひとつだけ。青子の怠慢
によって、二人の人間が出逢ってしまったという『過去』だけが真
実なのだ。

「だめ……すっかりしなくちゃ。まだ終わってないんだから」

自分を無理矢理励ましてみても、何の効果もない。彼女一人だけがいるがらんとした家の中でのすすり泣きは、やけに大きく聞こえた。まだ警部は帰ってこない。ずっと追いかけている怪盗の予告日が近いとかでここ数日はだんだん帰りが遅くなっていた。警部はその怪盗にまるで恋をしているかのように執念深く追っていて、今朝もやる気満々で出て行ったのだ。そして本来なら、今、その警部を送り出した青子はもうここにいないはずだった。任務に失敗したからだ。

カードに書かれていたことは青子を驚愕させると同時に驚かせた。出会わせてはいけない二人が、出会ったことは、許されないはずなのに、次の指令があったのだ。曰く、魔界の運命操作局もとめられなかったものを、どうやって一介の見習い悪魔に止められるのだという情けらしい。その新たな指令は。

二人の仲を引き裂け

という単純明快なもの。同時に今度失敗したら、消滅が待つのみという、脅しが付随していた。

……消滅。全てを無に帰すこと。この手も声も考えていることも、涙も全てがなくなつて、青子という存在は、どこにもいなくなる。

それと引き換えにするのは、悪魔の魔力の源でもある人間の負の感情を生み出す不幸。普通の悪魔なら喜んで飛びつくだろう。

なのに……天秤にかけて自分の胸の中を探れば、壊したくないと思っっている。つくづく悪魔らしくない思考だ。

青子が実際に新一に会ったのはほんの少しの間だけだったが、高校生探偵として活躍しているのをよくテレビで見ると、蘭はクラスメートとして毎日会っている。その二人を並べてみると、嫌というほどはつきり分かることがある。

(お似合いなんだ。……まず見た目からして、すっごい美男美女なんだもん)

ついそんなことを考えてしまう。第一、引き裂くことを考えたくなかったから、監視をしていたのだ。いや、その監視すら、怠っていたから。結果として当然のように時間は無情に進んで、運命のままに二人は出会った。それは勿論青子の責任で、この現在は当然のこと。それでも、拒みたいのだ。

はつきり言えば、蘭に嫌われなくなかった。そして苦しんでほしくなかった。

もうすでに彼女が大好きだったから。

「恵子……ごめんね。やつぱり青子、出来ないよ」

親友に向かつて、届かない謝罪をする。

ターゲットに必要な以上に近づくといつも青子はこうなってしまうのだ。当然点数も悪くなる。でも今回は、逃げられない。この任務がちゃんとできなかつたら、もう自分は、消滅するしかなくて。そしてそれはとても、怖くて怖くて、今にも叫びだしそうな、程なのに……思い切りが付かない。

結局朝まで考え続け泣き続けて、一睡も出来なかった。次の日はどうすることも出来なくて、父にも言っただけで学校を休んだ。真っ赤な目をした娘を、彼はひどく心配していたが、無理矢理仕事に行かせた。その泥棒を絶対に捕まえてねと念押しをして、笑顔で。

それから青子はしばらく布団にもぐりこんでいたが、昼近くに なってようやく体力の限界が来て訪れた眠気にすがるように身を任せた。

夢を見ていた。それは二人の恋人としての姿と消え行く自分の姿だった。幸せそうな微笑みに、染まった頬にうなされて目を覚ます。その直前に、どこかで聞いた軽い音と誰かが呼ぶ声が聞こえた気がした。けれど目を開けても勿論そこには誰もいなかった。

時計を見れば、軽く5時間は眠っていたらしく、部屋の中は既に薄暗くなっていた。完全に昼夜逆転だが、青子の目に映るのは自室である二階から見える暮れ始めた街の風景ではなくて、あの日の彼の笑顔や、親友と軽い口げんかをする半目の顔ばかりだった。

(快斗のマジックが、見たいなあ)

彼だったら今の曇天の心に簡単に虹をかけてくれるはず。

(……駄目だつてばっ)

二人が出逢ってしまった以上、会いにいけばいいのかもしれない。……けれど、新一を苦しめることになれば、快斗が苦しまないわけがなく、彼らに嫌われると思うと怖くてどうしようもない。あの日のことがなければ、きっと何も感じなかったはずなのに、思わぬ出会いが彼女を苦しめていた。

(……やだよっ新一君に手をかけるなんて、蘭ちゃんを苦しめるなんて出来るはずないっ)

壊さなければ、いけないのに……むしろ壊すのを喜ばなければいけないのに……そんな未来は、考えるだけで震えが走る。もう自分には彼らを傷つけることも、騙すことも出来そうにない。

改めて自分は、つくづく悪魔っぽくないと思う。ただ、そう思ったところで、別の存在になど、なれるはずもなく。

せめて二人が、もうこれ以上会わないようにさえ、出来れば。

「……蘭ちゃん、新一君」

掠れた声で青子が名前を呼んだときだった。

ピンポーン……。

玄関のチャイムが一階で響く。近所の人だろうか。それとも宅急便だろうか。はたまた得体のしれない勧誘か、いつかの可能性が、よぎっては消える。どれにしてもタイミングがいいのか悪いのか分からないが、とりあえず青子は上着を羽織ると階段を下りて、インターホンの前に立った。

しかし、青子の予想は全て外れていた。

「はい……」

「青子ちゃん。あの私、毛利です」

「え……ら、蘭ちゃん？」

澄んだ声に、青子は目を見開いた。

「うん。今日青子ちゃんが風邪って聞いたからちよっと心配になっちゃって。もしよかったらプリントとか預かってきたから、入れてくれないかな」

蘭の言うことは尤もだった。転校してまだ1ヶ月も経っていないのに、いきなり欠席では心配もされるだろう。一言言えば、それで蘭が来る辺りが、運命のようで一瞬体がこわばった。しかし。

(……これは、チャンス、かも……)

そう思いなおした青子は、インターホンの前で深呼吸をひとつした。

「うんっ、入って蘭ちゃん」

そして力強く頷いて、インターホンのスイッチを切り、鍵を開けに玄関へと走った。

「……おじやましま、あ、青子ちゃん!？」

普段から周囲に良く気が付き、目ざとい蘭である。薄暗い玄関から一歩歩き出すなり青子の様子を見て、悲鳴に近い声を上げた。

「だ、大丈夫。大丈夫だから……今お茶入れるから」

しかし、歩き出そうとした青子の腕を素晴らしい反射神経で蘭は掴み、そのまま自分のほうへと向かせた。

「……青子ちゃん……だつてこんなに……声も掠れてるし、目も赤いし……もしかして、泣いてた？」

「う……うん……」

真剣な口調の蘭をごまかすことは出来そうにないので、青子は素直に小さく頷いた。

「……風邪じゃなかったんだね」

「ご、ごめんね、蘭ちゃん。せつかく心配して来てくれたのに、こんなことで学校休んじゃつて」

泣いて学校を休むことが、そして嘘をつくことが、今更ながらに重罪のように感じ、青子は俯いた。

「何言ってるのっそんなになるまで泣いてたつてことは、青子ちゃんにとつてとつても苦しいことがあったんでしょう！？ 私でよければ力になるから……」

肩を掴まれて心配そうに膝を軽く折つて目線をあわせ、自分まで泣きそうになつている蘭を見て、青子は胸が締め付けられた。

(……無理だよ……)

こんなに優しく温かい人を、苦しめるなんて、どうやったつて無理だと青子は唇をかみ締める。

そんなこと考える自分すら、嫌になつて。

「蘭ちゃんっ」

何かを振り切るように勢い良く顔を上げた。

「……ん？」

少し驚いたものの、優しく聞いてくれる瞳はまるで自分の姉のようで、青子の頬が微かに熱を帯びる。

「……ありがとう。もう大丈夫なの……本当にもう、平気だから」

微笑んで言う。苦しめたくはない。なのに、これ以上青子が悩んでいたら、彼女は結果的にそうなってしまう。それも青子のせいでそれだけは嫌だった。

しかし、蘭はまだ心配そうに青子を見ている。

「……青子ちゃん、言いたいことははっきり言った方が」

「本当になんでもないの、大丈夫っ」

「そう……分かった」

諦めたのか、蘭はそれ以上深く追求しようとはしなかった。青子は蘭の眉が上がったことにほっと息を吐く。ただそれは傍から見たら、追求をやめられて安堵したようにも見えた。

「あがつて蘭ちゃん。お茶、飲んで行って」

「……ありがとう、青子ちゃん」

促されるまま、蘭は静かに答えてリビングへと入っていき、青子はお茶を出すためにキッチンへ向かった。

この青子の対応のせいで、二人の中に和やかに会話という選択肢が、消えてしまった。そして同時に、蘭からの大切な情報を聞き逃すことになるのである。

その後蘭は、青子の出したお茶を飲んでプリントを渡し、心配そうな顔をしながらもすぐに帰っていった。

だが、青子は暫く部屋には帰らず、一人熱いココアのカップを両手で握り締めて、ぼうつとリビングのソファに座り込んでいた。

今だ二人を傷つけることなんてできないというところで、考えが止まっている。いや、もはや考えすら放棄している。

(せめて二人共幸せになつてくれたらなあ)

まだそちらなから、二人を引き離すことは出来るかもしれない。運命に逆らうのは難しいかもしれないが、努力次第では次の運命の

相手がお互いに見つかるかもしれないのだ。

「……あ、そうだ、そうだよっ」

ようはあの二人が、別々の人とそれぞれ結びつけば、いい話なのだ。あの二人ならそれこそ選り取りみどり。二人が結びつくよりも幸福の量はぐつと落ちるけれど、二人は傷つかなくてすむ。

「……大丈夫……きつとこれなら、及第点、もらえるよね」

漸くたどり着いた答えに、青子は安堵したようにふつと笑った。けれどすぐまた、途方に暮れることになる。

「青子……新一君の連絡先……知らないんだっけ」

学校すら覚えていないのだから無理もない。

前途は多難すぎるほど多難であると青子は漸く自覚したのだった。

「あ……でもだったら、もしかしたら快斗に会えば分かるかも。あー蘭ちゃんに会えたのかどうか聞いておけばよかったなあ」

あのマジック少年が、快斗。それは否定しても完全には消えない可能性だった。しばし考え込んでいた青子はやがて晴れ晴れとした気分で顔を上げた。

「……よし、明日探しに行こうっ」

翌日、その思いを胸に、すっかり元気になった青子が、蘭たちと一緒にマジック少年を探しに行こうとしたのだが、その日は蘭は部活で不参加。そして園子も出会ったことは出会ったらしいが、彼女との関わりは当然分らないので、波風立てるだけの出会いの話を出すことはなく、張っている場所に快斗も現れなかった。

それは、運が悪いと言えば悪く、仕方ないと言えば仕方ないことである。

快斗が予告状を出したため、最後の期限としてショーをやっていた日、青子はショックで寝込んでいたのだから、もともとから出逢える

可能性は0%だったのである。

結局その次の日次の日も、諦めきれずに青子は街に繰り出したが、結果は同じだった。

単に外しているのではなく、3日連続でなぜかどこにも現れない彼に、もう仕方がないと諦めムードも漂っていた。

ネットで検索をかけてみても、やはり出現した様子はない。逆にわがままと呼べるような批判があつて、それもいささか驚いたのだが。

画像もなかった。あるにはあつたが、荒すぎて分からないか、人ごみにまぎれてぶれる手元しか見えないかどっちかで。あまり期待してはいなかったから落胆はしなかったが、溜息は漏れた。

恐らく、そういう形で盗撮するしか、彼が許さないのだろうと青子は結論付けた。

ただ、運命は上手くなのか、皮肉になのか、彼の類まれなる存在のためか、そう簡単には止まる気配を見せないのである。

青子が諦めた日は土曜日、それは件の怪盗の予告日だった。

14・最初が最後で巡って還る(後書き)

時間軸 一応書いておきます。

火曜日……蘭・園子活休み。新一と蘭が出逢う。青子はショックを受けて寝込む

水曜日……最後の快斗のショー。青子学校を休む・蘭が部活後見舞いにやってくる

木曜日……青子・快斗を探しに行く。蘭部活により欠席

金曜日……同じ

土曜日……予告日

15・土曜日の夜の美術館（前書き）

タイトルから分かると思います。キッドの予告日です。

青山先生の素晴らしい手腕には遠く及びませんが、せっかく書いたので上げます。

矛盾点へのご指摘お待ちしております。きっと沢山出てくると思いますので。

15・土曜日の夜の美術館

土曜日の夜9時54分。巨大な美術館の展示場には物々しい空気が溢れていた。

「いいかあつキッドのヤツは必ずここに現れるっ絶対に今日こそ捕まえてやるんだあっ!!」

「ハッ」「ハッ」

中森警部の声と、その部下達の声が、狭くないはずのホールに大音量で響き渡った。

今夜の怪盗キッドの獲物は、アース・シャインと呼ばれるビッグジュエル。手のひらに握ってもまだはみ出すほど大きなエメラルドで、その美しい輝きに魅せられる者は後を絶たない。当然美術的価値も大きい。きつと彼らにとつては、宝石そのものの素晴らしさよりも、件の怪盗が現れるということの方が重要なのだ。早い話、小さな石ころを盗むと予告しても、それが彼ならこの熱は変わらないのではないだろうか。そう思わせるほどの熱気が展示場内には充満していた。

そんな熱の入りまくった展示スペースから大分離れた出口付近で、制服に身を包んだ三人の青年達が、まるで部屋の温度を一定に保とうとするかのように醒めた目でそれらを見ていた。展示場には入り口が二つあり、彼らはここを固めるということ。警備の配置を断つたのである。そして、その理由は勿論、単に警備のためだけではない。

「……取り囲んで毎回逃げられてるんじゃないのかよ」

「中森警部には学習能力というものが著しく欠けているようですよ」

「違いねーな。熱血だけでどうにかなるもんじゃねーんだよあいつは」

「こそそと呟くように話し込んでいるのは、キッド逮捕に余念がない白馬と、新一である。」

「そんなにあの警部はんのすることが気に食わんのやったら、文句のひとつでも言つたらええやないか」

そして、そんな二人を見て呟きよりもやや大声で言ったのは呆れ顔の平次だった。ちなみに中森警部は既にここにはおらず、入り口から出て行った後だった。大方セキュリティルームに向かったのだろう。

「……あの警部は、オレらの事が嫌いなんだよ。指示も何も聞いちやいねー」

平次の言葉に答えた新一の声はまだ予告時刻前だというのに、疲れきっていた。

「勿論一応これでも出来る限りのことはしたんですよ。でもあの警部は他のところでは助言を聞いてくれても、展示スペースを警官で押さえ込むって言うスタイルは頑として崩そうとしないんです」

「結局、一番確実だって、毎度毎度頼を引っ張られるはめになんだよ」

「……さよけ」

見事な言葉の連携に平次はそれ以上言うことが出来なかった。

（せやけどここにホンマに来るんやるか、あの怪盗……）

平次がそう思つのも無理はない。

この展示ホールは美術館の2階。その上、入り口と出口があるが、現在重い鉄のシャッターで閉じられていて、開閉が可能なボタンはこの空間にはない。外の管理室の遠隔操作が必要なのだ。しかもそれ以外には出口となる窓もない。クリーム色の壁が一面を覆っているのみだ。

アース・シャインの他にも美術品が沢山展示されているこの部屋

は、窃盗防止のため、美術館の中でも特別に作られた、超強化セキュリティシステムに守られた部屋なのである。

しかも、1階からの階段は完全に閉鎖されているし、エレベーターもない。おまけに警備員の姿もホール以外にはないので得意の変装は使えない。

唯一使えるこの空間では、警官が二人一組で合言葉を紙に書いて決めたため、変装したとしてもすぐにばれてしまうのは確かだった。まさに超巨大ネズミ捕りのような空間にぬけぬけとやってくる怪盗がいるものなのか、平次は怪盗ではないので当然分らない。件の警部に言わせれば

『ヤツはなあっ盗むって言ったら盗むんだよっ』
と豪語するだろうが。

ところでこうして平次が現場をものめずらしそうに見ているのは訳がある。

服部平次はこのメンバーの中で唯一バイクの運転が出来る。そのため普段は追跡部隊としてキッドの翼を休めるためにか立ち寄る場所に控えていることが多い。逃がしてしまうのは勿論、彼の逃走経路がむちゃくちゃすぎて、道路交通法をまもっていたのでは絶対に不可能な場所を通るからだ。それでも毎回いいところまで追いかけるものだから、止められないのである。当然だが、彼一人ではなくて、警官隊を大勢引き連れて追うのだから。

また、探偵が数人集まればよりよい知恵が出せるが、平次はキッドの生マジックや変装にそこまで興味がなかった。勿論それは、クラスメイトの神業的マジックを毎日のように見ているからである。

それが今日はなぜ、ここに来たのかといえば

『テメーも一度くらい引つ張られてみる。予告時刻間際になったら絶対やられるからっ』

と新一に無理矢理引つ張ってこられたせいである。いわゆる逆恨みもしくは無理矢理の運命共同体と言うヤツだ。そしてその洗礼はすでにしつかり受けており、平次の頬はほんのりと赤黒い。しかし文句を含めて平次はそれを言うつもりはない。それで更に新一の機嫌が悪くなると、何が起こるかわからないのだ。大人への怒りはセーブするかわり、クラスメイト（同性）への怒りはその分二倍にも三倍にも膨れ上がらせる彼だけに、こういふときは余計な口は挟まないのが得策なのである。

それならせつかくだからその彼の見事な変装と言うものを、この目で直に見ようと決めたのだった

（大体頬つぺた引つ張られるくらいが何ぼのもんやつちゅーんじゃ）
日々剣道で痛い攻撃を受けているものからすればほとんどかわいらしいと思えるようなその行動に怒る新一に、見えないようにぶつくさ漏らす平次の隣で、白馬がじっと愛用の懐中時計を見つめていた。

「58……59……10時ですね」

直後。

しゅー！。通風口の隙間から微かな音が聞こえ始めた。彼らは予想外の展開にいささか平静を崩す。

「催眠ガスだっ」

「マスクの装着をっ」

誰かが叫んで直後警官達がマスクをつけ始める。警察にとって眠ってしまって取られると言うほど笑われることはない。誰もがその危機を脱しようと我先にとマスクを顔に当てていた。

その横で新一が微かに動いた。

「……本当にガスか？」

「いいえ、その可能性はないでしょう。彼の性格上これほど派手な音を立てるくらいなら……………」

白馬が全ていい終わる前に、急にその場に真っ白な煙幕が立ち込めた。

「なっ」

「やっぱり…………警察だけ巻くつもりだったのでしょうかね」
霧が晴れてくると同時に、平次が叫んだ。

「か、怪盗キッドやーーっ」

その10分前。

「あー、だりー」

ずりずり、ずりずり…………。

帝丹男子校が誇る探偵たちが捜査に加わると、それだけで仕事はやりにくくなる。それははっきり言って熱血中森警部には申し訳ないが、よれば文殊の知恵とかいうレベルではない。

上下移動は不可能になるわ、変装は見破られるわ、警官は簡単には動じないわ…………。

もろもろの経験をしつかりと生かして、毎度毎度パターンを変えてくる探偵たちに、さすがのIQ400も余裕をもてなくなる。かといって予告状を暗号にしたのでは、あの暗号が大好きな親友が関わってくるのは必至。かといってはっきり記してもまたその確率は高い。

結果として逃げられないジレンマに快斗は陥っていた。そしてま

た今回も、である。

最初こそ変装して警官に化けたものの、そうして移動できるのはフロア1階まで。仕方なくトイレに行く振りをして監視カメラをいじり、個室の天井にある換気口へと体をねじ込み、現在に至る。

「なんで天下の確保不能の大怪盗が、こんなところにいなきゃなんねーんだろうなあ」

通風口をはいずりながら、快斗は一人ごちていた。格好は警官なのだが、既に変装は解いており、もはや快斗以外の何者でもない。

「大胆不敵で華麗なはずが……、変装の名人のはずが……はあ」

脳ある鷹は爪を隠す。しかし、隠すも何も出す機会がないのではお話にならない。ただ、いつまでも愚痴ってはいられない。予告時刻まであと僅か。このはしごを上れば、ようやくこの狭すぎるスペースからも開放されるわけで、それは同時にショータイムの始まりを意味する。

本音を言えば、もうとっくに始まっていて欲しいのだが。

「……………よつと……………」

はしごを上り終わった快斗は、一息ついた。彼は勿論通風口を含めた展示場ホールが分厚い鉄のカーテンによつてとっくに封鎖されていることを知っている。だからあえて通風口からの出現を試みた裏の裏をかく作戦である。ただしその通風口は……天井に設置されているものだ。

(封鎖されていると言ったって、別に鉄の板で囲ってるわけじゃねーもんなあ)

きよろりと周囲をうかがいながら、快斗は思う。前科がいくらあったっていくらなんでもそこまで警察にする権限はない。釘で打ち込んでしまえば、当然穴が開く。美術館中の通風口全てにそんなことが出来るはずがないし、館長が嫌がったのを知っている。特に新

一だけならまだしも、常識人の探がいればなおのことこの可能性は低い。たとえ鉄のカーテンで仕切られていようと、そこに快斗の進入経路が生まれる。勿論そこを警官隊が警戒して固めていても、同じこと。

快斗はにやけた顔を一瞬にして消すと目をすがめ、一旦体を引っ込めて、展示場につながる穴に向かってスピーカーを置いた。そして懐からヘリウムガスが入っているビンのようなものを取り出してノズルを押さえた。同時にスピーカーのそのスイッチを押すとしゅーっという場違いに大きな音がする。

そして彼はその音に混じって一声叫んだ。『催眠ガスだ』と。快斗の声は勿論七色で無数。警官の声などお手の物。たとえその場にはいない相手だとしても関係ない。こういう場合、必要なのは誰かの一声。それだけで警官という組織は簡単に統制を崩してしまう。

そして外で目的が達せられたと思うと同時に、煙幕弾（ただし空気と同じ比率で混ざる激しいもの）を通風口の隙間から部屋の中央に向かってトランプ銃で撃ちこんだ。

実は通風口の隙間から流したのは、人畜無害のガス。最初から何故眠り薬にしないのか。それは、万が一に備えてガスマスクをつけているものにとって、その視界がそれほど広くないからだ。その視界が真つ白になってしまえば誰もがパニックに陥る。しかも、いきなり展示会場からもうもうと煙が吐き出されれば、これもやはりパニックになる。ついでに敷居を外してあらかじめ確認しておいた警官のいる位置に向かって、振り子のようなもので足を引っ掛ければ、見事にこけるのだ。快斗の位置は見えないので、何がなんだかわからないという展開になる。

しかしどうなったにせよ全員目は開いている。………これが大事なのだ。催眠ガスなどで全て眠らせてしまったら、簡単ではある

がつまらない。せつかくめつたに出来ない彼も含めて3人も探偵がいるのだから、眠ってもらっては困るのである。

（興味がないというのなら、強引に興味をもたして差し上げましょう）

やっかいな敵が増えるのは快斗にとっては困ることだが、その名にはふさわしいのだ。

あえて直球勝負を申し込んで、燃えてこない服部平次ではないことを、快斗はちゃんと知っていた。

クラスメートとして、友人として、……怪盗として。

そして騒ぎが収まる前に、快斗はすばやく通風口を開け、サーモグラフィのマスクを被ったまま難なく部屋の中央へと進み……暗闇の中で警官の衣装を脱いだのだった。

特にこった細工もない、暗証番号付きセキュリティつき防犯ガラスなど彼にとっては単なるガラスでしかない。ほんの少し開けるのに時間がかかるだけ。しかもそれは、本当に比喻ではなく数秒のこと。なんせ、コードを読み取って開けてしまうのだ。事前の調査の成果である。

アース・シャインを手におさめながらちらりと見れば、やはりとつかかなんというか、新一と探の姿はなかった。これほど警官達がいる中で、ついでにわざわざ腕や足に触れながら歩いている時点で、パニックを起こすなど言う方が無理な上、宝石に向かって煙幕弾を投げつけたために一旦離れた警官達は右往左往しているのだ。その

結果白い煙の中キッドだけが動ける。まさに、サーモグラフィさまさまである。

煙幕が空間に広がって徐々に晴れてくる。それと同時に警官達がわらわらと宝石ケースに向かって動き始めた。

「待てキッドっ」

警官達のそんな台詞がひどくこっけいに聞こえる。

(待てと言われて待つバカいませんってー)

心の中で返すと、キッドは優雅に一礼した。

「それでは今日はこれにて失礼させていただきます。皆様お怪我は早めに治療なさったほうがいいですよ」

したり顔で言いながら、警官に変装し、フロアを後にしようとするが、それを阻むのはこの鉄のカーテン。勿論、怪盗にはそれも了承済み。リモコンのスイッチを押して、簡単に開けてしまう。入ってくる時にこうしなかったのは勿論油断させるためだ。

けれど、まだまだ彼にはしなければいけないことがあるのだ。

「オイ、オレ等を巻けるでも思ってたんのか、あれで？」

廊下に出た途端、睨みつけてくる3対の目。

「……これはこれは探偵の皆さん。シヨールは気に入っていただけなかったようですね」

「君にしては、少々浅知恵だったのではないですか？」

「……………」

その問いにキッドは不敵に笑むだけだ。……これは、いろいろな意味で堪える。

「……宝石は盗らせてやったが、このまま逃がすつもりなんかねーからな……キッド」

「では、早々に退散するしましょう」

そしてキッドは、新一のサッカーボールが放たれるいつものよう

にぼんつと軽い音と共に身を翻して、消えた。

もとより新一も、この美術品が所狭しとならぶ空間内でサッカーボールをけりつけるつもりはなかったので、すぐに足を戻す。

「……………工藤君。どうします?」

「決まってるだろ。服部、お前はバイクで逃走経路前に待機、オレは屋上。白馬は一応こいつらの合言葉の確認っ」

「……………はいはい……………」

飛び道具を持っている新一が、いつも屋上から追いかけるのを、探は良く知っていた。なにせ相手がハングライダーを所持している。あのマントが大空を羽ばたく翼になるのだ。溜息をひとつだけつくど、白馬は警官隊の中にもぐりこんでいった。キッドがまた煙幕の中に警官として潜りこんだ可能性があるからである。

彼の場合、可能性は一つ一つつぶさなければならぬのだ、非常にやっかいなことに。

15・土曜日の夜の美術館（後書き）

お読み頂き本当にありがとうございました。

16 子供の時間と大人の時間（前書き）

お見苦しいもの再び……。申し訳ありません。一心頑張ってるんです。これでも。

16 子供の時間と大人の時間

さて、その頃キッドは、警官隊の変装で屋上へ続く階段を駆け上がっていた。

「……警官を一人もフロア以外に配備させないのが、仇になってるよな」

現に誰も自分を追ってこない。

廊下に電気がついていなくたって、夜目の効くキッドには何の障害にもならない。逆に、暗闇になれていない警官がいても邪魔だし、それが一人もいなければ変装すればすぐにばれる。そう考えた新一が、中森を決死の覚悟で説得したのだろう。しかし、その防犯カメラをいじってしまえば、逃げるのが逆に大変たやすくなる。

鍵など彼にとってはあってもなくても同じであるし、非常階段の裏に隠れていた警官の意識を奪うこともたやすい。

怪盗というものは事前準備を怠ってはいけないのである。

それでもきつとたつた一人だけは、追ってきているだろう。親友にして探偵の彼だけは。

「……そーじゃなくちゃ、面白くねーんだけどなっ」

そして屋上の扉を勢いよく開けると同時に空を見上げた。

満月である。

雲ひとつない夜空に、まん丸な月がまるやかな明かりと共に浮かんでいる。しかしそれを堪能している暇は、ない。今夜の空に、無粋なヘリコプターはいないけれど。

「さて……」

キッドはおもむろに胸から取り出したアース・シャインを月にか

ざした。緑色の光がキッドの顔に複雑な模様を形作って映り込む。

しかしその僅かに期待を浮かべた表情は一瞬にして落胆に変わった。

「……………またハズレか」

もう何度この瞬間を繰り返しただろう。今までの努力が全て無駄だと思える唯一の瞬間だ。

だが、落ち込んでなど、いられない。

背後の僅かな気配に気を引き締めてさっと体を翻した途端、一瞬前まで自分がいた場所を、驚異的な速さでサッカーボールが飛んでいく。何度もした体験とはいえ、少々呆然となる光景だ。

「……………どうせそれにパンドラはなかったんだろ？ とつとと返せよ」
そんな声が、屋上に響き渡った。振り返るとそこに工藤新一が立っていた。

「……………相変わらず荒っぽいですね名探偵。ご名答。これはお返ししましょう」

たとえどれほどの時価があろうとも、キッドにとって、快斗にとって、もはや何の意味も持っていない宝石が躊躇いなく白い手袋から離れて回転しながら宙を舞い、月明かりに照らされて、複雑に光を反射しながら、探偵の手の中へと狙い済ましたように収まる。

「……………警部は？」

「白馬が連絡つけてるさ。お前が細工したものの全て、もう通常に戻ってるぜ？」

「……………そうですか」

動揺などしない。もともと分かりきっていたことだから。代わりに彼に向かって微笑む。

「今回もまた、引き分けですね、名探偵」

「さーて、そいつはどうか？」

新一が不敵な笑みを浮かべるとほぼ同時に屋上の扉が巨大な音を立てて開いた。直後ばたばたと駆け込んでくる沢山の足音。

「キッド、貴様の行動は全て予測済みだ！！　ハンググライダーで飛び立つ前に逮捕してくれるー」

中森警部の拡声器による大声が、美術館一杯に響き渡った。

（予測してんだったら、監視カメラのプログラムぐらい、確認しとけよなー）

大勢の警官が現れるぐらいで快斗のポーカーフェイスは崩れない。

むしろ彼の側にいる新一の方がかなり苦い顔をしていた。

（警官隊が一斉に押し寄せたら、絶対にヤツをとり逃がしちまうっ）
結論から言って、熱血漢の実直警部は、全く嬉しい助っ人ではない。

そもそも新一はキッドを捕まえたところで警察に渡すつもりはない。立場上彼を追い詰めるけれど、それはあくまでも探偵としてのこと。第一捕まえる権限もない。殺人も犯さない、誰も傷つけない、何より絶対的に信頼している彼は、余計なことに気を回さずに頭脳戦に没頭できる絶好の獲物。勿論捕まえるに越したことはないが、あえて言うならじつくり味わいたいメインディッシュなのである。

しかし中森警部にとってはそういうわけにはいかない。警察を散々コケにする怪盗を、今度こそ捕まえんと血眼になっっている彼は常に全力投球。当然探偵と怪盗の頭脳線は中止となり、警察と怪盗の真剣勝負に所詮高校生の探偵は身を引かざるを得なくなる。しかし、その結果は新一が見る限り一度として変わったことがない。

そこまで考えが及んだ新一は、ハツとして顔を上げた。月光を受けてシルクハットを被っても隠れていない彼の口元が僅かにしかし明らかに引き上げられているのを新一は確かに見た。

（んニヤロっ）

まんまとはめられたらしい。

無線やカメラを勝手にいじられたことで激昂した警部が、飛び立

つキッドを止めようとほぼ条件反射でここに来るのは目に見えている。ということは、怪盗がここへやって着たのは、彼との勝負を楽しむためではなく

この追いかけてこを自らTHE ENDにするため

「では、中森警部、ごきげんよう」

最後まであくまで紳士的に、しかしそれが余計中森警部の怒りを買うと分かっているキッドはやけに丁寧に一礼し、一瞬にしてハンググライダーの骨組みを広げマントを翼へと変える。

「やつを飛ばすなっかかれーっ」

そして、彼の思惑通りに慇懃無礼さに堪忍袋の緒がぶち切れた中森警部が、自らを筆頭に怪盗キッドに飛び掛っていく。

それはもう嫌というほど何度も見たおなじみの光景。

「はあ……」

恨みがましく怪盗を睨んだ、その瞬間。

カツ！！

探偵が何も出来ずに溜息をつくその前で閃光弾が炸裂し、辺りが光に包まれる一瞬前、中森警部が地面を蹴ったのが新一にも見えた。それを最後に、彼は目を閉じる。無駄に動きを止められる筋合いはない。

「おのれキッドーッ」

中森警部の怨念のこもった声をBGMにまぶたの裏の強烈な朱色が消えて、辺りの騒ぎが収まった時、新一の前にあったのは折り重なった青と白の警官の群れだった。

頭痛を堪えて周囲を見渡せば空には真っ白な小さい三角形が浮んでおり、屋上に続く扉が不況和音を立てて微かに揺れていた。

「中森警部……アレはダミーです。彼は下に逃走しました……僕は

これから追いますので」

一応声を掛けてみるが、一番最初に飛び込んだために最も悲惨な
ことになっている警部にはきつと聞こえてはいないだろう。警部の
トレードマークの灰色の服は腕一本が見えるのみだ。

だが多分、今更追いかけたところで無駄だろう。どうせ警部は一
網打尽にするために展示フロアにいた部下を全員引き連れてやって
着たのだから連絡の取りようもないし、一階と二階をつなぐ階
段の遮断は既に解除されているから、紛れ込まれたら新一よりもな
お速い足を持つキッドには絶対に追いつかない。

それでも背後から湧きおこるキッドコールを背に、階段を駆け下
りながら、新一は壊れそうな勢いで無線の通話スイッチを押した。
「……服部、キッドは外に出た。けど、例のビルに来るはずだから
あと頼むなっ」

(ちよろいちよろい)

一方こちらは、現在空中散歩中、別名逃走中のキッドである。文
字の並びが間違っているような気がするのは、気のせいではなく、
口元に引いた笑みはキッドなのか快斗なのか線引きが微妙なほどこ
機嫌のせいだ。後ろの方でパトカーのサイレン音がどんどん高く小
さくなっていく。ドップラー効果というものがあるおかげで後ろを
見ないでもいいのはありがたい。

(なぜか新一は妙に最後の詰めが甘いんだよなあ)

最高のライバルを騙せたその高揚感は何者にも代えがたい。

つまりキッドは、あの閃光弾にまぎれて本当に夜空へと飛び立っ
たのだ。いつもいつもダミーなり警官に化けるなりして、屋上から

飛び立つのには何らかのフェイクを仕掛けているから、疑り深い探偵は今度もきつとダミーだと思っはずと考えて。その裏をかかせてもらった。

「わりーな。今日はちよつと遊んでる暇はないもんでね」

彼が最後に睨んで来たことに、見ていなくても気付いていたキッドは誰も聞いていない謝罪をした。

彼だつて探偵としての新一と勝負をするのは密かに楽しみなのだ。しかし今宵はあえてそれを蹴った。

快斗はテールランプの周囲に見当たらない、とある人気のないビルの屋上に、ゆっくりと旋回して降り立った。

その途端。誰もいないはずのその場所にある気配に苦笑する。

(やっぱ一筋縄ではいかねーよなあ)

「待つとつたで、怪盗キッド」

コンクリートの壁の影に隠れていたらしい彼が、すつと姿を現す。心なしか眉間に皺が寄つていような気がする。逆光と肌の色のせいで正確には分からないが。

関西弁の色黒男、彼もまた名の通つた探偵だ。

「おや、これはこれは服部探偵、お早いお付きで」

優雅に礼をする怪盗を、平次は鋭い眼光でにらみつけた。

「ぬかせつ逃走経路にいつつもオレが張つとるんはしつとるやる。

大体今回変装はどうしたんやつ！ オレはなあつ久つ々に現場入つてお前が誰に化けてくるんかとめちやめちや楽しみに待つとつたんやぞつ！！」

最後の方は半ば八つ当たり＋熱烈ラブコールである。怪盗はポーカーフェイスの裏であきれ返りながらも表にはそれを微塵も見せなかつた。

「……どんな手で来るかなんて、決まっていますよ。特にそちら

には手ごわい探偵が3人もいらつしやるのでね。鉄のシャッターが下りていれば、ああもなります」

「……ちゆうことはや……オレも数には言つとるんやな？」

「当然でしょう？ 次はもしかしたら変装するかもしれませんよ……では」

直後、辺りにももうもうと煙が立ちこめ、油断していた平次は盛大に咳き込んだ。そしてそれが晴れたとき、空にはキッドの真っ白なハンググライダーが浮んでいた。それを見て平次はこぶしを握り締めて大声で宣言する。

「上等やつ今度は絶対捕まえたんてー……」

(相変わらず平ちゃんは熱いよなあ……)

怪盗がすぐ側のタンクの裏でにやりと笑ったことなど知らず、服部平次はハンググライダーで飛び立った怪盗を追いかけるため、全速力階段を駆け下りていった。

「ほんと、すげーガッツ……」

頭に血が上った相手に、ダミーかどうかなんて分かるはずもない。服部平次が本当の意味で脅威にならないのは、冷静さをその熱血が奪い取ってしまったことが往々にしてあるから。

そして煙幕を張ってタンクの隅に隠れた怪盗にとっての本当の勝負は実はここから。

今までは、ゲーム。勝つに越したことはないが、引き分けでも負けでも、まあ次がある。

しかし、勝負は、負けられない。それは……死を意味する。

ちなみにその日、あれほどファンだと騒いでいた園子はどこにいたかというところ……当然大勢の野次馬の中だった。警察がキッドが変装防止のために近づくのをも止めても、ファン熱でラインぎりぎりまで押し寄せてくるのである。当然そこからはキッドと警察の攻防までは見えないが飛び立った彼を、彼女はばっちり見ることが出来てご満悦だった。

「キッドさまー頑張ってー!!」

「園子……ちよつと恥ずかしいよ……」

「あーそうね、あんたは工藤君に勝って欲しいんだもんね」

「ちよ、そんなんじゃないってっ！それにそんなに大声出さないでよおっ」

口ではそういうものの、蘭は今までの勢いはどこへやら、急に顔を真っ赤にして慌てだし、園子を止めること叶わなかったのだった。

警部がいない夜は、なんだか長く感じる。青子はふつと息を吐き出した。予告時間は10時。その後も二時間は逮捕のための攻防戦が繰り返られるのが常だから、帰りは間違いなく深夜を回る。つまり、彼に今日会うことは不可能。夕ご飯も食べてしまい宿題もそろそろ終わる。そうなってしまえば、後はもう風呂に入って寝るだけだ。

しかし、寂しさだけが青子を苛立たせているのではない。

今日も例のマジシャンに会えなかった。理由は分からないが、これで3日連続で誰も見ていない。ネットで検索をかけてみても、やはり出現した様子はない。逆にわがままと呼べるような批判があつて、それもいささか驚いたのだが。

「バカ……バカキッド」

八つ当たりのように呟いても、勿論誰にも届かない。苛立ちは募る一方だ……。

蘭達は今頃間近で見物しているのだろう。かの奇術師の見事な腕前とやらを。父が頑張っているのにそれをあざ笑う怪盗にばかり当たるスポットライトの照らすまま。

そう思うと、なんだか腹が立つてきた。考えれば考えるほど理不尽である。大体盗んだものを返すというのはどうなのだろう？ なぜそんな理解不能な行動をする？ それも盗んでいるのは相当な美術的価値のあるビッグジュエルばかり。

警察の備品を壊し、ビルの窓を割って、用意周到な準備と労力をもって手に入れた宝をなぜ自分の物にしないのだろうか？

平成のルパンだとか言われているけれど、その犯行を見ているとまるで盗むのが楽しいだけのようにはしか見えない。青子は頭を抱えた。昔から考える時のくせなのだ。怪盗の思考も、嗜好もさっぱり分からないが、確かなのは考えるだけ時間の無駄だということ。はつきりいいえばデータ不足。紳士的なのに、秘密主義過ぎるのだ。そして最終的に、正体現世この愉快犯！ という怒りに変わる。

……話が進むはずがない。

はあともう一つ溜息をこぼすと、青子はシャーペンを握りなおした。

16 子供の時間と大人の時間（後書き）

野次馬、美術館の場合はないことが多いんですが、もう今更直せないんで強行突破します。なんか好きなくせにいろいと抜けているアホです。

己の力量を分らずに書いて玉砕しているのと、最初から考えないでやるのと天秤にかけて前者取りました。ほんとに……お付き合いありがとうございます。

17・舞台裏のマジシャン

翌日の日曜日。青子は眉間に皺を寄せた不機嫌顔で街を歩いていた。怪盗キッドが逃げて父の機嫌は悪いでは済まず、どん底まで落ち込んでいる。初めてだったから彼の分まで怒りが増して、怪盗キッドと言う泥棒がいかにかっこいいと言われても、青子には理解しがたい存在となっていた。こうして出かけているのも夕食の食材を買うのを兼ねての気分転換をと思っただけのことだった。決してそんなつもりはなかったのである。

時間は午後4時20分を少し回ったところ、そして彼女がいる場所は、江古田駅前。

青子はそのときになるまで、自分が今運命の歯車をひとつ、噛み合わせてしまったことを知らなかった。

「それでは今度はこちらのレディにご協力をお願いしましょう……よろしいですか？」

そんな声が聞こえて、青子はふと表情を緩めて周囲に眼をやった。聞きなれた声だったような気がしたのだ。見渡せばすぐに、駅前の広場に結構な数の人だかりを見つけた。何をしているのかは良く見えないが、時折、紙ぶきらしきものが、人だかりの合間から飛び出してくる。そして、割りと長身らしいその中心人物の頭は好き放題に跳ねまくっているくせつ毛に青子は気が付いたら引き寄せられるようにふらふらと歩きだしていた。

「う、うそっ私ずっと手握ってたのに？」

驚いたような声が聞こえて来る。

「お気に召しましたでしょうか？」

「……………かい、と」

近くで声を聞いてますます確信を持つ。人垣の人たちを見ると皆が楽しそうに笑っていた。

大勢の人を笑顔にしているそのマジシャンは、ひとときわ楽しそうにマジックをしていた。

「どうぞ、今日の記念にお受け取りください」

一人の女性の頬が染まっている、その目の前に一輪の花を差し出しながら微笑んでいる。

状況は彼のマジックにひとつの区切りがついたところだ。そして、きつとこれが彼の見せ場であり、客を引き込むテクニク。

けれど……………青子にとってそれは、何度も何度も思い出した光景だった。そしてたった一つ、人間界で自分を励ましてくれたものでもあった。

足元の地面が、ふいに、揺れた気がした。

「かい…と……………」

「尤も貴方の前ではこの薔薇すらもかすんでしまいますね」

「……………あ、ありがとう」

その態度は、より紳士的で、見るものを一瞬にして自分の世界に引き込む。

まるであの日の、自分のように少女は瞳を輝かせる。

それだけで、それだけのことなのに……………こんなにも……………

大勢の拍手が遠のいていく。お辞儀をする彼の姿がぼやけていく。

(快斗の、得意技……………)

そう、出逢ってすぐに、彼はそうだった。自分の口で。

それ以上は考えられなかった。

当然の事実打ちのめされる自分が滑稽だと思つのに、それを笑うことができない。

「やだ、よ……こんな」

もう、それだけを呟くように言うのが精一杯。

次の瞬間青子は大観衆に背を向けて走りだした。

なぜそのマジック少年が、巷に現れるようになったのか、そもそも順番が逆なのだと、知らない青子は、一目散に暮れなずむ夕闇の中の人ごみを縫うように駆けた。人にぶつかりそうになって揺らぐ視界を何とかしようと瞬きをしたら、鮮明になる代わりに頬を伝う冷たい水。乱暴に手でぬぐって更に走る。道行く人がみな、尋常ではない青子の様子に、驚いている。

ただ、一刻も早く誰もいない場所に行きたいと願う彼女は周りの視線など、見えない。

「……お、お楽しみいただけましたでしょうか？ それでは今日はこれで失礼しますっ」

ショーの最中から彼女の存在に気が付いていた彼が、区切りがついたのをいいことに誰の反論も許さずに強引に姿を消して、何時ものように後片付けをすることもなく、全速力で彼女を追いかけてきていたことを知らない。

「青子っ青子っあおこおっ!!」

ポーカーフェイスをかなぐり捨てて、必死に何度も呼んでいた名前も、エンドレスリピートする彼の声を聴いて、打ちのめされる彼女には届かない。

彼はその日、結局それきり青子を見失い、捕まえることは出来なかったのだから。

そしてその夜。快斗は、盛大に壊れていた。

「くっそうっ」

「もうやめとけよ快斗、飲酒厳禁だぞ、この寮」

今日初めて名前を呼んだというのに快斗は全く意に帰さない。

「わあつてるよ。けど、青子がそこにいたのにつ」

それどころか何が分かっているのだから、快斗の言葉は全くとんちんかんだ。彼の周りにはチューハイの缶が狭い部屋の中で転がれる限り盛大に転がっているものでそれは仕方ないかもしれない。

それにしても、と新一は思う。甘い物好きな快斗は、当然ビールよりもチューハイが好きだが、今日はレモンチューハイ、ライムチューハイ、グレープフルーツチューハイという彼にしてはすっぱいチヨイスが、普段の数倍彼の気持ちであらわしているのは皮肉だと「……本当に青子ちゃんだったのか？もしかして……毛利さんじゃなかったのか？」

一応聞いてみると、酒に酔って真っ赤な顔が怒りを倍増して言い返してきた。

「オレが青子を見間違えるかよっ」

「……………」

自信満々すぎて、新一はかける言葉を見失った。

「くっそーなんで逃げんだよ、青子のヤツーーー」

快斗はぐいっとチューハイをあおり、意思を込めながらもどこか空ろな目で天井を睨んでいる。そろそろ本気で止めさせないと、明日支障が出るだろう。今までのように付き合いで飲んでいたのとは訳が違う。こんな快斗は見たことが無い。かなりピッチが早くて、転がった缶の量を見ても、相当な量のアルコールが彼の胃におつまみの仲介もなく流れ込んだのは確実だ。勿論度数にすれば大したことはないのだが、彼らはまだ未成年である。本当ならば止める止めないの話ではない。しかし、そこを引つ張り出すと長くなりすぎる

ので、今回は止めておこうと新一は結論付けた。

「……会って、どうするんだよ？」

代わりに持ち出した単語は、要領を得ず、快斗の手を止めさせるには効果覿面だった。

「え……？」

「だから会って、どうするつもりなんだよ、お前は執拗に追っかけてるみてーだけど」

「……マジック見せる！ それから、話す！！」

「……バー口。デートって言うんだよ、それ」

今度こそ、快斗の動きは完全にとまった。すかさず新一は、その手にあつたチューハイを奪い取る。

中身はほとんど入っていないので零れる心配は無い。しかし彼は全くそれに対しては反論してこなかった。

「ちよつと待てよ、お子様青子とオレがどうしてデートなんかっ」

「……お前まだ無自覚だったのか？」

「……は？ なんのことだよ……オレは……オレはただ……」

快斗は行儀悪く立てていた片足はそのまま、伸ばしていた足を自分に引き寄せた。

「……なんだよ……」

「笑って……くれないかって、思っただけだ……」

ぼつんと呟いて、引き寄せた足の隙間に顎を入れて呟く。いわゆる落ち込みモード究極である。

「……青子、泣いてたんだ……なんでだか、分からないけど。いくら酒飲んでも、あの顔が消えねーんだよ……」

小さな声には余裕のかけらも無い。快斗がこんな風に落ち込むのを、新一は初めて見た。殺人を目の前で止められなかったとか、パンドラが見つからなかったとか、そういう理由で落ち込むことは多々あっても、そのときは無理矢理明るく笑っていて心配になったほどなのに。

青子という少女はあの僅かな時間の中で快斗の何かのネジを確実

に動かして、そして風のように去っていったのだ。自分ですら時々、あの笑顔を思い出していて、だからあの少女に会った時には驚いたものだが、それでも彼女のほうが大人っぽくて、青子が大人になったらこんな感じなのかとつい想像してしまったり……いや、毛利さんのことはどうでもいいんだどうでも。

それかけた話題を、新一は頭を振って追い出した。目の前にはまだ呻いている快斗がいる。彼を何とかすることが何よりも重要なのだ。

「……きつと見つけられるって、青子ちゃんは快斗のマジックが大好きみたいだったし」

「けどあいつつオレのマジック見て、泣いてたんだぞっ」

「……は？」

予想外の言葉に新一は瞠目する。しかし、快斗は実は泣き上戸だったらしく、新一に飛び掛らんばかりに抱きついてきた。女性でも遠慮したいが、男なんてもっと最悪だ。そう思っている彼が、彼の背中をゆっくり撫でたのは、それが親友だったからに他ならない。彼がそういうことを許せるのはきつとあともう一人だけだ。

「……快斗、大丈夫だって、きつと何か別の理由があつたんだって」

「う……青子お……青子……なんでだよ」

「必ず見つかるから、見つけて見せるから、な？」

「どーやってさ……自慢の推理力があつたって、無理だろ」

酔っている割に反論だけは一丁前である。新一は内心溜息をつきながらも、思いついたことを言った。

「……毛利さんと……鈴木さんに聞いてみんだよ」

「なんで……蘭ちゃんたちに？」

ぴくりと新一の頬が引きつる。その理由が自分でも分からないまま、新一は言葉をつむいだ。

「……女子の情報網ってのは、案外侮れないんだよ。しかも、自分そっくりの女を捜してるってなったら、彼女を連れて歩いて聞いて回るってことも出来る」

「……どーしてそんなこと言い出すのさ？　ずーっと女嫌いだったのに？」

胡乱な目の快斗が、顔を上げて睨んでくる。何でといわれて新一は、一瞬考えたあと至極当たり前の答えを出した。

「……………お前がこうやって泣くからだろうが……………」

工藤新一、高校生探偵にしてフェミニスト。しかしてその実体は、女嫌いで親友には結構甘めな、女性が大好物の類の青年だったりする。勿論、快斗が壊れない限り、新一がこうなることもないのでそれを知る人間は今のところ居ない……………。

17・舞台裏のマジシャン(後書き)

話にもある通り、未成年の飲酒は法律で禁止されております。おり
ますともつ。

18. いったいどの童話なんだか

翌日の放課後、快斗は二日酔いなど諸共せず、新一と並んで江古田女子校の正門前で待っていた。行く人行く人勿論全員女子であるが、彼らを見て、一方は工藤新一ということに驚きつつ、もう片方のそっくりさんは誰なのかと目を瞬かせ、しかしやがて噂のマジック少年だと気が付いて、無言でマジックを期待する、もしくは工藤新一に握手を求めるといふ、2パターンの行動に落ち着いていった。そのときに快斗とは血が繋がっていないと新一が説明するのだが、彼女達の正直な関心はそこではない。待てども待てどもマジックが始まらないので、結局彼らの前で立ち止まる生徒は後を絶たず、その場にはどんだん人だかりが出来ていく。

しかし、快斗は今日ばかりはその目線に気がつきながらも無邪気な笑みを見せることはなかった。自分のマジックのせいで人を傷つけてしまったかもしれないという疑惑の前に、それが出来るほど快斗はお人よしではなく、あいまいに笑ってごまかしている。

「なー新一……別に一緒に来ることなかったんじゃない？ 嫌いでしょこういうの？」

「あ？ ならオレは帰ろうか？」

握手の波が途絶えた隙について、快斗がこそそと問い掛けると新一の目が剣呑に光った。しかし実は新一も、なぜ自分がこんな不機嫌になる中で彼についてくる必要があるのか、怒る裏で分かっていた。たとえ自分が。

「まあそもそも新一が行くって言ったんだっけ……」

そう、だからただ当然のように一緒に行くつもりになっていた。良く考えればおかしな話だ。だが、青子の様子が気になるのは本当で、その子によく似たあの少女にも会いたかった。理由は今だ不明だが、どうせ快斗がその少女の話ばかりするからこんなに気になっているのだと、新一は一人で結論付けていた。

「…………あのーもしかして、快斗君と新一君？」

「あ、園子ちゃんっ！」

陽気な声に新一が振り向くと、嬉しそうな快斗にびっくり顔の園子が駆け寄ってくる場所だった。とっさに目を動かすと、あの日のように隣には長い黒髪の彼女がいた。常に一緒に行動している親友なのではと思っていたので、新一はほっと安心する。いや？ 何でオレが安心しなきゃいけない？

「どうしたの、こんなところで？ すっごく目立ってるじゃない」

園子の声に我に帰り彼女に向かってかすかな笑みを向けた。商売道具よりもほんの少しだけ穏やかなものだ。

「ああ…………実は、人を探してんだ」

「…………人？」

蘭がいつものまにか園子の隣に来て、首をかくりとかしげた。そんな姿も彼女がやるとなんと魅力的で、周囲の空気が一瞬変わる。その場にいる新一も動けなくなっていた。ただし、快斗はそれよりも重要任務があるためかそんな蘭に惑わされることなく、逆に空気を打ち破るように蘭に問いかけた。

「…………あのさ…………ちよつと変なこと聞くけど、蘭ちゃん。君をもうちよつと幼くしたような、そんな女の子…………知らないよね、やつぱり…………」

自分でも変なことを言っていると思ったらしい快斗は勝手に自己完結させてしまった。しかし目の前の蘭は怪訝そうに彼を見たのではなく、むしろ驚いたように目を数度瞬かせている。

「…………え、それって？」

「知ってるの？」

少し戸惑ったように新一が問い掛けた。

「…………知ってるわよ。蘭そっくりで、けどちよつとだけ子供っぽい女の子でしょ。それってこの前話してた子なんじゃない？」

快斗はポーカーフェイスを作っていたが、その裏では楽しそうな

園子に拍子抜けしているのが見て取れた。新一とてまさかこんなに早く知り合いが見つかるとは思ってもしなかったのだ。

「あ、うんそうだけど、なんで二人が知ってるの？ 中学生のはずなんだけど」

「その子の名前……青子ちゃんでしょう？」

蘭が新一に向かってゆっくりと問い掛けると、彼はそれ以外に仕様がなといった仕草でこくりと頷いた。

園子が腰に手を当てて、呆然としている快斗と新一を交互に見る。「なーんだ。やっぱり青子ちゃんだったんだ。だったら呼んできてあげるわ。ちよつと待ってて」

そして3人が止める間もなく、園子は走り出して行った。

快斗と新一は、『呼んでくる』という単語に、二人して思わずアイコンタクトを取ってしまった。しかし、聡明な二人には、その意味がすぐに分かった。すなわち『青子はこの学校にいる』という結論である。

その後の納得した快斗と新一の行動はまるで正反対だった。新一は急に手持ち無沙汰になったように空を見始め、快斗は爛々と輝く目で園子の消えていった後を見ている。……もはやポーカーフェイスも何もあつたもんじゃない。

「あの……工藤君。どうして二人は青子ちゃんを探しに？ それに知り合いのはずなのにどうして年齢も知らないの？」

蘭が新一の側に数歩近寄って、小さな声で問いかけてきた。新一は慌てたように首を戻す。

「あ、ああそれは……これからわかるよ。青子ちゃんがくれればね」

「じゃあやっぱり快斗君が青子ちゃんに会いたいだね」

言いながら、校舎から目を離そうとしない快斗を見ている。その仕草は可愛らしいはずなのに、なぜかいらいらしてくるのだった。

「うん……まあ……」

新一があいまいに笑うと、蘭が振り返った。

「……どうしたの工藤君？」

その聞き慣れた名前に、非常な違和感を持つ。警部に、教師に、先ほども何度も何度も呼ばれているのに……。だが何より快斗が既に呼んでいることが無性に気に食わない。声も似ているから、だろうか。だからそんな普段の彼ではありえないようなことを、言ってしまったのだ。

「あのさ……もしよかったら、いつまでも他人行儀なのはなんだから、オレ等も快斗みたいになら、下の名前で呼び合ってもいいんじゃないか？」

「いいいの？ 私なんか？」

大胆な提案に蘭はあからさまに赤くなって慌てた。……可愛い。それしか新一には形容詞が思いつかなかった。

「い、いいつむしる蘭になら名前呼ばれたいかつ……ら……!？」
言葉が脳を経由しないまま、飛び出していく感覚にまかせつい呼び捨てで呼んでしまった。今更ごまかそうにも、もう無理である。謝るべきかどうすべきかと新一が蘭を見ると、彼女は先ほどよりも赤くなって俯いていた。

「あ……えっと、じゃあ……その…私も…新、一、でいい？」
「つつ」

肯定の返事すら、出せなかった。彼女の愛らしい声で呼び捨てにされ、見上げられることに自分でも信じられないくらいの衝撃を受ける。そして同時にそれだけで有頂天になっている。快斗があの時、気持ち悪いと表現したのも分かった。確かに、一度そう呼ばれたら、もうあんな他人行儀に呼ばれたくは無い。

（オレは……蘭に会うために……）

快斗の問いにあっさりとな得できる答えが、そこにあつた。他人のことには鋭いくせに自分のことにはやけに疎い探偵である。

ちなみにその後しっかりと携帯電話の赤外線通信をし、二人は連絡手段を確保したのだった。

放課後の青子は、よく2年B組の教室で読書にふけていた。今日もそうで、集中していたため外のちよつとした騒動にも気付いていなかった。昨日のことが緒を引いているのは明らかで、俗に言う現実逃避だが、さすがに巨大な音を立てて自分のすぐ側の扉が開けば、肩を跳ね上げてしまった。青子の席は廊下側なのである。

「……そ、園子、ちゃん？」

見上げるようにして見れば、彼女は肩で息をしながら開けた扉に腕を預けるように立っていたので、階段を全速力で駆け上がったきたことは容易に想像が付いた。よっぽど何か大事な忘れ物かなと青子が考えていると、園子は息を整えるのも後回しでなぜか自分に近寄ってくる。

「青子ちゃん、ちよつと来てっ」

そして本を握っていた手をがしつと掴む。意外と強い力だ。

「え？ でも青子、本読んで……」

「そんなのは後回しよ、ほら急いでっ」

急きたてられて、何かなんだか分からないまま、青子は帰り支度をさせられ、そのままやたら元気な園子に引つ張られていった。

「きつと青子ちゃん、驚くわよー」

ついでに大変楽しそうな彼女に少々怖いもの感じながら。

そして、青子と快斗は運動場の真ん中でお互いの姿を確認できた途端に、ほぼ同時に動けなくなった。それは全く文字通りのもので、腕を引つ張っていた園子は青子の制止につんのめり、快斗は呼吸さえ忘れたのか、胸も動いていない。二人の距離は約5メートル。

「あ……青子？」

「かい、と……なん……で？」

「……青子、ほんとに？ オメー高校生……だったのか？」

「心配しなくてもこの学校に在籍してる正真正銘の中森青子よ！！
青子ちゃん、ほら何ぼーっとしてんの」

園子に背中をとんと押され、青子はととつと足を踏み出した。その足が二歩だったからか、次々と出て次第に駆け足になっていく。けれどそれは彼の目の前でぴたりと止まってしまった。

「か、快斗が、どうして……ここに……」

快斗は震える手で、青子の手を掴んだ。その感覚が消えない、逃げないとわかってから、彼は青子を真っ直ぐ見つめた。会えてこんなに嬉しいのに、女性は大事にしなければいけないのに、その問いにどうしようもできない怒りがこみ上げてくる。

「んなのっお前が、急に消えちまうからだろっ！ 昨日だってシヨ
ー見てたくせに何で逃げるんだよっ」

彼は自分でも制御できないままに怒鳴っていた。大声に、周囲の人間みんなが青子と快斗に注目する。特に二人は今まで温厚だったはずの快斗のありえない台詞に目を丸くしている。

「っ！？ だって……だって……あれは……」

「青子……あの後オレがどれだけ探したか……分かってんのか？」
キッドとまでは行かなくても、真剣な快斗の視線に、青子は目を見開き、たじたじとなって俯いた。

「ご、ごめん……なさい……」

「……なあ、何で逃げたんだよ？」

「そ、それは……」

顔を上げて答えようとした青子の言葉を遮って、快斗が続ける。

「やっぱオレのマジックが原因なのか？ けど、前はあんなに喜んでたじゃ「よせ快斗、それ以上青子ちゃん困らすな」

ヒートアップしかけた快斗の後ろから力強い静止が掛かった。はっとして快斗が見れば、青子は快斗を青白い顔で見つめている。更に見れば立っているのがやっこのような姿勢だ。

「あ、青子！？ どうしたっ！？」

肩に手を当てる。しかし青子はゆっくりと彼を見上げて微笑んだ。「ごめんね……青子は……快斗のマジック、大好きだよ。だから、快斗は……何にも、悪くない……から……気にし、な……」

ぐらり。咳くように話していた青子の体がふいにかしいだ。

「え……あ、青子っ、青子おっ!?!」

快斗は本気で驚いて、倒れた青子を地面に付く前に間一髪で支え地面に膝を付く。回りからも若干息を呑む声が聞こえる。青子は快斗に抱えられたまま、動く気配がなかった。

「青子ちゃんっ!?!」

ずっと見ていた蘭と園子が駆け寄ってきた。しかし快斗には見えていない。必至の形相で青子を揺さぶり続ける。

「おいっどうしたんだよ青子っあおこっ!?!」

「落ちて着け快斗っ、寝てるだけだからっ」

「え……寝て……る?」

新一の言うように、改めてみれば、彼女は規則正しい呼吸をしながら、快斗の胸に頭を預けるようにして眠っていた。

「……なんで?」

誰かに問いかける快斗に、答えたのは蘭だった。

「青子ちゃん、今日授業中もずっとこっくりこっくりしてたから、多分寝不足で調子悪かったんじゃないかな」

「それなのに昼休みも本なんか読んで、妙に神経張り詰めてたわ」

「……」

「走ったせいで、貧血起こしてるみたいだな……顔が青白いのはそのせいだ」

「……正直そこまで頭回ってなかったわ。ごめんなさい」
謝る園子に、快斗が首を振った。

「……いや、オレが尋問みたいなことしたから」

それきり黙りこんだ快斗を心配そうに蘭が見ている。新一は快斗の肩に軽く手を置いて立ち上がった。

「……快斗、とりあえず動くぞ」

「そうね、ここにいるのは少しまずいわよ?」

園子の声に言われて改めて快斗が周囲を見れば、自分達を見る目が思いのほか多いことに気がつく。そして行なったやり取りが、少しどころかなり目立ったものであることにも思い当たる。気持ちのままに行動してしまったことに、快斗は今更ながら悔いていたが、心の底からというわけではなかった。あんなに驚く青子の前で、自分だけポーカーフェイスを装うなんてとても出来なかったのだ。というより、青子に関して、そういうことが一切できなくなっていて、自分でもどうかと思うが、それでも振り回される自分はずなぜか嫌いではなかった。

「……どっか、休めるところって、ないの?」

「うーん、保健室っていう手もあるけど、勿論男子は入れないし。この際青子ちゃんちまで送っていくのがいいんじゃない? すぐ近くだしリラックスもできると思うわ」

快斗がその提案に二人の少女に口語に視線を合わせる。

「道分かる?」

「うん、私この前行ったばかりだから」

蘭が力強く頷いた。

「……そうと決まれば。行きましよう快斗君」

「あ、ああ……」

園子が立ち上がり、少しにんまりとした目で今だ跪いたままの快斗を見る。

「じゃあ、快斗君。青子ちゃんよろしくね。あ、勿論お姫様抱っこよね?」

「つつ!?!?」

快斗は初めて真っ赤になり、慌てて青子を背中に回して持ち上げた。

4人が揃って歩き出そうとしたとき、プルルルルと無機質な機会音が鳴った。新一の携帯だ。彼は少しだけ一行から離れて通話ボタ

ンを押した。

「お待たせしました……あ、目暮警部っ……あ、はい……はい、……
……分かりました。すぐ行きます」

「……事件？」

通話を終えたところで快斗がごく自然に問い掛けると、彼は振り向いて軽く頭を下げた。

「ああ。ごめん、オレは一緒に行けないけど……」

「こっちは快斗君がいるから大丈夫よ。心配しないで」

「そーいうことっ」

「が、頑張っつてね、新一っ」

「あ、ああ、ありがとな……蘭。じゃ、解決し次第すぐに行くから、青子ちゃんしっかり守れよ快斗」

背を向けた工藤新一はその瞬間、高校生探偵として駆け出して行った。

「へーあんたら、いつのまに名前で呼ぶ関係になったの？」

園子は真っ赤な蘭を半目で問い詰めながら、快斗は放心したように去っていく新一を見送っていた。

工藤新一が、女性を下の名前で呼ぶ。それがどれほどの天変地異なのか、快斗は知っているからだ。

19 本当と嘘と真実と

「……………」
青子がゆっくりと目を開けた時、飛び込んできたのは見慣れた天井だった。ちらりと視界に入った毛布の色も柄もいつものものだ。だが、そこに自分がいる理由については全く分からず、ぼうつとしていると、横から声が掛かった。

「気がついたか？」

ここで聞くはずのない声なのに、首を回せばそこに当然のように座っている彼を見て、眠気も一気に吹き飛んだ。

「か、快斗っどうして!？」

「どうしてっってお前寝ちまったから、蘭ちゃんや園子ちゃんに聞いて、お前の家まで運んだんだよ……………」

「え……………か、快斗がっ!？」

「あ、ああ元はといえばオレのせいで倒れちまった様なもんだし、……………って待てっ」

彼は勢いよく起き上がるうとする青子を制する様に額に手を伸ばし、躊躇いなく触れた。ひんやりとした手のひらが気持ちいい。ただ、そこから離れる気配が無い。やむを得ず起こしかけた体を戻しても彼は離す様子はなく、青子の顔がだんだんと赤く染まってくるころになつて漸くよしと納得して手をどけた。

「あ、青子、熱あるの？」

「いいや？」

むしろ彼が手を置いてから生まれた熱の方がそれまでよりも多い気がするが、彼はあっさりと否定した。

「じゃ、じゃあどうして？」

「……………貧血だったらしいから。無理に起きるとまた目一回るぞ」

「……………あ、うん、分かった」

青子は大人しく布団を被りなおした。

「……快斗、青子の体、重くなかった？」

「別に……普通だろ」

「そっか……よかったあ……」

実は青子には重さというものがあまり良く分かっていない。感じられないのではなくて、世間のもの常識的な重さとその力関係が理解しきれていないのである。当然世間一般的に、男子が女子を持ち上げるのはそう難しくないとすることも知らなかった。さらに言えば、快斗が結構な時間青子を持ち上げていたことも青子は考えていなかった。

「……青子ぐらい持ち運べないでどうすんだよ」

ただぶつきらぼうにそう言っただけの快斗の言葉から、青子がそれらの事実を知ることには恐らく永久にない。

「そっか……ありがとね、快斗」

にこり。青子が微かに笑うと、なぜか今までマジックで何百ものとびっきりの笑顔を見ているはずの快斗の鼓動が跳ね上がる。そして、ポーカーフェイスが宇宙の彼方に飛んでいく。それでもぶつきらぼうを彼は取り繕う。

「っ……もともとオレのせいでこうなったんだからしゃーなーだろっ」

すると青子は軽く首を横に振った。

「……ううん。青子のせいだよ。昨日青子が逃げたりしたから、快斗怒ったんでしょ？ 寝不足なのも青子が悪いんだから、快斗は気にしなくっていいんだよ？ ごめんね……快斗」

ふわり、快斗に向かって安心させようと微笑む青子に、快斗は釘付けになっていた。気が付かない青子はなおもごめんねと繰り返す。快斗の視界には青子だけが映っていた。とびきりの笑顔だけじゃない、どんな表情でもみたいのだと、はつきりと感じた瞬間だった。青子の目にも快斗だけが映りこんでいて、それがとても幸福に思える二人の時間……を壊したのは少女の小さな、しかし控えたとは言いがたい咳こみだった。そう、古今東西割り込みに使われるアレで

ある。

「……お二人さん、あたし達もいるってこと忘れないで欲しいんだけど。特に快斗君。青子ちゃんは起きてすぐだから仕方ないとしても、あんたはあたし達の存在知ってるでしょ」

「……勿論」

「蘭ちゃん、園子ちゃんっ」

あんた呼ばわりされて顔を背けて二人を罰が悪そうに見る快斗に對して、本当に今始めて知った彼女達の存在に青子は真っ赤になりながら、慌てて飛び起きた。今度は快斗の制止も間に合わなかったが、幸いにも視界が回ることはなかったようだ。

「青子ちゃん、大丈夫？」

「う、うん。ごめんね、青子が急に倒れたから……皆にも迷惑かけたんだよね……」

俯いた青子から小さく吐き出される自責の言葉。快斗はあの日の様に青子の頭をぼんぼんと叩いた。

「青子、誰もお前を責めてねーから……顔上げろって……」

「そうよ、青子ちゃん。今日はしっかり休んで、明日元気になってくれたらそれでいいの」

「ありがとう、皆……」

青子の素直で静かな感謝が、部屋に溶けていった。

それからしばらく、4人は学校のこと、友達のことなどたわいもないおしゃべりをしていた。ただし、青子が倒れた時の話題については話し合わせたように誰も触れなかった。

「さてと、青子ちゃんも大丈夫そうだしそろそろ帰りましょうか」

6時を回って園子の告げたその言葉に、青子は半ば条件反射のように快斗の手をつかんで引っ張っていた。

「……やだっ帰っちゃだ!! まだいてよ、ねっ快斗っ」

快斗はそれを聞いて、暫し青子を見つめていたが、やがていたずらっ子のような笑みを浮かべた。

「よし、なら久々に見せてやっか」

「え……何を？」

青子の額から急に必死さが消えて、とある予感からじっとりと汗が流れる。

「んなのオレ様のマジックに決まってるんだろ。とっておきがあるんだぜ？」

「は、え、いいいいいいよっ、青子見たくないもんっ」

「……なんで？」

快斗はそこで動きを止めて、青子の顔を覗き込むように見た。楽しそうな様子は一瞬にしてなりを潜め、今は目が据わっている。

「い、いいのっ青子、ほら、蘭ちゃんたちに見せてあげなよっ、い、いっつもやってるんでしょ！ 路上で、楽しそうにっ」

怯えも手伝って切り貼りしたように歪な青子の言葉と同じくらい、快斗の顔が歪んだ。次の瞬間快斗はおもむろに手を青子の前に差し出す

ぼんっ

彼の手から鳩が飛び出す。

「……っ」

青子は目を見開いて驚き、真っ白な鳩は青子の肩にちよんと乗った。快斗はぱちんと指をならす。

ぶわっ

紙ぶきが中を舞う

「なっ」

思わず青子は目をつぶる。次に目を開けたときには、あれほどあったはずの紙がもう跡形も無かった。青子が目を開けたのを確認して、快斗が固く握りあわせていた両手を開いた。

ぽんぽんぽんっ

部屋中に泡のようなシャボン玉が後から後から生まれる。どうい
う物質で出来ているのか、簡単に割れず、ふわふわと降りてきて、
青子の手に乗った。

「…………綺麗」

青子はそれに、蕩けるような瞳を向けた。その途端それは、ぱち
んとはじけて、青子は思わず小さな笑みを漏らす。

「…………楽しんでんじゃん」

そこに不機嫌そうな声が被った。快斗が半目で少し睨むように青
子を見ていた。差し出した彼の指に、青子の肩に乗っていた鳩が音
もなく飛び立って止まる。だが、快斗の手から相棒が消えても、彼
の目が青子からそらされることはなかった。

「…………快斗…………」

「オレのマジック、嫌いじゃないよな？」

「う…………うん」

あんな反応をしてしまったのに、他になんとすべきだろうか？

青子が仕方なく頷くと、快斗はずい不久前に出てきた。

「んじやなんて見たくないって？」

半分ベッドに身を乗り出しているの、青子の本来いるべき場所
は狭くて狭くて仕方が無いが、お互いそんなことに気を回す余裕は
なかった。青子を見つめているのはちよつとやそつとのごまかしで
はのがれられそうにもない、蒼い瞳。観念してそれでも、俯いた。

「…………快斗が、ま、マジックして、笑うのは、…………ショーだからで
しょ？ だったらあの日青子にしてくれたのも、あの顔も、その…
…青子の…………青子が…………笑えばいいって、思ったから…………なんでし
よ…………」

（青子じゃなくなたって…………快斗はマジシャンだから、やるんでしょ
？）

やや長い沈黙が流れた。その後で快斗が口に出したのは、あつけない一言だった。

「……………当たり前だバーロ」

「……………へっ?」

拍子抜けする青子の前で、快斗は憤慨している。

「あのなあっマジシャンが見てる人間を楽しませないでどうすんだよっ……………大体オレのマジック見たやつは全員笑顔にならねーと困るの!」

そうでなきや親父なんか一生超えられねーだろが。青子から顔を背けてぶつぶつと呟きながら、彼はまた指先に魔法を見せた。

ぼんっ

小さな薔薇が青子の前に現れる。あの日の狭い切り取られた空間で見たのと、同じ色の花だった。

ただし、今の彼はマジシャンとしてではなく、一人の少年として青子の前に立っていて、あの日の笑顔とも、昨日とも全く違う差し出すときのぶっきらぼっちなそのしぐさがやけに新鮮で。

けれどショーよりも気持ちが悪くもつているとなぜか分かる。

「だから……………オメーがオレのマジック見て泣くなんて本末転倒もいとこなんだよっ」

言葉も態度もそっけないのに、あの日より何倍もあつたかい。

「ありがとう快斗っ」

だから青子はその薔薇を受け取ってとびっきりの笑顔でお礼を言った。

「……………べ、別にっ」

しばらく青子に目が釘付けになっていた快斗は、やがて思い出したようににやりと笑った。

「それに……………オメーの顔も、笑ってれば少しはマシになるしなっ」
何が如何変わったのか分からなくても、いきなり言われたその一

言に青子は一瞬ぼかんとしてしまった。が、次の瞬間に体を震わせて、快斗を睨んだ。

「か、快斗ー！ 青子はそんなに不細工じゃありませんっ」

「おー怒った怒った。初めて見るよなーそんな顔」

まさにここからが彼の本領発揮だった。心底嬉しそうに青子を見るその目は、マジシャンではなく年よりもいくつも小さな少年がするのと全く同じ。

「か、快斗の、バ快斗ー」

対する青子も、ムキになって反論している。

「んーだよ、だったらお前なんかアホ子だアホ子っ」

「なっ言ったわねー」

つい数秒前までのぎこちなさもムードも完全に消えて、二人は短く言葉の応酬を繰り返す。言葉そのものに意味があるのではなく、むしろ一歩間違えばのしりあいなのに、どこか暖かいのは、そこに込められた気持ちがあるからだと思われる。

ちなみに隣でありを受けた二人は、盛大に溜息を吐きながらその様子を見ていた。

「……はー、なんなのよ、あんたら。絶対こつちのこと忘れてるでしょ」

「まあいいじゃない。青子ちゃん元気になったみたいだし」

蘭と園子はその口汚いはずの言い合いを止めずに呆れた苦笑いを隠そうともしていなかった。

夕暮れ迫る狭い室内で、彼らの口げんかはしばし続いたのだった。

その間、彼女が何者なのか、当の本人すら暫し忘れていたのである。

「ところで……青子、家の人は？」

場の空気が収まったところで、快斗が問いかけた。怒りはすっかり消えているようで青子は一瞬きよんとしたが、すぐに小さく首を振った。もう大分日が暮れているのに、家には青子以外の姿は無いのだ。

「あ、お父さんと二人暮しだよ。お母さんは、青子が小さい頃に死んじゃったんだ」

そんな話を銀三から聞いていた。死ぬと言う感覚は、悪魔の彼女にははつきりとは分からないが、場の空気が一気に重くなるとは知っていたので、少々苦笑気味に言ってみる。

「……………ごめん、言にくいこと言わせたな」

急に小さくなった快斗の声に青子は笑ってみせた。

「快斗が気にすることないよっ聞かれたから答えただけだもん。お父さん、お母さんの事大好きみたいだし、青子もそんなお母さんが好きだから。それでいいの」

ここに来てすぐに、青子は銀三に写真を見せてもらったのだ。彼の妻は生きていたら、仲良くなれそうな、そんな可憐な人だった。

快斗はふつと笑って頷いた。

「……………分かった」

「あつそれとお父さんはね、怪盗キッドっていう泥棒を追いかけてるんだよっ」

快斗の顔が、新一でしか分からないくらい微かに、歪んだ。

「ええっ！ じゃあもしかしてっ青子ちゃんのお父さんって、キッド退治で有名なあの中森警部なの！？」

だが、蘭の驚いた顔と声のほうは何倍も分かりやすく皆がそちらを見た。

「うんっそうなの！ 蘭ちゃん良く知ってるねー」

青子が蘭を見上げると、彼女は何かを思い出すように絨毯を見つめていた。

「うん、実は私のお父さんが警察官で、警察内でも有名らしいの。」

キッド逮捕に命をかけている、鬼警部って」

「……………」

快斗はなんとかポーカーフェイスで黙り込んでいるだけのように見せているが、内心ショックを受けていないわけがない。よりによって青子の父親を自分が振り回しているというその事実に応にどんな罪悪感を覚えるか、想像して余りある。

「だけど怪盗キッドってむかつくよね」

突然のように出てきた青子の言葉に、その場にいた全員が息を呑んだ。

「な、何言ってるのよ青子ちゃん、キッド様のどこがムカつくの？」

「だってキッドって愉快犯でしょっ盗んだもの返したり、場合によっては捨てたりもしてるってお父さんが言ってたもんっ！ 青子は警察に余計な仕事増やすだけのキッドなんか大嫌いなんだからっ」

「っっ……………」

「キッドはさ…………お父さんがどれだけ毎回必死で警備してるのかとか、もう若くないのに、必死で追いかけてる辛さとか、そういうの全然分かってないんだよっ大体どんなに女性に優しいフェミニストでも、犯罪者は犯罪者、ねえそうでしょ、園子ちゃん!？」

「ずいずいと青子は園子に迫っていく。そんな単語を出されたら、園子だって頷くしかない。」

「…………そ、それは、まあ、ね…………でもそれは、目当ての宝石じゃないからって話よ」

ファンとして微力ながら反撃してみるが、青子はそんなことは聞き飽きたとばかりに膝をバンと叩いた。

「だったらいつ、キッドは目当ての宝石を見つけるのっ!?!? 盗まなきゃわかんないなんて変じゃないっ」

「おい青子ー、その辺にしとけよ。んなの園子ちゃんに聞いたつて、いや、誰に聞いたつて分かんねーだろ？」

快斗の疲れたような声が青子を我に返らせる。それが本当かどうか

かは快斗のみぞ知る事だ。

しかし、彼の制止は青子を現状把握させるには十分だったようで、延びきっていた背筋がしゅんとした顔と同時に丸まった。

「……そうだね、ごめん、園子ちゃん。ちょっと言いすぎた」

「まあね。確かにちよつとびっくりしたけど……青子ちゃんの言ったこと、間違つてないし別にいいんじゃない？ でも人の価値観はそれぞれなもの。だから私も怒らないし、キッド様のファンもやめないわ」

案外論の通つたことを言う園子に、青子は自然と頷いていた。

「分かった」

「よかった。じゃあ仲直りもできたことだし、今日は帰ろう。ね、

園子？」

心配そうにずっと見ていた蘭がほつと息を吐きながら園子を見やる。

「そうね……あんまり長居しちゃ悪いものね。時間も時間だし」

園子が見上げた部屋の丸いオレンジ色の時計は、6時半を示している。

「……青子は全然大丈夫なのに……」

「駄目よ青子ちゃん。大丈夫だつて思つてても、体が危険信号を出していることもあるんだから。それに……そろそろ夕飯の支度しないと……ごめんね……」

蘭は青子を気遣つてくれているが、恐らく本音も入っているのだろう。それは無理もないことで、蘭でなくても夕食時だ。空腹に気がつかなかつた青子は素直に自分を恥じた。

「……ごめんなさい……あ、そうだ。ちよつと待つてて！」

叫ぶなり青子は残りの3人が呆気にとられる前で弾丸のように部屋から飛び出していった。数分後、降りていったときと全く違うなイドタドタという煩い足音を響かせて階段を駆け上がった青子が、戻つて来ると同時に三人の前に差し出したのは、マドレーヌだった。有名洋菓子店のものらしく、一つ一つ個装されていて、チュールの

様な半透明に、上品な英字と白いレースのような縁取りが特徴的だった。

「これどうぞ！ 皆、今日は本当にありがとう！」

少し呼吸が乱れていながらも嬉しそうに言う。

園子は遠慮なくそれを受け取り、躊躇いがちの蘭は青子に押し付けられるようにもらうことになり、快斗の分はぼんつと音を立てて青子の手から消えた。

「きゃ、な、なに!?!」

直後青子から悲鳴のような驚きが上がる。

「おいおい、マジシャンは、出現させることも、消すことも自在に出来るんだぜ？」

得意そうな快斗の声が、笑みと同時に青子に向けられていた。その手にはその洋菓子が既に開けられている。

営業用では決してないそれが、無性に青子を嬉しくさせる。

(ずっとこのまま、人間として生きていたいよ)
そう思わせるには十分な幸せを青子にくれる。

「ねえ快斗……また青子に、マジック見せてくれる？」

青子は、二人が先に降りて行って二人きりの部屋の中から出ようとする快斗に、気が付いたら問いかけていた。彼が否というわけはないと分かっているのに確認せずにはいられなかった。まだ魔法は終わらない、そう信じていたかったのだ。

振り返った快斗は呆れ顔だった。

「はあ？ ったりめーだろ？」

そして、ぼんと頭に手を置かれて言われた予想以上の答えに、想像以上に安心した。

「うんっそうだよねっずっと友達だもんねっ」

青子が大きく頷くと、彼は体ごと振り返って、笑った。

「ま、オレはそのうち世界一のマジシャンになんだからよ！ 泣き虫青子をどうこうするぐらいいわけないってー」

「っーーーーっ 青子はそんなに泣き虫じゃありませんっーーーー快斗の意地悪っ」

快斗の真意が分からずに、いちいち律儀に反論してしまう、子供っぽい青子なのだった。

「今日は本当にありがとうっ 明日また学校でね」

快斗と蘭に玄関から出るなど言われて、それでも見送りがたくて、律儀に扉の敷居をまたぐことなく、扉を全開にして手を振る。三者三様に去っていく友人達の後ろ姿を見ながら青子は思った。

(快斗と、皆と……出逢えてよかった)

たとえ自分が悪魔であっても、今だけ全てを忘れ去れば、そこには嘘も偽りもない気持ちだけが残っていた。

19・本当と嘘と真実と（後書き）

時々、設定を忘れそうになるのは、私です。

20・前途多難な想い故（前書き）

一応前半最大のぶっ飛び具合です。

楽しんでいただけたら本望です。

少し空白を作ってみました。まだ少ないかもしれませんが、読みやすくなっていると嬉しいです。

20・前途多難な想い故

青子の家から帰る道すがら、和やかに話す園子と蘭の隣で、快斗はずっと無言だった。

「……快斗君、どうしたの？ さっきから黙りこくっちゃって」「……あ、いや」
話しかけられて慌てて意識を戻し園子に笑いかける快斗だが、その動きはやはり遅すぎたらしい。

「どーせ、青子ちゃんの事でも考えてたんでしょー？」
明らかに問いかけてはない半目の園子に、快斗は軽く顔の前で手を振った。

「や、ちよつと新作マジックを考えてて……」
「青子ちゃんに見せるための？」
園子はいくまでもその見方を崩さないようで、快斗は苦笑いを溢す。

「別に園子ちゃんが見てもいいんだけどなあ……」
「遠慮しとくわ、熱の入り方が違いそうだし」
ふつつと溜息をつく園子の隣で、蘭が微笑んだ。

「今ね、快斗君は青子ちゃんの事がすごく大切なんだねって話してたんだよ……あんまりイメージが違うからちよつとびっくりだねって」

「別にそんなことねーと思うけど……」
若干青くなりながら、そんなに変な行動をしただろうかと記憶のデータベースを探りだした快斗に、容赦ない爆弾が落ちた。

「じゃあビデオで撮っとけば良かったわね、快斗君が青子ちゃん抱き起こした時、あとは、部屋に着いた時のも……」
「っ！？」

もう何度目か分からないが、快斗のポーカーフェイスが一瞬にして固まる。果たしてそれはポーカーフェイスなのか判断が微妙なところだった。

「ちよつと園子っ」

「なーに蘭？ あんただつて、見ててドキドキしたでしょ？」

「……………そ、それは」

真つ赤になつている蘭を見て、快斗は天を仰ぐ。だが何より自分の中に記憶があるのだから反論の仕様がな。IQ400の頭脳は、主観的映像を客観的にして、ついでにそのときの台詞も一言一句間違えずに再生することなど、意図しなくてもお茶の子さいさいなのだ。勿論青子をベッドに寝かす時のお姫様抱っこをした感覚も、鮮明に覚えている。

「それに青子ちゃんと話してる快斗君、なんかもう小学生みたいだったもんね」

「な、なんでっ!？」

快斗が思わず園子を見ると、彼女は少し顔を上げて欠けた月を見ていた。その口がおもむろに開く。

「んー、なんていうか青子ちゃん喜ばせようと必死になつてるし、かと思えば怒らせて楽しんでるし…………はつきり言つて可愛かったわよ」

つらつらと並べ立てた後に、にっこりとした笑みが不意打ちで向けられ、快斗は暫し呆然とした後、溜息をついた。

「…………お見通しつてこと？」

げんなりと問い掛けると、この日一番の笑顔で宣言された。

「当ー然。大体私前から言つてたじゃない。快斗君は蘭似の彼女のことが好きなんだつて。この鈴木園子様には何でもばればれよ。勿論、新一君が蘭に惚れちゃったのも含めてねー」

「ちよ、ちよつと何言つてるのよ園子っ!？」

慌てて蘭が止めに入るが、逆に園子の方が戸惑っていた。

「え、違うの？ てつきり名前で呼び合ってるし、あんたたち見てたらそうだと思ってたんだけど……」

眉間に皺を寄せて過去を思い出しているらしい園子と真っ赤になっ
って固まる蘭。

「いくらなんでも断言するには早いつて。もともとあいつ女に全然興味ないんだから。いや、勿論珍しいんだけどさ……」

快斗が苦笑混じりにそう言うまで、二人は己の世界に嵌り込んでいた。

「ふーん、そう。それはそれで興味あるけど、今はいいわ。じゃあ快斗君、二人の馴れ初めも含めてたっぷり聞かせてもらおうから。ここまであたし達を巻き込んだ以上は覚悟を決めてもらおうよ？」

「……マジ？」

一応快斗は確認してみる。蘭も園子の袖を引っ張る。

「ちよつと園子……」

しかし園子はそんなことでは止まらない。

「勿論マジよ大マジ。ほら時間ないんだからちゃツちゃと話すつ！
実は蘭も聞きたいでしょ？」

「そ、それは……」

否定できない蘭と、興味津々の園子に急ぎたてられて、結局快斗は青子との出会いを逐一報告させられたのだった。

最初こそ渋っていたものの、もうどうにでもなれと一旦開き直ると快斗は説明上手だった。さすがに仕事の事は伏せるものの、突然の出逢いから今までのことを、ほとんど嘘偽りなく快斗は話して聞かせた。

しかし、話が進めば進むほど、最初は興味深々だった園子の顔はだんだんと呆れ顔に変わっていく。逆に蘭は始終優しい笑みを絶やさなかったが、逆にそれがいたたまれなかった。何よりその理由が快斗にも、はつきりと分かるところが。

改めて自分がいかに青子に出逢ってから今に至るまで振り回されているのかを再確認し、その威力に呆然とする。そしてそれが嫌ではないこともはつきりと認識した。つまり、どれほど彼女に溺れているのか、人に話すことによって快斗は漸く客観的に理解することが出来たのだった。

話し終わると、暫くその場は無言になった。だが、やがて園子が重い溜息を吐き出した。

「あのね、それともう、世間一般に『一目惚れ』っていうのよ……っていうか、あんた訂正できる？　しよつと思っ？　あたしの言葉。むしろよく訂正できたわね、今まで」

「…… 思いません」

言葉も態度も呆れかえる園子に快斗は頂垂れ、二人揃ってこの結論に落ち着いたのだった。

「でしよつね。ねえ蘭？　あんたはこの恋についてどう思う？　一度きりの出会いを必然にしちゃった快斗君の執念には感服するけど、青子ちゃんは見えた目に反せずかなりの鈍感だろうから、きっと快斗君は前途多難に……」

そんな園子の評価を含む問いかけに被るようにして、三人の間に穏やかなメロディが鳴り響いた。

「あ、私の携帯だ。ごめん先行って」

「いいわよ、ここでも。ね？」

「ああ」

蘭は暫し躊躇していたが、園子に急かされて通話ボタンを押した。「あ、お待たせ。ごめんね。うん……うんそう。今青子ちゃんの家

から帰ってきてて……うん、もうすぐ江古田駅だけど……え、あ、うん。……分かった。じゃあ」

蘭はとても嬉しそうに電話を切った。

「……誰から？」

「あ、うん新一から……事件解決したから江古田駅で待ってるって」
蘭の頬が微かに赤い。それは一目でそれと分かる表情だった。人の恋路には興味のない快斗も思わず応援したくなるほどの、淡く切ない気持ち伝わってくる。そして彼女にそんな表情をさせる親友にも是が非でも恋に落ちて欲しいと柄にもなく思う。多分それは、ありえないことより、ありえないことでは、ないはずだ。

「あらー何その言い方？ しかも電話してくるなんてもう確定なんじゃないの？ ねえ、快斗君？」

「……いやあ……あの新一が、ねえ」

園子にはまにま笑いながら、快斗は自分の想い人に似た蘭を見ながら、感慨深げに呟いていたのだった。

（オレは 青子が 好きだ）

自室のベッドで、暗闇の中で眠る前、快斗はそう胸のうちに呟いた。

なんだか妙に気恥ずかしくて、あれから事実が如何あれはつきり認めることが出来なかったのだ。今だってらしくないと分かっている。だから一度きりのことで、もう二度と、思考ですら言葉に出来ないだろうと感じた。

不覚にも赤くなった顔をこまかすように、快斗は布団を被って目を閉じた。

彼女の名前は宝石からとられたもの。

まさに怪盗が狙うにはふさわしい、最高級のジュエル

そして怪盗は狙った獲物は逃がさない。

必ず彼女を自分の物にしてみせる。

……まさかそんなことを思っていたから、こんな奇天烈なことになつたのだろうか？

夢というのは、えてして勝手なものだ。自分で見ているにも拘わらず、意思を大きく離れているような気がしてくるくらい奇想天外で、何でもありの世界。それらが縦横無尽に朝まで脳裏を駆け巡り実体験しているような気分になる。

それでも、幾つかの決め事はあるのではないかと快斗は思う。

そう例えば……目の前に得体のしれない扉が現れても、背を向けて逃れることは叶わず、開けて前に進むしかない、とか。

まさに今、こうして怪盗キッドこと黒羽快斗の身に降りかかつている事態のように。

気が付いたら彼は、白いもやの立ち込める空も地面もない場所で、巨大な真つ黒い扉の前に立っていた。それも自分のもう一つの姿である怪盗紳士の格好をして。

(んだよ……これ)

快斗はその小山のような扉を見上げるが、天辺ははるか遠く過ぎて視認出来ない。よく手入れされているらしく、まっ平らなそれは全体的に鈍く輝いているが、この扉を仮に全体が見えるほど離れてみれば、きつと快斗のこの独特の白い衣装すら、小さなシミのよう

に見えることだろう。そんな規格外の大きさだ。

夢はつまり自分の想像力。その豊かさはどこか他人事のように感心しながら、周囲を見渡してみるが、苦笑いが零れるだけだった。ポーカーフェイスが信条の怪盗でも、自分の夢の中で孤独でいる時までそれを貫く必要性は感じない。

そのくらいどこにも人影や道らしきものは見当たらなかった。

しかも、快斗の立っている、いや扉の佇むその場所にだけ僅かに踏める地面があるというこの状態は、いわば無人島に一人でいる状況と変わらない。今まで快斗の見る夢に、ここまで想定外なものはない。何か明らかに違っていると快斗の鍛え上げた第6感が警告を発した時、その場に朗々とした女性の声が響いた。

「ようこそ……黒羽快斗」

直後、彼は背後に急に気配を感じて条件反射的に振り返った。確かに誰もいなかったはずなのに、今はそこに二人の子供が立っていた。それが立てるはずのない場所であることにまず驚いたが、深く考えないことにした。答えなどでないからというのもあるが、考えるべきことが他にもあったからである。

彼等は、どちらも小学校低学年か、幼稚園ぐらいの幼さだった。ただ、なぜかその立ち方にしる纏う空気にしる、子供っぽさがかけるらない。さらに、どう見ても天使には見えないふてぶてしさが漂っているのである。

「……………あんまりじろじろ見んじゃねーよ」

黒ぶちの眼鏡をかけて、白いシャツに赤い蝶ネクタイに青いジャケットに半ズボン姿の少年がその姿に不釣り合いで、態度につり合う低い声を出す。

「そうよ…………私達だってこんなことやりにやってるわけじゃな

いんだから」

赤みがかった茶髪のウェーブしたショートヘアが特徴的な、クリム色のハイネックセーターにワインレッドのスカートを穿いた、醒めた瞳の少女が、彼の隣で溜息をつく。その声もまた子供っぽくない艶というか影があった。

「……オメーら一体何者なんだ？」

彼が、相手が子供ということも忘れてついでに自分の格好も忘れて、半目で思わず漏らしたのも無理のないことだった。彼らの声に子供としての無邪気さや人懐っこさがないのはひとまず置いておいても、その二対の瞳から感じるのは明らかに好意的なものではないのだ。しかもどちらも最初に聞いた声の主ではない。

「オレ等はこの世界の住人、そんなもってやりたかないけどオメーの助っ人だよ」

快斗を見つめる少年が吐き捨てるように言った。体全体で嫌だと訴えるかのように腕を組んで渋面を作って無駄に偉そうだ。

「……どういう意味だ？」

快斗は油断なく二人を見やった。幸い敵意までは感じないが、いつでも行動を起こせるように身構える。

少年はそんな快斗の態度に隠そうともせず呆れた。

「……オメーで、13689人目の挑戦者なんだよ、黒羽」

「挑戦？」

快斗が眉をひそめると、今度は少女が話し出した。

「そう……ここに来たものは皆、この扉の向こうにあるティア・デイズアを探すのよ。勿論そう簡単には見つけれないけど」

快斗の耳が、聞きなれない単語の、聞きなれた文字の並びを捉えた。静かに唇を動かす。

「……宝石か？」

「ええそうよ。どんな願いも叶えてくれるという、夢の世界にしか

ない代物。まあ天下の怪盗キッドなら望みはあるかもしれないわね」
言ってから初めて少女は興味ありげな視線を快斗に向ける。正体がバれていることについては今更驚かなかつた。どう転んでも夢なのだ。ただ、この二人から発せられるのは子供には持ち得ないほどのプレッシャーである。

何がなんだか分からないが、とりあえず歯向かうつもりはないと、快斗は徐に体の力を抜いた。

「オメーら一体何を勘違いしてんだ？ …… オレはそんな願い持ったつもりねーし、いくら宝石専門でも、夢の中で得体のしれねーモンに首突っ込む趣味はねーぜ」

快斗の言葉に少女はふつと瞳を翳らせた。

「ええ、そうでしょうね。でも残念だけど貴方がこのゲームから降りることは出来ないわ。なぜなら貴方は半ば強制的にある人によってこのゲームをさせられるのだから」

「質が悪りーな。オレの意見は無視かよ……」

「……そういうことになるわね、まあ諦めて頂戴」

どこか世を憐むような瞳だが、この場合その対象は間違いなく快斗だろう。

「はっ降りるのが無理なら起きるまでだ。じゃあな、もう二度とこんな所に呼び出されるのはごめんだぜっ」

快斗は二人とついでに初めの声の主に向かって捨て台詞を吐くと、意識を集中させるために目を閉じた。

「……怪盗キッドともあろうもんが戦う前からトンズラかよ」

その矢先、辺りに響いたのは、妙に馬鹿にした声だった。

ずっと黙っていた少年が、口を開いたのだ。何故自分より一回り小さい少年に思い切り上から話しかけられないといけないのか、そ

の怒りが快斗の目を開かせその場に留まらせた。

それを見て少年は小ばかにした様子でなおも続けた。

「オメーが宝石を手に入れたところで、絶対に願い事をする必要なんてねーんだぜ。ああでも、どうせ逃げるんだっけ。なら負け犬呼ばわりされても文句は言わねえよなあ？」

「……………なんだと？」

快斗の怪盗の部分が、絶対に捨てられないプライドが、口から出る声を低くし眼光を鋭くさせる。

「せっかくティア・ディザイアはビッグジュエルなのになあ。怪盗キッドが狙うにはぴったりじゃねーか。大体夢なんだ。リスクもなにもね。んだからゲームオーバーになつてからでもやめるのは遅くねーつてのに……………」

「……………やつてやろうじゃん」

彼はそう言つてから少年の話術に嵌っている自分に気が付いた。けれどそれも悪くないと思う。

快斗は売られた喧嘩は買う主義で、当然怪盗もそれは同様なものだから。

「……………んで、ルールは？」

低く問いかける快斗の瞳は、闘志に燃えていた。

そんな快斗に、少年の瞳が満足げに細まった。

「……………簡単さ。お前はこれから夜寝る度にここに来てティア・ディザイアを探すんだ。昼寝や転寝うつたねは無効だから安心しろ」

「……………ティア・ディザイアに至る道は、一目で分かるようになっていなければならないよ。その人の持つ最大限の能力で超えられるぎりぎりの難易度に設定されるわ。つまり、現実世界で出来ることは何でも出来る。ただ、気を抜いたら即アウトよ。貴方の場合IQが人智を超えているから、相当な難易度でしょうし」
「ちなみにこの扉にはメモリー機能があつて、翌日は前日までに進

んだ道の続きからスタート出来る様になつてつから心置きなく扉に飛び込んでこいよ」

「ただ、一年間の猶予があるから、無理して毎日来る必要はないわ。扉の側にあるそのベルを押せば、貴方の夢に切り替わるから」

そう言いながら、少女が扉を指差す。底には確かに赤いベルが付いていた。見上げながら快斗は一度も鳴らさないことを固く心に誓った。怪盗キッドとして動くのなら、完璧な勝利を収めたいのだ。

「で、なんらかの事情で、これ以上進むのが不可能になる・扉に入った状態で自分から目覚めてしまう、もしくは一年経つてもティア・デイズアが見つけれなかった場合、いずれにしても挑戦は終了。二度と再チャレンジは出来ねーからそのつもりで」

「そして私たちは一応貴方の助っ人よ。ずっと後ろから付いていくわけじゃないけど、何かあったら呼んで頂戴。江戸川君は化け物じみた運動神経と推理力を持っているし、私は、頼まれれば薬を作るわ。夢の世界だからどんな薬でもありよ」

「説明は以上だ。質問は？」

快斗は長い長い連携プレーにふうつと溜息を漏らした。

「……ねえよ。けど……つくづくぶつ飛んだ夢だな」

「当然じゃない。貴方が作った世界じゃないのよ、ここは」

「そう、オレ達もお前の創造の産物じゃない。オレは江戸川コナン、でこっちはハイバラだ」

「ちなみに江戸川君の漢字はそのまま、私は灰色の原っぱに、名前は悲しみの哀よ」

さらりと付け加えられた名前に、快斗は疑問を隠せなかった。

「……かなり偽名っぽいんだが」

「んなことどうでもいいんだよ。とりあえず扉を開けてもらおうか、黒羽快斗。いや、怪盗キッド」

快斗は彼の動じないその偉そうな態度にはもう諦めて、コナンが

促すままに背後の黒い扉を開けたのだった。

21・童話にはない試練

光に包まれたまま踏み出した足を一步二歩と出しかけて、慌てて快斗は引っ込めた。またしても第6感がこれ以上進むことを強く警告したのだ。

「う、うわっ」

そしてすぐにその判断が間違いではなかったと知る。光が収まったところで快斗が目にしたのは、眼下に広がる広大なジャングルだった。だが、彼の周りは一面海で、ジャングルまで視界を遮るものは何もない。そのジャングルは全方向が切り立った崖になっており、快斗をぐるりと取り囲んでいるのだ。しかもそのジャングルの奥に向かつて、丁度快斗から見て、右と左と正面に3本道が延びていた。

首だけを動かして何とかそこまで確認した。

一応足場はあって快斗は今そこに立ってはいいるのだが、動けなかったのだ。というより動いたら落ちる。つまり快斗は、今にも折れそうな直径50?ほどの円柱状の岩の上に、足の半分だけでなんとか立ってジャングルを見下ろしていたのである。ちなみに岩の高さは、ざっと30mはあるだろうか。風はないとは言え、あまりにも心もとない足場である。

「う、嘘だろー」

震える足で一步下がって恐る恐る後ろを振り返ると、コナンと哀が若干呆然とその光景を見ていた。

「なんだよこれっ!?! 道は1本なんじゃねーのかよっ」

その様子に思わず怒鳴ると、今だ気の抜けた様なコナンから返事が返ってきた。

「どつやらあんまりオメーのIQが高すぎて、強硬手段に出たみた

いだなあ。本物は1本だけだろっぜ」

「じゃあどうやって探すんだよ、その本物っ！」

「んなこと知るかよ。一つ一つ見ていくより方法はねーんじゃねーの？ オメーには翼あるんだからこんなのお手のもんだろ？」

快斗の必死の訴えにもコナンはそっけなく言い放つ。

(簡単に言ってくれるじゃねーかつクソガキがつ)

しかし、嘆いていても始まらない。警察も探偵もない代わりに、このショーはとんでもない苦難の連続になる気がするが、逃げるわけにはいかないのだ。たとえばそれが、夢の中だろっぜと。

快斗はひとつ呼吸して、この理不尽な環境に喚く心をリセットする。そして体を適度な緊張状態に持つていくため目を閉じた。

その瞬間快斗の持つ空気が明らかに変わる。まとうものは何も変わらないのに、少しお調子者の高校生マジック少年から、月下の奇術師、怪盗キッドへと。

後ろで僅かに息を呑む気配がする。キッドの気配を知れば普通の人間は恐れる。それは夢の中の住人も例外ではないようだった。そしてそれすらもキッドはくすりと笑って自信に変えてしまう。

「じゃあまず……左」

キッドは不敵に笑って、シルクハットを被りなおした。

目標と現在いる場所の高さの関係から、直線距離でなければあの道の場所にたどり着くことは不可能。ハングライダーにはエンジンが付いていないので、風がなければ下降することしか出来ないのだ。

となると、この場所から助走も付けずに飛び立って、飛び込むように一つ目の道に突入することになる。

しかし彼は恐れる様子は見せない。

「イツツシヨータイムっ」

むしろ楽しそうに宣言すると、キッドはハンググライダーを広げて、マントを翼に変え、勢い良く第一のルートに向かって突っ込んでいった。

「さて、どうなるかしらね」

彼が消えた方向をじっと見ていた哀がふいに視線を外し、言う割には興味のないような声でコナンに向かって問いかける。

「……さーな。けど、あいつなら見つけるんじゃないか？ 宝石に關してはプロだし、最初のあの場所からも落ちなかったし」

「あら、随分信頼してるのね。やっぱり血は争えないのかしら？」

「はあ？ 何のことだよ」

「別に……どうでもいい話よ」

不満げなコナンを残し、哀はさっさともやの中へと溶ける様に消えていった。

「快ー！ーっはよ起きんかいつー！！」

「へ、へーちゃん……耳元でガンガン叫ぶなよお……」

快斗はたまらず毛布を引っ張り上げようとしたが、すかさず乱暴な手がそれを体に巻きついた物ごとひっぺがしてしまう。

その寒さに快斗が漸く目を開けると、不思議そうな顔で二段ベッドの下の段に腕をつけて体を乗り出している平次がいた。つまり、起きた途端に平次の顔のドアップである。慣れたとはいえあまり見たいものじゃない。

「なんや、いつもにまして朝から疲れた顔しよってからに、どーせ昨日の夜遅うまでなんかしとったんやろ」

「……………なんもねーよ」

快斗が呻くと平次は大して気にした様子もなく、顔を引っ込めた。その後快斗は暫く自分のベッドの上、つまり上のベッドの下を睨んでいたが、やがて諦めて体を起こした。

いつものように平次の顔が視界から消えるとベッドが軽く揺れて快斗の目の前に太い制服ズボンの足が現れる。

「……………で？ 工藤はまた、推理小説読んどったんやな」

そして直後上から、彼の声が降るように聞こえて来るのも日課だった。内容は少しずつ毎日違うが。

「……………うっせーなあ、オメーのその朝の馬鹿高いテンションがオレには信じられねーよ」

「どーかん……………」

眠さも不機嫌もマックスな声に快斗が同調すると、色黒の顔がベッドの上からぬっと覗いた。新一の不機嫌が移ったかのように、少々顔が怖い。

「なんやねんな。人がこうして起こしに来たってんのに。はよ起きんと、朝飯なくなってまうで？」

このように黒羽快斗の平日は、朝に強い方である服部平次に問答無用で起こされるところから始まる。ついでに工藤新一の朝も全く同じである。それは1年の時から変わっていない。

「……………オメーはオレ等の母親じゃねーだろ」

「そんなん二人して朝弱いんやし、しゃーないやんか。オレかてこんなことしとないわ」

平次がぶつくさ言いながら、下のベッドの柵に掛けていた足を地面に下ろす。

「本当に、何でこの二人が、ルームメイトになるんでしょ？」

うなると分かり切ってるはずなのに」

開いたままだった扉から探がひよっこりと顔を出す。彼は平次とルームメイトだ。遅い平次に痺れを切らし、彼らを呼びにきたのである。既に完全な制服姿だった。

探るの言つとおり、揃って夜行性の新一と快斗は放っておいたらまず起きてこない。しかし、この二人がルームメイトでなかったらそれはそれでいろいろと問題があるはずなので、2年になってから当の二人は文句を一度も言っていない。

「……なー平ちゃん、今日のこそは朝ご飯、例のヤツじゃないよな？」

漸く頭が回転してきた快斗は、当然のようにドア付近の狭い二人部屋の数少ない剥きだしの壁にもたれ掛かっている平次に向かって、頭を押さえながら問いかけた。

「ああ、今日は玉子焼きやで、快、良かったなあ」

「おっあのふわっふわのやつかー！ やりーっ」

ガッツポーズする快斗は完全に覚醒したのかぱっちり目を開けていた。

ばちん

おもむろに快斗が指を鳴らすと、二段ベッドの下に軽い煙幕が立ち込めた。そしてそれが晴れたとき、そこには既に制服に着替え終わった快斗の姿があった。

その一部始終を特等席から見ていた平次がぱちちと拍手を送る。「相変わらず朝一番やのに見事なもんやなー快のその早業は。一体いつ仕込んでんねん」

「それは勿論企業秘密ー、なんなら平ちゃんも今度やってあげよっか？」

「止めとけよ服部、変なところ触られるぜきつと」

平次より先に、今だ少々不機嫌な声がかから聞こえた。新一が二段ベッドのはしごを伝って降りてきたのだ。一方快斗はその言われようにぷうつと頬を膨らませる。

「ふーんそんなこと言うんだ？　じゃあ、そんな新一には……っ」と
「な、何するんや快……」

平次の問いかけには答えず、快斗は無言で再び指を鳴らした。

ぱちんっ

その音と共に、先ほどよりも派手な煙幕が立ち込めて、新一はパジャマから見事に制服姿へと変化した。

……ただし……水色のセーラー服と紺のミニスカートに。

「か、かかかかか快っあ、あかんやる！！　そ、それはあっ」
予測不能の事態に平次が笑いを堪えながら、快斗を戒めようとするが、かなり楽しんでるのがばればれだった。

一方の新一は、すぐに自分を見つめる探偵たちの三日月形の目と感覚から、恐る恐る下を見て全身を振るわせ始め、やがて鬼の形相で顔を上げた。この間約5秒。

「かあいいいいとおおおーっ」

「おおっとお」

ぼむっ

わざわざその怒声を聞いてからの本日三回目の煙幕が晴れた後、快斗の姿はもう部屋のどこにもなく、新一は怒りの矛先を失い、地の底から出すような声で怒鳴った。

「あんのやるおおおおおおーっ」

そんな新一に白馬が恐る恐るといった様子で、というか顔だけを無理矢理見ながら近づいてきた。

いつの間にか蘭の隣にいた園子が、彼女の肩に手を乗せて、まるで彼氏の様に笑う。

「園子……そんなにおだてなくても勿論あげるってば」

「おはよー園子ちゃん」

「おはよう蘭、青子ちゃん。ほんとすっかり元気になってよかったわ」

「ありがとう園子ちゃん」

青子はまた飛び切りの笑顔を園子に向けた。それに対する園子の苦笑の理由を青子は知らない。

しかし、三人はおしゃべりに夢中で少し忘れていたのだ。平たく言えば昨日の大騒動のことを。

「ねー蘭？ 昨日工藤君と親しげに話してなかったあ？」

「青子ー昨日あのマジック少年と話してたでしょーー」

席に着くなり隣同士の二人を取り囲んだ女子達の口調は穏やかだが、目が一切笑っていないかった。はつきり言って暴漢に襲われた時とはまた別の意味で同じくらい、怖い。

「う、うん……ちょっと前に知り合って」「も、もともと青子の知り合いだから……」

二人はたじたととなりながらもなんとか言葉を返した。

「えーいいいなあ……紹介して欲しーい」

「あ、えつとまた今度ね……」「ごめんね、快斗男子校だからなかなか女子校には来れなくて」

まさか自分からライバルを増やしたくないという明確な目的がある蘭は、そうやってごまかしていたのだが、なぜか隣では青子も同じようにごまかしていた。そしてその理由、彼女自身が分かっている。聞いていた園子が思わず額に手を当てる位には。

「えーいーなんでよー、蘭ばっかり工藤新一と一緒にいるなんてずるーいー」

そして、一際大きな声が、蘭の席から上がり、彼女への追及は事

実上終わりを告げた。

「えー!!! 昨日新一君がいたのっ!?!」

青子の素っ頓狂な声で全員が呆然自失となったからだ。

一番最初に回復した女子が、胡乱な目で青子を睨む。

「はあ!? あんた一緒にいたじゃない、あのマジック少年とのラブシーン繰り広げながらっ」

「ら、らららら、ラブシーンって!?!」

真っ赤になる青子にずいと顔を近づけるその少女は、目が据わっていた。

「なによ、とぼける気っ!?! 彼の腕の中で気絶してたくせにー」

「あ、あれはその、不可抗力で……」

事実認識と状況打開を同時に行なうという高度作業に青子がしどろもどろになっていると、

「そうよっ、青子ちゃんも本当に貧血で倒れちゃったんだからっねえ園子」

「そうそう、あの後ちゃあんとあたしと蘭と彼で看病したんだからね」

蘭と園子が庇うように青子の前に立った。青子はいえば、初めて聞かされた自分の客観的な行動に、茹蛸状態だった。

それでも少女達はなお食い下がる。

「うらやましーんですけどー」

すると園子は彼女達に大胆な仕草で一歩近寄って顔を寄せた。

「あのね、ここだけの話だけど、彼はもともと青子を探しに来たのだからラブシーンだろうと、看病だろうとして当たり前なの! 分かっただけ?」

後ろの青子に気を遣って声を潜めながらも園子がすっぱりと言いつつ、群がっていた女子たちは一瞬呆けた。しかし、その後は口々に文句を言いながらも四方八方に散っていった。

「あ、ありがとう蘭ちゃん、園子ちゃん。あの青子、ちょっとトイレに行つてくるねっ」

何がなんだか分からないながらも、とにかく居た堪れなくなったらしい青子も、それに混じるように教室から消えていった。見送っていた蘭は軽く苦笑する。

「本当に青子ちゃん、快斗君しか見えてなかったんだね……」

「ま、あの状態じゃ無理もなかったんじゃない？ それにそういうことならいつそ土曜日一緒に皆でお茶しない？ 青子ちゃんはその二人と知り合いなんだし、蘭は新一君のメールアドレス聞いたんでしょ？」

「う、うん」

人の事には天使の微笑を見せる蘭は自分のことになる途端に年相応の少女になる。だから園子はいつでもその背中を押す役目を担っているのだ。

「だったらほら、何遠慮してんのよっ！ ぼやぼやしていると取られちゃうわよ。さっきみたいのなんてまだまだ序の口なんだから。じゃあ遅くても昼休み中には頼んだわよ」

彼女は言い残して意気揚々と自分の席へと戻っていく。蘭に自覚がないだけに『あの新一君に限ってそんなことはないと思うけどね』とは思っていても決して言えない園子なのだった。

22・似た者同士は他人の証（前書き）

私は青子ちゃんが好きです。それは間違いありません。この設定ができるのは青子ちゃんだからです。石を投げないでください。

評価ありがとうございます。励みにして頑張ります。あまりにもぶっ飛んでいるため、掲載する勇気になります。では、少しでもお楽しみいただけたら嬉しいです。

22・似た者同士は他人の証

同日の昼休み、弁当も食べ終わり、そろそろ次の授業の用意を始めるべき時間帯。ただし彼らにはその気配は全くなく、特にメールを見ているはずの新一が、そのままの体制で固まって動かない。その異常事態に最初に気が付いたのは、やはり親友である快斗だった。

何時ものようにクラスメートとふざけあっていたら、新一の携帯にメールが着た。快斗は馬鹿話を続けながらも、離脱して携帯を開く新一の様子を何気なく視界の隅に入れていた。が、待てども待てども彼はメールを読み終わらない。

数分後結局彼は、先の結論に達し、行動を起こすことにした。クラスメート達は会話に夢中で新一が時を止めていることにも気付いていない。

「新一、おーい新一ってばー」

肩を掴んで少々強めに揺すってみても顔の前で手を振ってみても、反応がない。そこで仕方がなく快斗は彼が見ていたはずの文面を覗き込んで、数秒後、なるほどなーと頷くことになった。

無機質な電子文字だが、男のメールにはまずあり得ない量の絵文字が踊るその文面は、恐らく新一にとって初の体験なのだ。しかもまた、送り主が送り主である。

『From 蘭』

こんにちは。多分そっちも今お昼休みだよな？ 突然なんだけど昨日せつかくきてくれたのに新一とはゆっくり話せなかったから、今度の土曜日のお昼から、皆で一緒にお茶しようと思っただけど、どうかな？

PS：私の友達の和葉ちゃんも呼ぶから、幼馴染の服部君を、是

非連れて来てください』

(今のコイツには何より特大ダメージだよなあ)

コイツのこんな姿、親友としても怪盗としてもあんま見られないと見ていること数分、新一が漸く動き出した。まるで今快斗が目の前に現れたかのように、目を見開いている。快斗はその期待を裏切らない動きに笑いを堪えるのが一苦労だった。

「よ、よう、快斗……実は今度の土曜……」

「あーいいよ、オレ暇だし。なー服部も土曜日暇だよなー」

「なんや快？ オレに用か？」

快斗が呼ぶよりもひときわ大きな声が聞こえ、快斗はにっと笑って人差し指を立てる。

「そうそう、久しぶりに和葉ちゃんに会えるぜ。お誘いが来てんだ」

「おお、和葉かつ！ そう言えばこの前買い物に付き合わされたつきり会ってへんなあ」

「でしょ？ じゃ、決定ね。土曜日空けといて」

「了解や……せやけどなんでまた、快に誘いが来るんや？」

「ま、細かいことはいいいじゃん。じゃ、よろしくねー」

強引に話を終わらせた快斗は、不思議そうな平次から目を離して、己の背中を覗みつける新一の方へと振り返る。

「快斗、何勝手に話進めてやがる……」

「え、だって新一がいつまでたっても動かないからメール見ちゃったし、シヨックも隠しきれないからオレが代わりに誘ったんだけど……困る？」

まさかねと自信満々な顔に書いてある快斗に向かい、新一が歯向かうことは滅多にない。疲れるだけだと知っているからだ。

「別に……」

しかし、何も言わずにほいほい話が進んでいるのは面白くないよ
うで、新一はメールをもう一度見て、そしてあることに気が付いた。
「快斗……オメーのことはどこにも書いてねーぞ？ ついでに青子
ちゃんのことも」

その声に反応した快斗がぐるりと振り返った。今までのからかい
顔から一変しており、口から出たのは絶対零度の声。

「……ふーん……新一はオレが来ると困るわけ？ そんなもって、
青子が来ないと本気で思ってたんだ」

「な、なに怒ってたんだよ。んなの勝手に来ればいいだろ」

「そう……じゃ、遠慮なく」

しかし、その後も快斗はなぜか不機嫌のままだった。

理由は至極簡単で、快斗がこのメールを送ったのは蘭で、単にそ
こまで気を回せなかったただけだというのを、IQが400もあつて
も思いつかなかった位には、青子にご執心だからである。

さらに現金なことにその後、オーケーの返事を送った新一のメー
ルを受けて園子から快斗へと連絡がきて、参加者メンバーを告げら
れ、青子ちゃんが来るから快斗君も絶対きてねと念を押されたこと
から彼の機嫌はあつという間に回復したのだった。

待ち合わせ場所は米花駅前の噴水。最初に着いたのは制服姿の新
一、快斗、平次だった。

しかし、それぞれ種類は違えど美形男子に分類される彼らは、通
行の激しいその場所において、かなり目立っていた。

「快、お前こんなすごい目線よー自分から集めようと思うなあ」

一応探偵とはいえ、高校からこちらに出てきた平次は新一ほどの

知名度はなく、また警官志望の本人もそれを強くは望まないため、先ほどから遠慮なく注がれる視線に慣れずに辟易していた。

「平ちゃん、マジシャンは人に見られてなんぼだぜ？」

「まーそうやるけど……はあ……」

ただ、幸いなことに、誰かを待っているのが特に新一の視線からして一目瞭然だった彼らは、誰にも声を掛けられることはなかった。

「へーじー！ー！！ 久しぶりいっ」

そんな元気で明るい大阪弁が、待ち合わせ時間きっかりに聞こえるまでは。

その途端平次は天の助けとばかりにその方向に向かって叫び返した。

「和葉あつ元気にしとったか！！」

「勿論や、そんな柔やあらへん」

すぐ側まで走ってきた和葉に、平次は疑り深い目を向ける。

「そーやなあ、バカは風邪引かん言っしなあ……」

「それどーという意味やっ平次いっ」

出逢って僅か数秒で口喧嘩を始めた二人は、一步も引かない。大阪出身の二人の言い争いは勢いはもちろん単に聞いているだけでも凄まじいものがある。

ただそれは、あくまでも二人の表面上の話で。

「相変わらず、仲がいいね。服部君と和葉ちゃん」

歩いて追いついてきたらしい蘭が、そんな二人を見ながら独り言のように呟いた。しかしその途端、和葉は勢いよく顔を蘭へと向けた。平次には見えないだろうが、その顔は真っ赤だ。

「ちやうねん、蘭ちゃんっ！！ アタシはな、平次のお姉さん役として、こんな往来であんまり恥ずかしいこと言わんといて欲しいって思ってるだけやねんっ」

「誰がお姉さん役や、面倒みんのはいつつオレやんか……」
ぶつぶつ言う平次は快斗にまあまあと慰められている。その平次をちらちらと見ている和葉を見ていれば、その心情は推さなくても知れるというものだ。

「……へーえ」

「なあちよつと蘭ちゃん、お願いやしからかわんといてーな」

顔の前で手を合わせている和葉に、蘭はくすりと笑っていつもの笑みに戻った。

「……ふふふ、和葉ちゃん、かわいい」

「もー蘭ちゃん」

そんな微笑ましい青春が行なわれているすぐ近くでは。

「ああ、青子ちゃん、調子はもう大丈夫みたいだな」

「うん、新一君っ心配かけてごめんねっありがとっ！」

青子が新一に向かってぺこりと頭を下げていた。

「……あ、ああ……った!？」

新一の若干赤い戸惑い顔は急にしかめっ面が変わった。彼のわき腹を、何かが強く突いたのだ。

「新一、顔似てるからって照れてんじゃねーよ」

そしてそれは当然と言えば当然な快斗の肘だった。

「ば、バーク、なんなんじゃねーよっ」

しかし新一の反論は快斗に届いてはおらず、彼は既にぼけっとな新一を見ている青子の腕を引っ張っていた。

「おい青子、勘違いすんなよ！ こいつは蘭ちゃんにオメーが似てるから戸惑ってるだけなんだからな？」

「あ……そうなんだ……」

そこで青子が急に沈んだ顔をするので、快斗は目に見えて焦りだした。

「な、なあ青子？ 実はさ、新作マジック出来ただけど、見るか

？」

「え、ほんとつ見せて快斗っ！」

猫にマタタビ、青子にマジック。途端に顔を上げて目を輝かせて快斗を見る青子に、無理矢理ポーカーフェイスを被りながら、快斗が両手をひらめかせる。コインを使ったマジックで、だんだんと増えるコインが、最後には大きな一枚のメダルになったところで、青子は惜しげもなく拍手を送った。

「快斗すっごーいっ！」

「当然だろ、このくらい軽いぜ」

「ねねっもつと見せてよ！」

青子にせがまれ、快斗は苦笑いをしながら青子を見る。

「ったくしゃーねーな……よく見てろよ」

だが、そうやって面倒くさそうに言いながらも、何も無いところから、ぽんぽんと飛び出す鳩やら飴玉やらはそう簡単になくなりそうになかった。

もともと甘いものが好きな快斗だが、今までいきなり飴が飛び出してきたことはなかったので、その理由は容易に知れる。見ていた新一がふつと笑みをこぼす位には。

「……なんや、快は快であのふわふわ髪の毛のねーちゃんにすっかりやられとるみたいやな」

いつのまにか平次が訳知り顔で新一の隣に立っていた。新一は驚きもせず頷いた。彼が快斗に放っておかれたら、和葉と口喧嘩した以上こちらに来るのは分かりきっているのだ。

「ああ……中森青子っていうんだ。和葉ちゃんと同じクラスらしい。知らずと快斗のマジックに魅入りながら返事を返していた新一は、平次の言葉の僅かなニュアンスに気付いていなかった。」

「ふーん……そんで、お前はあの、なんでかそのねーちゃんによく似てるストレートの髪の毛のねーちゃんに骨抜きかい」

新一は思わず振り返ってしまった。にやにや笑う彼の前でそれが証明だとやっつてから気付いてしまった。

「服部……オメーなあ」

「オレは探偵やぞ？ そんなもん見たら一発で分かるわ」
胸を張る平次は得意げだ。

「……………そうかよ」

自分とその幼馴染の関係を棚に上げてよくもそんなことが言えるものだとなしは溜息を禁じえなかった。

願わくば、蘭とそんな関係でいられたらと思ったことは、快斗にすら言えない、秘密である。

間もなく先にカフェで席を確保していた園子が待ち合わせ場所に到着し、7人はカフェでわいわいと楽しいひと時を過ごし、全員が、その場にいたメンバーの連絡先を確保したのだった。

数週間後、ようやく青子と出会えて、メールアドレスも手に入れて、幸せ絶頂中のはずの快斗は今、教室で珍しく真剣に悩んでいた。「なー新一、まさか今日も青子に呼ばれたりしてんのか？」

ホームルームが終わってそそくさと帰り支度を始める彼に、快斗は机に突っ伏しながら問いかける。

「あ、ああ……オレ帰宅部だから別に困りはしないけど、なんなんだろうな。こつも頻繁に……」

「あん？ なら、オレが代わりに行ってやろうか？ 喜んで代わるぜ」

「……………青子ちゃんの信頼失ってもいいならな」

冷たく返した彼に、快斗は半目を向けた。

「で？ …… 今日は何の話なんだ？ めーたんでー？」

「……分かったら苦労しねーよ。正直そろそろ話題が尽きてきてるのに」

新一が溜息をつくのも無理のないことだった。

喫茶店で会話した日から、約2週間の間に全部で5回。そしてまた今日も快斗の想い人である青子が、新一をお茶に誘っているのがある。話は大体1時間ほどで、事件にも邪魔されないし、何も女性的なことはされないため、新一も断るに断れず、今日まで付き合ってきたのだ。

「大体何が楽しいんだろーな。オレの好みのスタイルとか服とか聞いて」

「本気でわかんねーのか？ その意味」

彼としてはあの日噴水前で少し感じていた懸念が、現実のものとして徐々に押し寄せてきて、否定しても否定しても消えないというのに。

「いや全然」

「はー……」

きつぱり言い切った新一を見て、これが天下の警察の救世主と呼ばれた探偵とは思うと情けなくなる快斗だった。だが今は、嘆くよりも大切なことがある。

「新一……分かってるだろうけど、青子に手出しすんなよ。いくら蘭ちゃんに似てるからって」

新一は隠す様子もなく疲れた溜息を吐き出した。

「その忠告16回目。あと、青子ちゃんはオメーのもんじゃねー。大体そんなに心配なら会いに行けよ。明日は無理って言っとくから」

「……いい性格してるよ、新一は」

今度は快斗はため息をつく。

「あん？」

「予告状来てるだろ……オレ、今日からまた忙しくなんだよ。部屋には夜しか帰らないからよろしく」

「……………おう」

それが、いつからか、二人の合図になっていた。探偵と怪盗としての勝負の始まり。

尤も今、怪盗の方の集中力をポーカーフェイスで装わずに100%に出来るかといえば、それは難しい問いなのだけれど。

「……………たく、アホ子のヤツ……………なんで新一なんかがいいんだよっ
知能の面でも、容姿の面でも劣っているとは思えないのに。」

青子の心を知りえない快斗の苛立ちは募っていくばかりだった。

そして、もうすぐ4時になるうかという頃、江古田駅から程近い小さなケーキ屋に新一はいた。目の前の青子はココアとショートケーキを、新一はコーヒートとサンドイッチを木のテーブルに乗せて向かい合って座っている。

店の内装は自然な木の造りで、調度品も柔かい光を生み出すシンブルなランプや、ガラスで出来た花瓶など、ナチュラルな物が多い。男が入っていても自然な店で、実際店内にはちらほらと他の男性客の姿もある。こちらのことを考えてそんな場所をチョイスし、しかも毎回新たに駅近くで探して呼び出してくる、そんな青子の気の回し方は好感が持てるものだとなし新一は素直に感じる。

「新一君……………ごめんね、いつもいつもこっちに呼び出して」

そして、自分のやっていることを正確に理解している上での謙虚さも、新一がこの頼みを断れない理由だった。どうしても青子の態

度はミィハー魂から来るものとは思えず、こうして毎回付き合っているのだ。それに彼女が何を目的としているのかも、分からないではないから。

「いいよ。だつてもう、終わるんだろうし」

コーヒーを一口飲んでから優しく微笑むと、青子は大きく目を見開いた。

「ええっ何で分かったの!？」

(この辺の反応は蘭と全然違うなあ)

そう思いながらも新一は肘をテーブルに乗せ手を組み合わせ何食わぬ顔で説明を始める。

「簡単なことだよ。青子ちゃんはこの間からずっとオレについてのデータをとってる。好みの服、食べ物、場所、色、女性のタイプや髪型、本、雑誌、ゲーム、音楽……趣味、図形まできてて、もうあらかた好みについては知り尽くしてるだろうから、今日はここ数日で考えているはずの残りの僅かなものをさらって終わりかなと思っただけさ」

ところで、こうして確信を持って推理していても快斗に言わなかった辺り、やはり新一は相当いい性格をしているとは、青子の知らない事実である。

「……さすが新一君だね、やっぱり敵わないや」

感服したように言った後、青子は悪戯がばれた子供のように苦笑した。舌を出しても何の違和感もないなあと考えながら、新一は再びコーヒーをすすする。その後、怯えさせない程度に眼光を鋭くして問いかけた。

「で、何のために、こんな七面倒くさいことをわざわざ?」

一瞬青子は戸惑ったように目を瞬かせたが、にこりと笑った。その顔に嘘はない。

「勿論新一君に、素敵な出会いをと思つて！」

新一は、溜息を付きたいのをぐっと堪えた。

「……青子ちゃん、気持ちは嬉しいよ。でもオレ、そういうのには本当に興味がないんだ」

あまり強くなかったとはいえ、結局突き放すような言い方になつてしまったのが悪かつたのだろうか。今まで元気一杯だった青子が、急に表情を曇らせた。ショートケーキの乗っている皿の一部分を空るな目で見つめながら、ポツリと呟いた。

「……やっぱり……蘭ちゃんが、好きなの？」

「……や、別に蘭は……」

そんな彼女の様子に慌てて、不意打ちを否定したのが間違いだつた。青子は落ち込んでいたのが嘘のようにぱつと表情を輝かせると、新一の空いていた方の手を握り満面の笑みを向けたのだ。

「だったら素敵な出会いを提供するよっね、青子に任せて!!」

「………なんでそんなに……オレのことを？」

今更迷惑とは言えず、しかし疑問に思つたことを素直に聞いてみる。なぜ、快斗でなく、自分なのだろうと。確かに面識はあるが、この少女にそこまで考えて貰うほど、彼女と親しいわけではない。無論、今までの女の知り合いの数と扱いを考えたら破格なのは理解しているが、それとこれとは別問題だ。むしろ青子にとつても男の知り合いのうちの一にしか過ぎないはず。羨ましくもなんともないが、彼女の中ではおそらく快斗の方が断然ウエイトが高いだろう。

「だって……青子、新一君が大好きだから。大切な友達だし。だから幸せになつて欲しいのっ」

ぼやっとしていたところにかなり切実に訴えられて、自分が真面目に聞いたというのに面食らってしまった。

「あ、ありがとう……けど、本当にこれ以上青子ちゃんの時間取ら

せるのも悪いし……」

「いいのっ青子なら、時間一杯あるんだからっ！ 新一君さえければいつでも相談に乗るから」

首を大きく振り宣言する青子を見ながら、新一は曖昧な笑みを浮かべるしかなかった。

恋の相談を受ける相手として、もしも新一が必要に迫られて選ぶなら、恐らく彼女は一番最後の選択肢にするだろう。親友の想いに向に気付かずにごうして自分を誘う辺り、全く恋愛について敏感ではないと確信しているから。

「……わかった。機会があったらお願いするよ。……でも快斗は、そういうの嫌がるだろうな」

「え？ なんでそこで快斗が出てくるの？」

「……いいや」

少し園子の言い方をまねして、試しにそう言ってみても、こうして本気で首をかしげる青子に、前言撤回、絶対にありえないと、認識を改めた新一だった。

23・途中が見えない線つなぎ

青子が、新一と蘭をやんわりと引き離すために6回目の会合をした夜。自室で机に向かっていた蘭の携帯電話が、ぶるぶると震えた。蘭は数学の問題を解くのを一時中断し、ピンクのそれを持って椅子から立ち上がり、背後のベッドの足元と壁の隙間まで行くと、両足を伸ばしてその背後の壁に座り込んだ。そこが、電話する時の彼女の何時ものスペースなのだ。

呼吸を整えて通話ボタンを押し、恐る恐る耳に当てる。着信相手は携帯を見たときから分かっていた。

「もしもし……」

『あ、蘭？ オレだけど』

「新一……こんな時間にどうしたの？」

どんな時間だろうが、嬉しくて、こうして彼と話するとき、声が弾むのを止められない。電話越しの彼の声は、蘭の心をそれほど震わせる。

『……その、突然なんだけどさ……もしよかったら今度の休みに、どっか、行かないか。例えばトロピカルランドとか……』

蘭は息を呑んだ。そこが恋人達のデートスポットであることを良く知っていたのだ。思わず背筋が伸び呼吸が早くなる。

「急にどうしたの？ まさかチケットでも手に入ったの？」

声も若干慌てたものに変わっていた。

『ああ、まあ。仕事の依頼人から、お礼にってもらったんだ。それに、なんていうか、すごくせつつかれてさ』

歯切れの悪い新一の言葉に、蘭は眉をひそめた。

「……………何の話？」

『いや……………ちよつとな』

この時、まさか自分の思惑が、反対に転がっているとは露とも知

らない青子なのだった。

『うーん土曜日は空手の練習があるから日曜日はどうかな？ 新一
空いてる？』

受話器から可愛らしい声が漏れてくる。それを聞くだけで、彼女との電話の価値があると新一は本気で考えている。そしてもう、何も知らなかった自分には戻れないとも。

「……………日曜か」

そう今も、一瞬新一の頭の中のカレンダーのその日が、既にあつた予定で点滅したにも関わらず、すぐにその光を失っていくくらい。

「大丈夫、空いてるよ……………」

『分かった。じゃあ日曜日、楽しみにしてるね』

「ああ……………急だったから、空いててよかったよ。じゃあ、おやすみ、
蘭」

『うん、おやすみ……………新一』

蘭の涼やかな声に促されるように新一は通話ボタンを切った。

正直なところ、あの出会いの日からもややもやしていたものが、青子に呼び出され、明確な言葉として問いかけられるたび、形を成していった。彼女に会うたびに、それと知らず惹かれるのを自覚していたから、具体的なものを見つけたら、後は声も、仕草も、表情も、体のパーツも全てが愛しいと想うのに、そう時間は掛からなかった。だから本当は、蘭が好きなのだと、青子に今日言えたらよかったのだが、なぜかそれを言うと、彼女が泣いてしまいそうだと変に直感して言えなかったのだ。

「オレが蘭を好きになってなんか困ること……………青子ちゃんにあんのかな……………」

(まさかなあ……)

彼が、ルームメイトがいないだけで、恐ろしいほど静かな部屋で何気なく漏らした言葉は、皮肉にも真実だった。

さて、快斗は現実世界で、パンドラの入ったビッグジュエルを探している。しかし、現在快斗がもう一つ必死になって探しているものがある。それも売られた喧嘩をかう形で。もう、おわかりだろう。「ったく、一体どこまで人をおちよくりや気が済むんだよっ」

キッドの格好をしているとはいえ、もはや完全に快斗のノリで彼はひたすらジャングルを走っていた。

「夢の世界に感情なんてないわ」
「んなことは分かってんだよっ！」

冷静な声がおうと吼える快斗は、現在……ライオンに追いかけてられていた。

まず、一本目の道に突っ込んだ直後には、巨大な大蛇がいて、進もうとすると毒針を突き刺そうしてきた。しかもそのとぐろの中心に持っているのは赤い雫の形をしたティア・デザイン。まさかこんなにすぐに本物が？ と疑いながら、取らないわけにはいかず、哀に睡眠薬を作ってもらった。それを巨大な口に見事投げ入れ、寝込んだところをなんとか奪取。

しかし、苦勞して手に入れたものは、如何見てもガラスで出来たような偽物だった。思わずそれを地面に叩きつけたら、ぱりんと小気味のよい音を立てて割れた。何故大蛇が持っていた時に割れなかったのか不思議なくらい脆かった。

しかもその先にまだまだ道は続いており、今度はライオンが襲っ

てきたのだ。しかもその首にはまた青い雫の形をしたティア・デイズァイアが首輪の下に飾りのようにぶら下がっている。だが、怒り狂ったライオンには取るとか取らないとか以前に近寄れないのだった。

「体力の限界に訴えてるわけね」

羽もないのに重力無関係に快斗の上に浮かびながら、哀が呟く。

快斗は後ろを振り返りつつ情けない声を上げた。

「とにかく何かヒントぐらいあるだろー本物か偽物かさえ分かったら、オレは狙わなくても済むんだからさあっ」

言われて哀は暫し考え込んだ。その間も二人は逃げ続ける。

「……ティア・デイズァイアはその人によって姿を変える。でも、色だけは一番守りたい色だと、そう、いわれているわ」

「一番守りたい色？」

快斗が鸚鵡返しにすると、哀が少し楽しそうに歌うように言った。

「そう、貴方にとって一番大切な色は何色かしら？ どんな色を、愛しいと想うかしら？」

問いかけに考える間もなく快斗の頭に浮んだのは、勿論現実にいる少女だった。

「だったら……逃げるわけにはいかなーなあ」

快斗はびたりと立ち止まると漸く逃げるのをやめて、不敵に笑った。哀が途端に色を失う。

「な、何をするつもり！？ 相手は空腹のライオンよ？ 夢とはいえ、食べられたらゲームオーバーなの分かってるでしょうっ」

「……だいじょーぶ。食べられるつもりはねーよ」

にやつと笑うと彼は身近にあった木に身軽に登って行き、ハングレライダーを広げて飛び立つと、木に向かって突進してきたライオンの背中に見事に着地した。

「な、なんて大胆不敵なの……」

哀が安堵しながらも呆れる側から、キッドとなった快斗は獰猛に暴れるライオンの首をまさぐってティア・ディザイア付きの首輪を手に入れた。怪盗らしく器用に鍵も外して。

「ほい、一丁上がり！　じゃそういうことで……」

そして飛び立とうとして彼は目を剥いた。自分の目の前、つまり暴れまわるライオンの正面には哀がいたのだ。彼女は浮かんでいるとはいえ恐怖からか動かない。ライオンが飛びあがれば、確実に爪にその体は引き裂かれる位置にいる。

迷ったのはコンマ数秒。哀に向かって、キッドは飛んだ。

「な、何するのよ!？」

「……助けた相手に向かってそれはないんじゃない、哀ちゃん？」

木の枝にぶつかりながらも哀を間一髪で抱え上げた彼は、低空飛行を続けながら後ろを振り返った。しかし、足音はしない。

その後暫く飛んでもライオンが追ってくる気配はないので、キッドは地面に降り立ち、哀を降ろした。

「盗られたら即用済みってことが……」

冷静に状況分析する。哀は目の色を変えて彼のスーツのジャケットを引つ張った。

「何で助けたりするのよっ!？　あなたが死ぬところだったじゃない。あたし達夢の住人は、別に死んだりしないからほっとけばいいでしょうっ」

「でも……噛まれたら、痛いんだろ？」

「そ、それは……」

言葉を詰まらせる哀に微笑むと、キッドはどこからともなく取り出した絆創膏を自分の手首に張った。

「……随分用意がいいのね」

「この姿の時は怪我なんて日常茶飯事だからね。さて……」

彼は手当てを終えると、懐から戦利品を取り出して、空に掲げた。さすがに太陽は覗き込まなかったが、もはや癖なのである。

「青……か」

彼の大切な色は確かにこの色。しかし、とキッドは顔を歪める。

この青はとてつもなく、冷たい印象を持っていた。大切な色のはずなのに、こうやって固めると何かが絶対的に違うのだ。

キッドは徐にその青いティア・デザイナーを地面へと投げ捨てた。

「……な……なにを」

哀が目を見開く間に、独特の砕け散る音がした。

「こんなんじゃない……」

「……ためらいがないじゃない……見当は付いているの？」

静かな問いかけに、キッドは首を振った。

「いいや、けど、凄く大切な色なんだ。絶対分かる。ただ、見てみないと分からない気は、する」

「そう……じゃあ私はそろそろ戻るわ。また薬が欲しかったら呼んで頂戴。力になるわ」

「……ああ、ありがとう、哀ちゃん、助かったよ」

「それが私の仕事だもの」

そっけなく答えた哀は、キッドが見ている中で、空間に溶けるように消えていった。

「青子の……色」

足元に散らばる青い破片を見ながら、キッドである快斗は考える。一体何色なのだろう。名前は確かに青い。でもまさにその色の集合したこの宝石には激しい嫌悪に近いものまで覚えた。

かの少女を表す色、幸せな色は、どこにある？

考え込んだ時、羽音がした。大きな空気抵抗を受けた際に聞こえ

る特大の羽ばたきの音だ。振り返った快斗は、思わず呻いた。

「う……………うそだろおっ」

快斗に見えたのは巨大な鉤爪だけだった。

直後快斗は大鷲に襟首をむんずと掴まれて、はるか彼方に運ばれていった。

「ありえねー」

快斗のティア・ダイザイアもとい、青子の色を探す旅は、まだまだ続くようだ。

「らんちゃん、今度の日曜日、青子とショッピングに行こうよっ」
翌日の放課後、教室を出かけた蘭は駆け寄ってきた青子に呼び止められた。

「あ、ごめんね青子ちゃん。その日はもう約束があるの」

本当に申し訳なさそうに蘭が青子の顔の前で手を合わせる。

「えーそんなー！　ねえ誰と、どこに行くの？　もし大丈夫なら青子も連れてって？」

「ごめんね。新一にトロピカルランドに誘われたんだけど、事件解決のお礼に招待券をもらったからしくて、2枚しかチケットないみたいだから、青子ちゃんは連れて行けないの……………」

「……………」
今時そんなデートの常套句を素直に信じ切るこの純粋な少女には、罪はない。

だが、青子は蘭の言葉に反応しなかった。あまりにも信じられないことを聞いたと言いたげに愕然としているので、蘭は彼女の肩を

トンと叩いた。

青子が我に返ったように蘭を見て数度瞬きする。そんなことをされれば、たとえ自分に全く非がなくても罪悪感を持ってしまつのが蘭という少女なのだった。

「ほ、本当にごめんね青子ちゃん。今度は一緒にショッピング行く？ ね」

「ううん、いいの。デート、なら仕方ないもん」

青子はそう言いながらも、おぼつかない足取りで、教室から出て行った。蘭が急いで追いかけてよとする。

「蘭と新一君、ますますいい感じよねー。ついにデートかあ」

能気な声に足止めを食らった。

「ちよつと園子っそんなこと言ってる場合じゃ。あ、青子ちゃんっ待って」

しかし、不思議そうな彼女を置いて、教室から出た蘭が、青子を見つけることは結局出来なかった。それは彼女が階段を下って校門の方へと走っていったからである。

青子は怯えたような顔で、目の前に広がる空をずっと眺めていた。彼女は今、屋上にいた。

飛行機雲が目の前で延びていく。その白さとぼやけ具合が自分の心境と重なった。

飛んだ跡がくっきりみえるのに、それは正しく進んだ奇跡ではない、しかし不自然ではなくぶれる、その形が。

「かーい、そんな怖い顔してどないしてん？」

「日曜日はキッドの予告日ですよ？ そろそろ準備をしなくていいのですか？」

放課後の教室でほぼ同時に種類の全く違う質問をされて、快斗はのろのろと突っ伏していた顔を上げた。

「……平ちゃん、別に何でもねーから。白馬、オレはキッドじゃねーって何度言ったらわかんだよ」

「まあ、いいでしょう。工藤君抜きとはいえ、僕達を侮らないでくださいな。日曜日は楽しみにしていますから」

そして、探はそれ以上は何も言わず、教室を出て行った。

(なんだ、新一来ないのか……)

少々残念に思ったのはポーカーフェイスで綺麗に隠して、目は胡乱気に白馬を見つめている。

「はーこの勘違い野郎め……」

「まあ快のマジックはすごいさかい、疑いたなる気持ちも分かるけどな」

「平ちゃん、まさか平ちゃんまで疑ってんの？」

「んな訳あるかい。怪盗キッドがお調子者の快やなんて、天地がひっくり返ってもあらへんわ。名前は若干似とるけど、そんなんで疑うかいな」

「……ハハハ」

能天気な声に反論も肯定も出来ず、快斗はただ、乾いた笑いを返したのだった。

それから数十分後、快斗は屋上に来ていた。

「青子……今日も新一と会ってんのかなあ……」

そんなことを言いながら、今日は事件で早退しているのを知って

いる。目暮警部から連絡があったとき、快斗は教室にいたのだから。だが、理屈抜きにして、あの天真爛漫な笑顔を新一に向けて思うとそれだけで苛立つのだ。しかし、快斗はキッドとして、予告日に向けて動かなければならない。いつまでも高校生の思考ではいられない。新一は今のところ青子に興味を示す気配がないので、それを信じるしかないのである。

寝転がって見上げた青い空に映える白い飛行機雲は、まっすぐ頭上に伸びていて、まるで快斗の青子に向ける気持ちの様だ。軌跡を示す白と同じで偽りはない。

連絡先だつて知っている。会おうと思えばいつでも会える。時間は、勝手に制限してはいるが、未来を考えればたっぷりあるのだ。

「しゃーねー！ とつとつこなして直接聞くしかねーか」

だから全ては日曜日が終わってから。無理矢理そう結論付けて漸く快斗は重い腰を上げたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5702y/>

Devilangel

2011年11月22日01時53分発行